

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第22集

# 原川遺跡

## II

昭和63年度袋井バイパス(掛川地区)埋蔵文化財発掘調査報告書

1989

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第22集

# 原川遺跡

## II

昭和63年度袋井バイパス(掛川地区)埋蔵文化財発掘調査報告書

1989

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

## 序

静岡県掛川市の西方、国道1号線と原野谷川が交差する同心橋一帯に原川遺跡は位置している。今も豊かな水量で流れる原野谷川を始め逆川・垂木川といった中小河川は氾濫や洪水を繰り返しながらも古代から多くの恵みを人々にもたらしてきた。また絶えず東西交通路の大動脈の中で生活文化が生み出されてきた地域でもあった。東には領家遺跡が弥生時代から奈良・平安時代にいたる遺物を散布する地城として戦前から注目された。その西北にあたる原川地区一帯も広く遺物が散布する地城として知られていたが、その実態は不明のままであった。近年袋井バイパスの着工に伴う埋蔵文化財の発掘調査が対岸の袋井市側の坂尻遺跡でも行われ、遠江国佐益郡衙跡である事が明らかになった。掛川市側についても同心橋の掛け替え工事に伴い埋蔵文化財の事前調査として本調査が計画され、この地域に初めて本格的な発掘調査が行われた。

5年間にわたる調査の結果、遺跡は弥生時代・古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の各時代にそれぞれの特色を持った複合遺跡で在ることが明らかになった。すでに弥生時代については『原川遺跡I』において掘立柱建物群と土器棺墓群からなる居住域と墓域が区別された集落について報告し、中期初頭の丸子式の良好な遺物を紹介した。特に土器棺については脂肪酸分析を行いこれが幼児葬棺であることを確認している。

今回の『原川遺跡II』は古墳時代を対象とし、県内では調査例の少ない古墳時代中期から後期にかけての堅穴住居と掘立柱建物群からなる集落跡を報告できた。また造り出しを持つ可能性の強い古墳の周溝からは円筒埴輪や形象埴輪が得られ、中でも復元された家形埴輪は従来とは異なるものであり注目される。沖積平野でも埴輪を持つ小型古墳が存在しそれが集落の在り方の中で明らかとなった意義は大きく、まだまだ明らかでないこの地に広がる古墳文化の可能性を指し示すものである。

なお今後の資料整理により、奈良・平安時代では隣接する坂尻遺跡や梅橋北遺跡と同じ律令期の地方政府の一端を明らかにすることが、また中・近世では原川町の成立と東海道に沿った庶民の生活文化の一端を考古学的に明らかにすることが期待出来そうである。

調査並びに本書の作成に当たっては建設省・掛川市教育委員会・静岡県教育委員会を始めとする関係機関各位に多大な援助・協力を得ている。この場をかりて深くお礼を申し上げるしだいである。また調査を暖かく見守って頂いた地元の方々、寒暑にめげず発掘にあたった作業員の方々、地道な資料整理にあたった研究所の職員、多くの助言・指導を頂いた方々にこの場を借りて深くお礼申し上げたい。

1989年3月

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

所長 斎藤忠

## 例　　言

1. 本書は静岡県掛川市領家字原川に所在する原川遺跡の調査報告書の第2分冊である。
2. 調査は昭和57年度～昭和62年度まで袋井バイパス（掛川地区）埋蔵文化財発掘調査業務として建設省中部地方建設局からの委託を受け、調査指導機関 静岡県教育委員会・調査調整機関 掛川市教育委員会とし、調査実施機関は57年度に始め財団法人駿府博物館附属静岡埋蔵文化財調査研究所、昭和59年5月1日からは財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が引き継いで実施した。
3. 現地発掘調査は昭和57年9月1日から昭和62年12月30日まで行った。整理作業は62年度 弥生時代、63年度 占墳時代、平成元年度 奈良・平安時代、平成2年度 中・近世を対象に報告する計画である。なお、62年度現地調査を行った領家遺跡については別に報告した。
5. 各年次毎に調査概報を提出している（『原川遺跡概報』I～V）。各概報と本書の記述に差がある場合、本書の記述をもって報告とする。
6. 原川遺跡の全体を通しての「位置と歴史的環境」「調査の方法」「調査の経過」「層位的観察」「遺跡の概観」等については『原川遺跡』第1章～第5章に述べたので参照されたい。
7. 本書の遺物写真は池田洋仁氏に撮影を依頼した。
8. 本報告書作成にかかわる資料整理・図版作成等については望月節子、中川里美を中心とした稻葉多佳子、岩崎和代、今村せつ子、岩辺友子、佐々木富士子、杉山暁子、杉山節子、外岡みづ子、藤川みどり、両角治子、山本節子、小野間薰子他の協力を得た。
9. 本書は調査第二課長 平野吾郎の指導のもとに調査第三課長 佐藤達雄、足立順司の有益な助言を得て整理を担当した鈴木基之が編集・執筆した。またS F1416の遺物実測は篠原修二が行った。

# 目 次

## 例 言

第1章 古墳時代の遺構・遺物の整理の方法について	1
第2章 古墳時代の遺構と遺物	2
第1節 遺構の広がりについて	2
第2節 古墳時代の遺構の概略	2
第3節 出土遺物について	6
第4節 墓穴住居	16
S B701 S B801 S B803	
S B1101 S B1102 S B1103	
S B1401 S B1402	
第5節 掘立柱建物	23
S II701 S II702 S II703 S H704	
S H705 S H706 S H707	
S H1101 S H1102 S H1103	
S H1104 S H1105 S H1106	
第6節 土坑	33
S F701 S F801 S F805 S F807 S P1302	
S F1415 S P14227 S F14373 S F1416	
第7節 溝	41
S D307 S D308 S D501 S D703	
S D801 S D803 S D804 S D806	
S D809 S D810 S D811 S D813	
S D10B11 S D10B12 S D10B13	
S D1101 S D1301 S D1426 S D1505	
第8節 旧流路	59
第9節 古墳とその周溝 1、周溝 S D812 2、埴輪	72
第10節 その他の遺構	82
S B302 S B303 S F1414 S D1423	
第11節 その他の遺物	84
1、包含層の土器 2、石製品・土製品	
第3章 まとめ	91
第1節 出土遺物について	
第2節 古墳時代の集落の景観	
第3節 古墳と埴輪	

## 挿 図 目 次

第 1 図	古墳時代遺構全体図 (1 : 600 別添付図)	
第 2 図	部分別遺構図 (7・8・11区) (1 : 200)	3・4
第 3 図	部分別遺構図 (10区A・B・C) (1 : 200)	5
第 4 図	竪穴住居 S B701 遺構平面図 (下)、出土遺物 (上)	16
第 5 図	竪穴住居 S B801・S B803 遺構平面図	17
第 6 図	S B801 出土遺物	18
第 7 図	S B803 出土遺物	19
第 8 図	竪穴住居 S B1101・S B1102・S B1103 遺構平面図	20
第 9 図	S B1101 出土遺物	21
第 10 図	S B1102 出土遺物	21
第 11 図	S B1103 出土遺物	22
第 12 図	S B1401 出土遺物	22
第 13 図	竪穴住居 S B1401・S B1402 遺構平面図	22
第 14 図	掘立柱建物跡遺構実測図 1 S H701 S H702	24
第 15 図	掘立柱建物跡遺構実測図 2 S H703 S H704 S H705	25
第 16 図	掘立柱建物跡遺構実測図 3 S H706	26
第 17 図	掘立柱建物跡遺構実測図 4 S H707	27
第 18 図	掘立柱建物跡遺構実測図 5 S H1101 S H1102	28
第 19 図	掘立柱建物跡遺構実測図 6 S H1103 S H1104 S H1105 S H1106	29
第 20 図	土坑遺構平面図・出土遺物 S F701 S F801 S F805 S F807 S F1415 S P14227 S P14373 S P1302	34
第 21 図	土坑 S F1416 遺構平面図 (1 : 20)	35
第 22 図	S F1416 出土の一括遺物 その 1	36
第 23 図	S F1416 出土の一括遺物 その 2	37
第 24 図	S F1416 出土の一括遺物 その 3	38
第 25 図	溝 S D308・S D1301 遺構平面図 (1 : 60)	43,44
第 26 図	S D308 遺物出土地点模式図	43,44
第 27 図	S D308 出土の遺物 その 1	47
第 28 図	S D308 出土の遺物 その 2	48
第 29 図	S D308 出土の遺物 その 3	49
第 30 図	S D308 出土の遺物 その 4	50
第 31 図	S D308 出土の遺物 その 5	51
第 32 図	S D308 出土の遺物 その 6	52
第 33 図	溝 S D703 遺構平面図 (1 : 80)	53
第 34 図	溝 遺構平面図・出土遺物 (1 : 60) S D307 S D801 S D803 S D804 S D806 S D809 S D810 S D811 S D813	54
第 35 図	溝 S D1101 遺構平面図 (1 : 60) 出土遺物	57

第 36 図	溝 S D1426 S D1505 遺構平面図 (1:60) 出土遺物	58
第 37 図	旧流路 S D816 遺構平面図 (1:100)	61,62
第 38 図	S D816 出土遺物 その 1	65
第 39 図	S D816 出土遺物 その 2	66
第 40 図	S D816 出土遺物 その 3	67
第 41 図	S D816 出土遺物 その 4	68
第 42 図	S D816 出土遺物 その 5	69
第 43 図	旧流路 S D10B14 遺構平面図 (1:100) 出土遺物	71
第 44 図	原川古墳周溝 S D812 平面図	73
第 45 図	周溝 S D812 出土の土器	74
第 46 図	埴輪その 1 円筒埴輪	74
第 47 図	埴輪その 2 形象埴輪	75
第 48 図	埴輪その 3 家形埴輪	77・78
第 49 図	その他の遺構平面図・出土遺物 S B302 S B303 S F1414 S D1423	83
第 50 図	包含層出土遺物 その 1 (西側部分 1 区 3 区 5 区 12 区 13 区)	85
第 51 図	包含層出土遺物 その 2 (中央部分 7 区 8 区)	85
第 52 図	包含層出土遺物 その 3 (東側部分 14 区 15 区)	87
第 53 図	石製品・土製品実測図 (1:2)	88
第 54 図	古墳時代遺構概念図	94
第 55 図	古墳・埴輪出土位置想定図	95

## 挿表目次

第 1 表	古墳時代出土遺物模式図	6~15
第 2 表	古墳時代掘立柱建物柱穴一覧表	31~32
第 3 表	埴輪觀察表	80~82
第 4 表	静岡県内埴輪出土遺跡一覧表	89~90

## 図版目次

図 版 1	古墳時代面発掘区位置図
図 版 2	7 区古墳時代面全景 (航空写真 昭和58年撮影)
図 版 3	8 区古墳時代面全景 (航空写真 昭和58年撮影)
図 版 4	1, 10 区 B 古墳時代面全景 2, 11 区 A 古墳時代面全景
図 版 5	11 区 B・C 古墳時代面全景
図 版 6	3 区東側部分全景 ( S D308・S D307 中心)

- 図版 7 穴穴住居 1. SB701 2. SB803  
図版 8 穴穴住居 SB801  
図版 9 穴穴住居 1. SB1101 2. SB1102 3. SB1103  
図版 10 掘立柱建物 1. SH701 2. SH702  
図版 11 掘立柱建物 7区南側柱穴群  
図版 12 掘立柱建物 1. SH704 2. SH705 3. SH707  
図版 13 掘立柱建物 1. SH1101 2. SH1102 3. SH1103  
図版 14 掘立柱建物 1. SH1104 2. SH1105 3. SH1106  
図版 15 土坑 1. SF701 2. SF801  
図版 16 土坑 1. SF1416 出土状態 2. 出土遺物(集合)  
図版 17 溝 SD308(南より) 全景  
図版 18 溝 SD308 出土遺物(集合)  
図版 19 溝 1. SD1426 2. SD1505  
図版 20 旧流路 1. SD816(8区A) 2. SD10B14(北より南を見る)  
図版 21 原川古墳周溝 SD812(8区A)  
図版 22 穴穴住居出土遺物 SB701 SB801 SB803  
SB1101 SB1102 SB1401  
図版 23 土坑 SF701 SF801 出土遺物(上)  
土坑 SF1416 出土遺物(下) その1  
図版 24 SF1416 出土遺物 その2  
図版 25 SD308 出土遺物 その1  
図版 26 SD308 出土遺物 その2  
図版 27 SD308 出土遺物 その3  
図版 28 SD308 出土遺物 その4  
図版 29 SD816 出土遺物 その1  
図版 30 SD816 出土遺物 その2  
図版 31 SD816 出土遺物 その3  
図版 32 SD816 出土遺物 その4  
図版 33 SD816 出土遺物 その5  
図版 34 SD812 出土遺物 その1 円筒埴輪  
図版 35 SD812 墓輪出土状況 円筒埴輪(上)、家形埴輪(下)  
図版 36 SD812 出土遺物 その2 形象埴輪(人物)  
図版 37 SD812 出土遺物 その3 形象埴輪(馬具、家)  
図版 38 SD812出土遺物 その4 形象埴輪(家)  
図版 39 他の他の遺物 その1  
図版 40 他の他の遺物 その2  
石製品・土製品

# 第1章 古墳時代の遺構・遺物の整理の方法

## 1、遺構の標記

『原川遺跡II』は原川遺跡の古墳時代の遺構・遺物を整理の対象としている。これは『原川遺跡I』でも述べたように本遺跡が弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世のそれぞれに特色をもつ複合遺跡であるため、各時代毎に報告することにしたためである。検出した遺構は当研究所の整理記号で『原川遺跡I』に準じて標記した。各遺構の記号は下記の通りである。

遺構の標記  
方 法

SH	孤立柱建物跡	SB	竪穴住居跡	SP	柱穴・小穴
SD	溝 (IH河道を含む)	SF	土坑	SX	その他
SE	井戸	SK	畦畔		

『原川遺跡II』では原則として縮尺を遺構は1/60、遺物は1/3で表示し、例外は個別にその縮尺を表示した。

## 2、全体図の作成方法

古墳時代の遺物は調査区の全域から検出されているが、遺構については『原川遺跡I』基本層序にも述べた通り奈良・平安時代、また区により中・近世の遺構まで同一調査面で重複して検出されている。このため遺構の整理は、まず区毎の遺構カードの作成を進める中で個々の遺構の検討・抽出・時期決定に努めた。特にピットについてはその中に含まれる遺物を下限として調査状況を参考にしながら各時期に当てた。無遺物の柱穴は調査所見などから最も妥当な年代に含めたものもある。

遺構の検討  
方 法

このような個々の検討に基づいて第1図(別添付図)の古墳時代遺構全体図を作成した。この中で西側部分に当たる1区・4区・6区・9区・12区については奈良・平安～中・近世までの遺構が中心で古墳時代の遺構と限定できるものはなかったが、遺物は出土しているため、区域のみ図示した。3区は溝SD308以外は奈良時代以降の遺構の重複が激しく、竪穴住居の一部とみられる遺構についてはその形状が定かではないためSXとして他の遺構の中で述べた。柱穴は古墳時代の遺物が明確なもの以外は隣接した区とのつながりから無遺物の柱穴も含め、奈良・平安時代の図に掲載した。また5区のSD501は無遺物であるが現地調査の所見に従って図示した。7区・8区・10区・11区は奈良時代以後の遺構は少なく、また下層の弥生面との間には間層があるため、比較的古墳時代の遺構としてのまとまりを持てた。しかし北東から西南にかけて平行する溝については平安時代とみられるため、古墳時代の図面からは除いた。14区・15区については遺構の検討の結果ほとんどの柱穴が奈良時代以降と考えられたので確実に古墳時代と認定できるものだけを全体図に図示した。

遺構全体図  
の 作 成

## 3、遺物の整理

遺物については古墳時代の遺構出土の遺物を中心に接合・復元に努め、実測図の完成したものから土師器・須恵器・土製品(含埴輪)別に遺物カードを作成して遺構毎に整理した。特にまとまりのあるSD1416、SD308からの出土遺物やSD812からの埴輪片の接合、復元には手をかけた。また包含層遺物についても図化に努めた。遺物写真は6×7版の中型カメラを使用して撮影した。主要な遺構遺物は遺構平面図版中にその出土地点、また断面図中に出土レベルを示すように努めた。

遺物の整理  
方 法

## 第2章 古墳時代の遺構と遺物

### 第1節 古墳時代の遺構の広がり

古墳時代の遺構は遺跡のほぼ全域で検出されている。層位的にみると東側の14区・15区の一部に奈良・平安時代の遺構面と考えられる薄い灰色粘土層と古墳時代の遺構面と考えられる黄褐色粘土層の違いがみられるものの、全体的には弥生時代のように古墳時代と奈良・平安時代とは分層できず、中・近世の居住域や水田跡の下から同一の遺構面の中で調査している。

**集落の範囲** 集落の範囲については西端の12区・6区では古墳時代の遺構を検出していないが両区とも他の地区より高い海拔の方向にあるため、後の時代や原野谷川などの影響で遺構面が削り取られている可能性が強い。西側の坂戻跡では古墳時代の集落が確認されており西側に連続していると考えるほうが自然である。南側については11区の南側と西側、14区の南側で住居跡が南に伸びる事が確認されている。隣接する掛川市の市営住宅でも古墳時代の遺物が採取されていることや、原川遺跡の古墳時代の集落が位置する海拔16.5mの等高線が南に伸びる事からも集落はこの方向にも広がるものと見られる。北側についても10区で旧流路 SD 10 B 14 の左岸より上部器の集中部が見られる。8区の旧流路跡 SD 816 の左岸にあたる14区でも古墳時代の集落の一部が検出されていることから、旧流路 SD 10 B 14 と SD 816 の左岸側の自然堤防上にも集落の広がりが考えられる。東側については14区の東端で中世には形成されていた旧逆川の後背低地により、古墳時代の遺構面が切られる箇所があることから当時はもうすこし東に伸びていた遺構面が逆川により削りとられていると見られる。

### 第2節 古墳時代の遺構の概略

古墳時代の遺構は集落跡を示す竪穴式住居・掘立柱建物跡・溝などと墓制を示す古墳の周溝、旧原野谷川の支流の流路跡などが主要なものである。

**竪穴住居** 竪穴住居跡は7区で1軒(SH 701)、8区で2軒(SB 801、SB 803)、11区で3軒(SB 1101・SB 1102・SB 1103)、14区で2軒(SB 1401、SB 1402)と建替えも含め計8軒調査している。いずれも平面形は方形で4本柱を持つものが多く竪穴は見つかっていない。SB 1401 からは管玉が出土している。

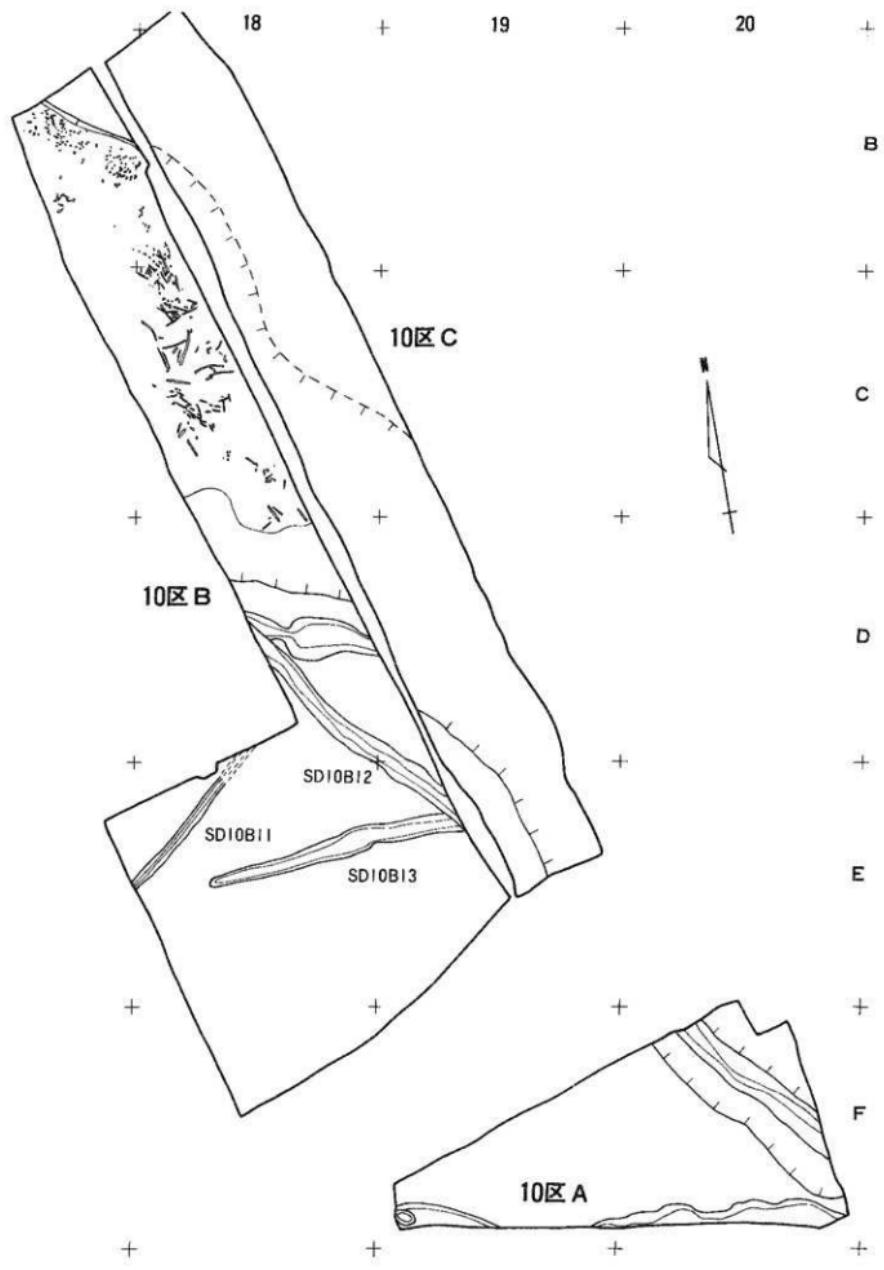
**掘立柱建物** 掘立柱建物跡は7区で7棟(SH 701、SH 702、SH 703、SH 704、SH 705、SH 706、SH 707)、11区 A・B・C で6棟(SH 1101、SH 1102、SH 1103、SH 1104、SH 1105、SH 1106)の計13棟が調査されている。その内訳は2間×3間 1棟、2間×2間 7棟、2間×1間以上 2棟、2間×1間 2棟、1間×1間 1棟である。2間×2間のものは純柱建物のものが多く建替えの跡もみられる。

**土坑** 土坑はSF 701、SF 801、SF 1416などがあり、中でも SF 1416 は大量の土師器の一括遺物を含んでいる。溝は3区で検出した SD 308 (SD 1301 に続く) から大量の土師器が出土している。他にも SD 307、SD 703、SD 801～SD 813、SD 1101、SD 1426、SD 1505

**溝** SD 308 などがある。また原野谷川の旧流路跡は SD 816 と SD 10 B 14 を調査している。SD 816 は多くの遺物を含んでいる。



第2図 部分別造査図(7・8・11区)(1:200)



第3図 部別別構造図 (10区A・B・C) (1 : 200)

**原川古墳  
沖積平野に立地** 古墳は8区で検出されている。残存していたのは周溝SD812のみであるが円墳で造り出し部分を持つと考えられる。周溝からは円筒埴輪や形象埴輪が出土しており伴出した須恵器より5世紀後半～末と考えられる。沖積平野でも古墳が形成されていたことを指し示す良い調査例である。

### 第3節 出土遺物について

#### 坂尻遺跡 遺物模式図

#### 器種分類

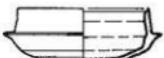
原川遺跡から出土した古墳時代の遺物の大多数は土器であり、須恵器よりも土師器が圧倒的に多い。しかし土師器の中でも古式土師器については包含層中に若干含まれるもの、図化できるものはほとんどなく、土師器の大部分は須恵器が出現した以後のものである。図化できた遺物の量は多くないが、中には溝SD308や土坑SF1416の様にある時期の土師器の組成を示す良好な資料も含まれる。しかし、この地域全体の土師器の器種構成や編年のためには、まだまだ今後の資料の増加が必要である。幸い、原川遺跡に先行して原野谷川の対岸で袋井市教育委員会により調査された坂尻遺跡の古墳時代の報告書には出土遺物の模式図が示されている。このため原川遺跡でも図化できた全遺物を坂尻遺跡の報告書の出土遺物模式図に準拠しながら器種分類した。その中で須恵器については坏蓋と坏身を、土師器については坏・碗・高坏・堆・壺・鉢・瓶についてそれぞれの特徴による分類を以下に示した。坂尻遺跡の分類に当てはまらない土器もあるため分類記号については便宜的にアルファベットの小文字a, b, cを用いた。分類については出土した器形の全種類を示す事に重点を置いたため、あくまで形式的な分類によるものであり、編年的なものではない。以下本文中にたとえば「須／坏蓋b」の様に表記してあるものはこの模式図の分類「須恵器 坏蓋b」を、また「(坏a)」は「土師器 坏a」をそれぞれ示している。

第1表 古墳時代出土遺物模式図

#### 須 恵 器

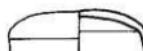
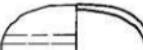
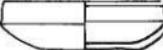
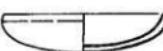
器種	模 式 図	出土遺物	特 徴
坏 蓋 a		SD812 1区包含層	天井部は欠損しているが丸味を持ち、天井部の約1/2にヘラ削りが施される。稜は鋭く、口縁部は直下にあり、口縁端部には明瞭な段を持つ。
坏 蓋 b		SB803 SD812	天井部は丸味を持ち、天井部の約1/2以上にヘラ削りが施される。稜は鋭いがaに比べれば甘くなる。口縁端部に段をもつ。 b1……口縁部が直下にあり、天井部全面にヘラ削りが施される。 b2……口縁部がやや内湾し、天井部の約1/2にヘラ削りが施される。
		SD816	
坏 蓋 c		SD308	天井部の約1/2にヘラ削りが施される。稜は鋭さに欠け、また口縁端部の段も沈線化している。 c1……天井部の丸味が少ないもの。 c2……器高が高く、天井部の丸味が強いもの。
		SD308 SD816	

器種	模式図	出土構造	特徴
坏蓋 d	A 1 	14区包含層 15区包含層	棱は沈線化し、口縁端部の段もなくなるが、天井部と口縁部の区別は明確で口縁は直下におりる。 d 1 …… 天井部は平坦で、天井部の約%程にヘラ削りを施す。 d 2 …… 天井部は高く、ヘラ切り未調整であり、ヘラ削りはごくわずかである。
	d 2 	15区包含層	
坏蓋 e		12区包含層	坏蓋 d 1 が大型化したもので口径は14cm以上である。 d 1 と同じ特徴を持つ。
坏蓋 f		SF1416 SD816 SD10B14 15区包含層	坏蓋 e が小型化し始める。e 類までの天井部と口縁部の区別はなくなる。いずれも天井部はヘラ切り未調整である。
		SF1416 1区包含層	口径が11~12cmと坏蓋 f より小型化する。 g 1 …… 坏蓋 f が小型化したものである。 g 2 …… 天井部が丸味を持ち、口縁端部はやや内傾する。
坏蓋 g		SD816	
		SD1101 1区包含層 5区包含層	口径10cm未満の最も小型化するもの。 h 1 …… 天井部はヘラ切り未調整でノタ目や指顎圧痕が残る。
		SD816 14区包含層	h 2 …… ドーム型で天井部が高く、全面をなめらかにナテ調整している。 h 3 …… 天井部をヘラ削りし平坦に作る。全面をなめらかにナテ調整している。口縁端部が内溝する。点数は少ない。
坏蓋 h		1区包含層	
坏蓋 i		1区包含層	坏蓋 f 1 が逆転し、口縁端部にかえりがつく。器高は低く、天井部は平坦で口縁も小さい。点数は少ない。

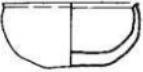
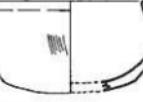
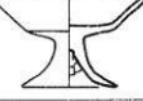
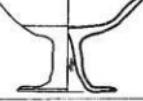
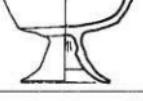
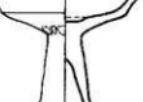
器種	模式図	出土遺構	特徴
环身 a		7区包含層	底部は平坦で、回転ヘラ削りは器高の約1/4である。受部は水平に鋭角に引き伸している。立ち上がりは高く、垂直で端部に段を持つ。
环身 b	 b 1	SD816	环身 a よりやや大型化する。底部は丸底のものと平底のものに分かれるが、立ち上がりは高くわずかに内傾する。 b 1 …… 底部は平底で、受部は鋭く、端部には段を持つが环身 a より大型である。
	 b 2	SB801	b 2 …… 底部は平底で、受部は丸味をもつ。端部には段を持つが沈線化している。ヘラ削りは底部の約1/4に施こされる。
	 b 3	SD811 SD813	b 3 …… 底部は丸底で、受部は鋭さに欠ける。ヘラ削りは底部の約1/4に施こされる。
环身 c	 c	SD811 7区包含層	底部は平坦に作られ回転ヘラ削りは低い。受部は丸味を持ち、立ち上がりは高く、わずかに内傾する。端部の段はなくなる。
环身 d	 d	SB1401 SD812	底部は平坦で、回転ヘラ削りは約1/4に施こされる。受部はやや丸く、比較的短い立ち上がりは内傾し、端部を丸めている。
环身 e	 e	SD812 3区包含層	底部は平坦で、回転ヘラ削りも約1/4に施こされ、受部も鋭く古い要素を残す。立ち上がりはやや内傾し、端部を丸めている。环身 d より口径が大型化する。
环身 f	 f 1	SD1505 SF1416	环身 c が小型化し始める。最大径13~14cmで体部にノタ目が目立ち粗雑になる。 f 1 …… 立ち上がりは环身 e の要素を残す。
	 f 2	SF701	f 2 …… 立ち上がりは低く退化し、内傾する。受部は外上方にのびる。底部はヘヤ切り未調整である。
环身 g	 g 1	SD816 SP1302 3区包含層	环身 f 2 と同じ形で最大径11~12cmとより小型化する。底部はヘヤ切り未調整である。 g 1 …… 立ち上がりは受部より高い。
	 g 2	3区包含層	g 2 …… 立ち上がりと受部とはほぼ同じ高さとなる。

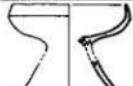
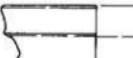
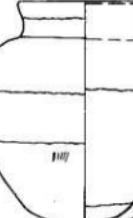
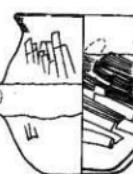
器種	模式図	出土遺構	特徴
环身 h	h 1 	SD307 SD816 1区・3区・14区・ 15区包含層	环身gがさらに小型化し、最大径10~11cmになる。底部はヘラ切り未調整である。 h 1 …… 立ち上がりは受部より高い h 2 …… 立ち上がりと受部とはほぼ同じ高さとなる。
	h 2 	1区包含層	

## 土 試 器

器種	模式図	出土遺構	特徴
模倣 环蓋 a	a 1 	SD308	天井部は平らで器高は低い。口縁部は器高の約1/2を占める。 a 1 …… 口縁部が直下におりる。 a 2 …… 口縁部はやや外反する。
	a 2 	SD816	
模倣 环蓋 b		SF1416	天井部は平らで器高は低い。口縁部は外に開き、長く、器高の約3/4を占める。
模倣 环蓋 c		SF1416	天井部は丸く器高は高い。口縁部は直下にあり、器高の約1/2を占める。
模倣 环身 a		SD816	口縁部は高く直立に近い。底部は平らに作られる。
模倣 环身 b		SD816	口縁部はやや低く内傾する。底部は平底気味である。
模倣 环身 c		SD816	口縁部はやや低く内傾する。底部は丸底である。
模倣 环身 d		15区包含層	器高は低く底部は丸底気味である。皿の可能性もある。

器種	模式図	出土遺構	特徴
壺 a		SD308 SD816	底部が球形に近い丸底で不安定なもの、口縁部は直立または内湾するが端部は三角形につまんでいる。
壺 b		SD308 SD816	底部が丸底でやや不安定なもの。 b1……口縁部が内湾し、端部をつまんでいるものの内で器高が低いもの。
		SD308 SD816	b2……b1の中で器高が高いもの。 b3……口縁部は直立し、端部はそのまま丸めているもの。体部に指頭上痕が残る。
		SD816 8区包含層	
壺 c		SD308 SD816 5区包含層	底部が平底氣味のもので安定する。 c1……口縁部が内湾するもので端部をそのままにするものとつまんでいるものがある。
		SB1102 SB1103 SD308 1区包含層	c2……口縁部が直立するもので、端部をそのままにするものと、つまんでいるものがある。 c3……壺c2より器高が高く、口縁部は一角につまんでいる。壺aが大型化して底部が平底氣味なものともいえる。
		SB803 1区包含層 SD1101	
壺 d		SF1416	底部が平底のもので口縁部はそのまま外に開きつまんでいる。
壺 e		1区包含層	口縁部は直立させつまんでいる。底部はヘラ切りにより平底とする。
壺 f		14区包含層	把手を持つ壺である。深い丸底であるが、底はやや平底氣味である。把手は左・右についていた可能性がある。
壺 a		SD308 SD816	口縁部が「く」の字状に外に開く。 a1……器高は高く、平底で口縁端部はそのままつまんでいる。

器種	模式図	出土遺構	特徴
	a 2	SD308	a 2 …… 器高は低く、平底で口縁端部は強くつまんで引き出している。
塊	b 	SD816	口縁部が「く」の字状にわずかに外に開く、体部は半球形で塊 a に近い。口径と最大径がほぼ同じものである。
塊	c 	SF1416 SD816	口縁部は短かく内傾し、最大径は口径よりもやや大きい。
高 塊	a 1 	SD308	直線的に大きく開き、稜を明顯にもつ塊部をもつ。塊部の棱線は器高の約1/2前後に位置する。直線的な脚部は脚部で「ハ」の字型に開く。 a 1 …… 脚根端部をそのままつまんでいる。空洞部は高いものと中間のものがある。
a	a 2 	SD308	a 2 …… 脚根端部は水平に引き出している。空洞部が充填している。 a 3 …… 脚根端部は水平に引き出し組曲させている。空洞部は高いものと充填しているものもある。
高 塊	a 3 	SD308	
高 塊	b 	SD1101 SD1102 SD308	直線的に狭く開き、稜を明顯にもつ深い塊部を持つ。塊部の稜線は器高の約1/2前後に位置する。脚部は「ハ」の字に開き端部はそのまま引き出している。 空洞部は高いものと中間のものがある。
高 塊	c 1 	SD10B14 SF1416 SD 816	長脚の高塊で塊部の棱線は器高の約1/2～2/3に位置する。直線的な脚部は脚部で「ハ」の字型に開く。端部はそのままつまんでいるものと、引き出しているものがある。 a 1 …… 大きく開く塊部を持つ。口縁部はさらに外反する方向で引き出している。 a 2 …… 直線的に狭く開き、稜を明顯にもつ塊部をもつ。
c	c 2 	SF1416 SD10B14	

器種	模式図	出土遺構	特徴
高 坏 d	d 1 	SD816	壇型の坏部を持つ模倣高坏である。 いづれも脚部は接合部から聞く。 d 1 ..... 口縁部を外反させる坏部を持つ。 脚部の器高は坏部よりやや短い。
	d 2 	SD816	d 2 ..... 口縁部を内溝させる坏部を持つ。 脚部の器高は坏部よりやや短い。
	d 3 	SF1416	d 3 ..... 口縁部を内溝させる坏部を持つ。 脚部の器高は坏部より高い。 d 2 と d 3 は台付鉢とよぶことも出来る。
壺 a		SD816	複合口縁の広口壺である。 口縁部を外反させたのち、さらにわずかに外反気味に立ち上がる。
壺 b		SD308 SD816	折り返し口縁をもつ壺である。 頸部はわずかに外に開き、折り返された口縁はさらに外に開き、端部はそのまま丸めているが、口縁内面にナデ調整による凹がみられる。胴部は球形で最大径は胴部中央に位置し、底部は丸底氣味であるが、狭い範囲に平担面を有する。
壺 c		SD816	口縁部がわずかに外反する壺である。 最大径は器高の約6%に位置するため肩が大きくはっている。底部はやや丸みをおびた平底である。
壺 d		SD816 SP1426	把手付壺である。胴部は球形で把手位置はほぼ中位にある。底部は平底である。

器種	模式図	出土遺構	特徴
壺 e		SD308 8区包含層	小型の長颈壺である。胴部は直胴で底部は平底である。
壺 f		SD308 SD816	「く」の字型に開いた短い口縁部を持つ。胴部最大径は下半にあり、底部と胴部の接合部に稜線を持つ。底部は丸底である。
壺 a		SD816	口縁部は直線的に長く外傾する。 a1……球形の胴を持つと考えられる。 a2……やや楕円形の胴部をもつ。 底部は平底氣味である。
		SD308	
壺 b		SD308	「く」の字型に開いた口縁部をもつ。胴部は球形で底部は丸底である。
台付壺		13区包含層 14区包含層	台付壺は器形が明らかに出来るものはなかったので、脚部のみ図示した。 脚部は外面にはタテハケ、内面にはヨコハケが施される粗雑なものである。
甕 a		SD308	甕高は低く、口縁部は短かいが「く」の字型に開く。胴部は下ぶくれである。又は跡ともみなされるが胴部に炭化の跡もみられる事から甕とした。
甕 b		SD308	小型の甕である。口縁部は「く」の字型に外反する。胴部最大径は中央部に位置する。底部は丸底で竹籠を用いた跡が残る。
甕 c		SD308	小型の甕である。口縁部は「く」の字型に外反し、胴部は下ぶくれ氣味で底部は丸底である。

器種	模式図	出土遺構	特徴
壺 d		SB803 SD816	口縁部は「く」の字型に外反する。肩部のふくらみが大きい。
壺 e		SD308	長胴型の壺で肩部最大径はほぼ中位にあり、全体的に丸みをおびる。 口縁部は「く」の字型に外反する。 底部は丸底である。調整は肩部外面はナナメ方向、また内面はヨコ方向のハケ目が施される。 e 1 …… 口縁端部をそのまま丸めているもの。
		SD308 SB701	e 2 …… 口縁部が厚く、端部をつまみ出しているもの。
		SD308	e 3 …… 底部に竹籠を用いた跡が残るもの。
壺 f		SF1416 SD1426	長胴型の壺で長目の口縁部はゆるく「く」の字状に外反する。肩部最大径は中位より上に位置し、底部は平底になるとみられる。調整は肩部外面はナナメ方向、また内面はヨコ方向のハケ目が施される。
壺 g		SD816	長胴型の壺で口縁部は大きく「く」の字に外反する。肩部の丸みは少なく、底部は丸底である。調整は肩部外面はナナメ方向、また内面はヨコ方向のハケ目が施される。

器種	模式図	出土遺構	特徴
甕 h		SF1416	胴部より口径の最大径が大きい。ゆるく「く」の字型に屈曲した比較的長い口縁部をもつ。底部には脚がつくとみられる。
甕 i		SD308	口縁部が大きく外反し、口径の大きなものである。
甕 j		SF1416 SD816	口縁部が「コ」の字状に外反する。器壁は薄手である。
鉢		SF1416	外で大きく口縁部は外に開く。底部は丸底である。
小型瓶		SD308	小型で把手は持たない。底には穿孔があいているため瓶とした。
瓶 a		SF1416	直胴型であるが上部はやや内湾する。底部は平底で円形に穿孔をあけている。
瓶 b		SF1416	直胴型で把手を持つ。口縁部は直立する。

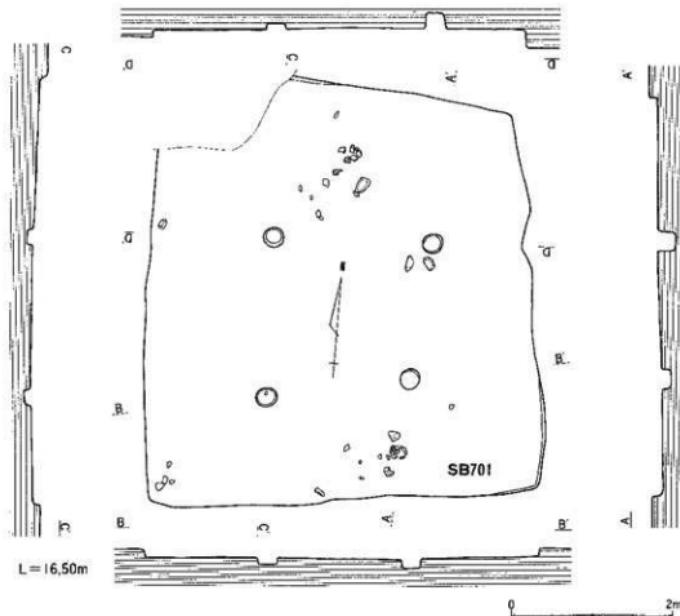
#### 第4節 竪穴住居跡

竪穴住居跡は7区で1軒 (SB 701)、8区で2軒 (SB 801、SB 803)、11区で3軒 (SB 1101、SB 1102、SB 1103) 14区で2軒 (SB 1401、SB 1402) の計8軒である。3区で満 SD 308 の西側に竪穴住居跡の一部の可能性もある遺構が検出されているが、後の時代の遺構との重複も激しく不明な点も多いためその他の遺構でふれた。

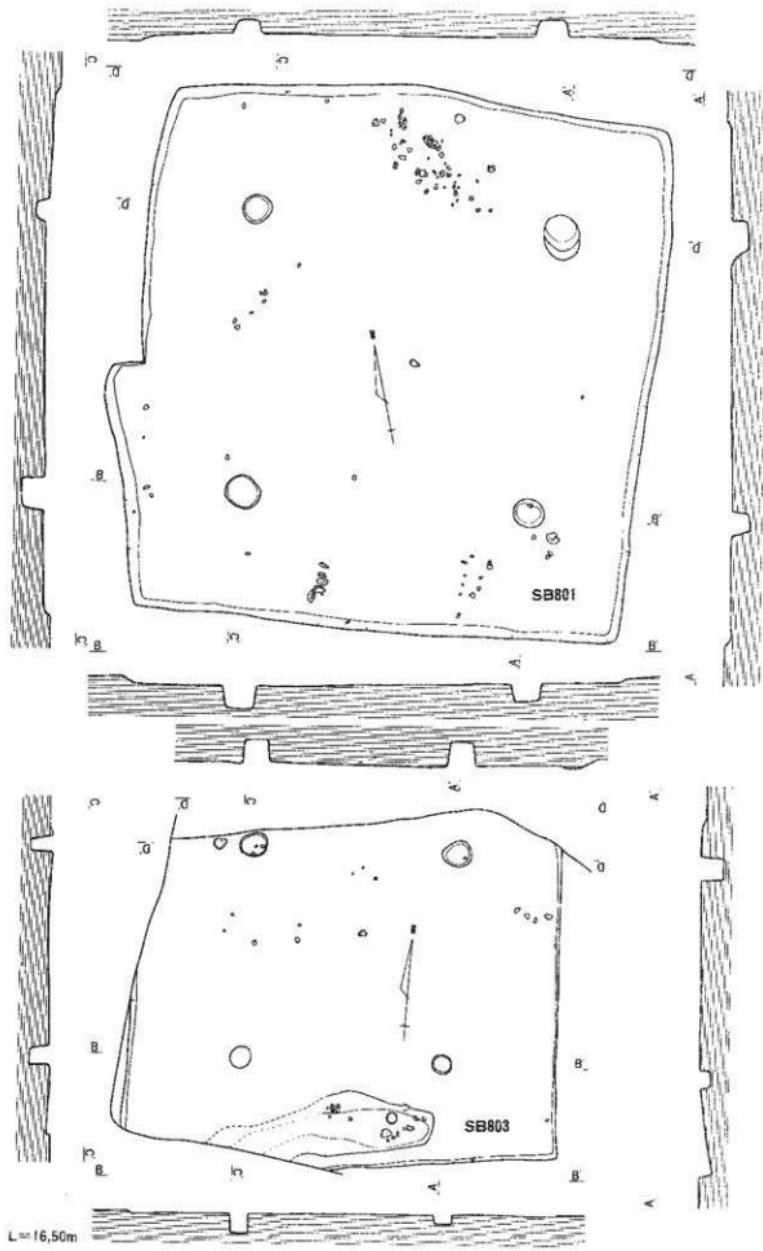
##### SB 701 (第4図 図版7・22)

規 横 竪穴住居 SB 701 は I ~ J 20 ~ 21 グリッドに位置する。北西部は擾乱坑 (建物移転時のゴミ投棄穴) によって擾乱されている。中央部で計測すると東西4.75 m、南北5.12 m の方形で、やや西側が広く掘り込みは約10cmとときわめて浅く、北東端がやや深く0.25 m 程である。平面積は24.4 m<sup>2</sup>である。4 個の柱穴がありいずれも直径0.25 m 程の楕円形で検出されている柱穴の深さも10~15cm程で、東北の柱穴でやや深く20cm程である。4 本の柱穴の中心を結ぶと菱形であり、東西は1.8~1.85 m、南北は1.75~2.0 m である。壁講および窓は確認していない。

出 土 遺 物 出土遺物は須恵器と土師器の小破片である。須恵器は壊身の底部小破片で形態不明であるがヘラ削りがしっかりしており、薄手である事から中村編年第II型式1段階以前と考えられる。左図は土師器の壺の口縁部である。口径は16.7cm、



第4図 竪穴住居 SB 701 遺構平面図(下)、出土遺物(上)



L=16,50m

第5図 積穴住居 SB801・SB803遺構平面図

0 2m

口縁部は厚手で「く」の字形に大きく屈曲し SD 308 の出土遺物に多くみられる。また土師器片の中に折り返し口縁を持つ壺の口縁部が含まれることから SD 308 同時期に位置付けたい。

#### SB 801 (第 5 図 図版 8・22)

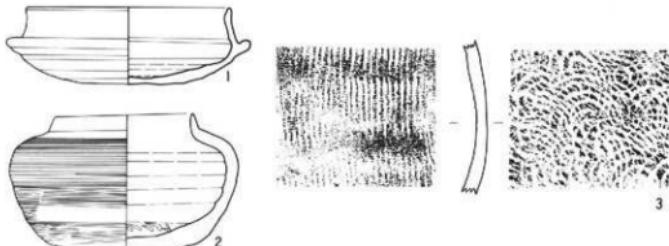
**規 模** 穴住居 SB 801 は I - 22 ~ 23 グリッドに位置する。ほぼ方形で東西 6.24 m、南北 6.76 m と大型である。平面積は 47.1m<sup>2</sup> である。掘り込みは 10cm 程度極く浅い。柱穴は 4 個あり、その内の 3 つは直径は 35 ~ 40cm の円形であり、残る 1 つも梢円形であるが短径は 40cm とほぼ同じである。柱穴の深さは 20cm ~ 40cm で南側がやや深い。4 本の柱穴の中心を結ぶと北側がやや開いているがほぼ 3.55 ~ 3.70 m の範囲に納まり正方形に近い。壁溝及び窓は確認していないが、南側に貯蔵穴と思われる直径約 1.05 m の円形で深さは 5 cm とごく浅い土坑状の窓がある。

**出 土 遺 物** 出土遺物は須恵器の环身・短頸壺・大甕破片・土師器の环・甕等である。

第 6 図 1 は須恵器の环身である。口径 12.5cm、最大径 15.5cm、器高 4.8cm を計る。底部は平坦に作られ、ヘラ削りは底部の約 1/2 である。受部はナデで丸みを持ち、立ち上がりは高くわずかに内傾する。端部は少し外反し、段を持つが丸みを帯び沈線化している。ヘラ削りが高く棱の造りにも古い要素を持つが、器形の大きさが最大径 15.5cm と大型化し受身の棱や环身口縁部の段が丸みを帯び退化しつつある時期と考えられる事から中村編年の第 II 型式 I 段階とみなされる (須／环身 b.2)。

**短 頸 壺** 第 6 図 2 は小型有蓋短頸壺の身である。口径 8.4cm、胸部最大径 14.1cm、底径 7.1cm、器高 8.4cm で口縁部から体部にかけて 1/3 が欠損している。硬質で底部と体部は別々につくられ後から接合している。内外面ともノタ目が顯著であるが、外面はていねいにカキ目で器面調整をした後、体部下部から底部にかけてヘラ削りを施している。その際作業台から切り離し逆にして作業台に固定したための当道具の同心円文が残っている。回転カキ目調整がみられ、体部上面の肩の張りを明瞭に残すなど中村編年の第 I 型式 5 段階の古い要素を持つが、底が平底化しており、また内面底部に当道具の同心円文を残すなど仕上げ工程の省略という 6 世紀段階の新しい要素を示す事から年代的には須恵器の环身と同一の年代と考えられる。

拓 3 は大甕の体部破片の内・外面のタタキ目である。外面は平行タタキで部分的に回転カキ目調整をおこなっており、自然釉がかかっている。また内面は同心円タタキ、円弧タタキが施されている。中村編年第二型式 1 段階・田辺編年 MT 15 と考えられる。土師器には环 2、高环 1、甕 1 個体以上の破片が含まれていたが実測できるものはなかった。



第 6 図 SB 801 出土遺物

## SB 803 (第5図 図版7・22)

竪穴住居 SB 803 は J-23~24 グリッドに位置する。北側は古墳の周溝 SD 812 と平安時代の溝 SD 813 に切られている。また西側と南側の一部は調査区外である。西側の一部に立ち上がりが残るため東側幅は 5.3m である。南北幅は 4.35m 以上であり、南側壁面と柱穴との距離から推定すると約 5.0m と考えられ、形はほぼ方形と考えられる。平面積は 21.7m<sup>2</sup> である。柱穴は 4 個ありいずれも径 25~30cm ではほぼ円形または梢円形である。柱穴の深さは、東南側が 10cm と浅いが、他は 25~30cm である。4 本の柱穴の中心を結ぶ距離はそれぞれほぼ 2.6m で正方形に近い。壁溝および竪穴は検出されていない。南側に深さ 6~15cm 程の深い窪みがある。

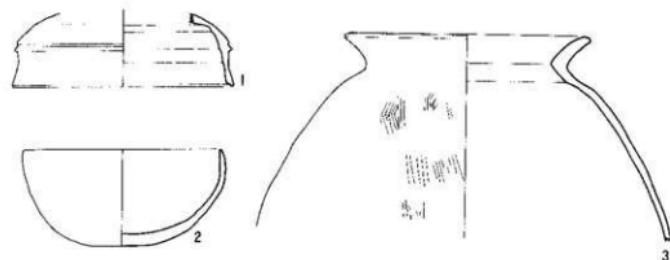
SB 803 の南側の窪み付近に疎・土師器・須恵器が散在していた。これらの遺物は SB 803 が埋没した時のものと考えられるのでここで報告する。

第 8 図 1 は須恵器の壺蓋で、口径は 13.4cm である。天井部上部は欠損しているが平坦と推定され、口縁部と天井部を分ける稜は明瞭で、やや丸みを帯びるが鋭い。天井部のヘラ削りは丁寧で全面におよんでいる。口縁部はやや外に開き、端部は段を持つ。中村編年の第 I 型式 5 段階または第 II 型式 1 段階に相当する（須／壺蓋 b 1）。

図 2 は土師器の壺身である（壺 c 3）。表面が剥離し器面調整は不明瞭であるが全体的に薄手である。口径 12.1cm、器高 6cm で口径の割に深めで底部は平底気味である。口縁部は内凸気味である。

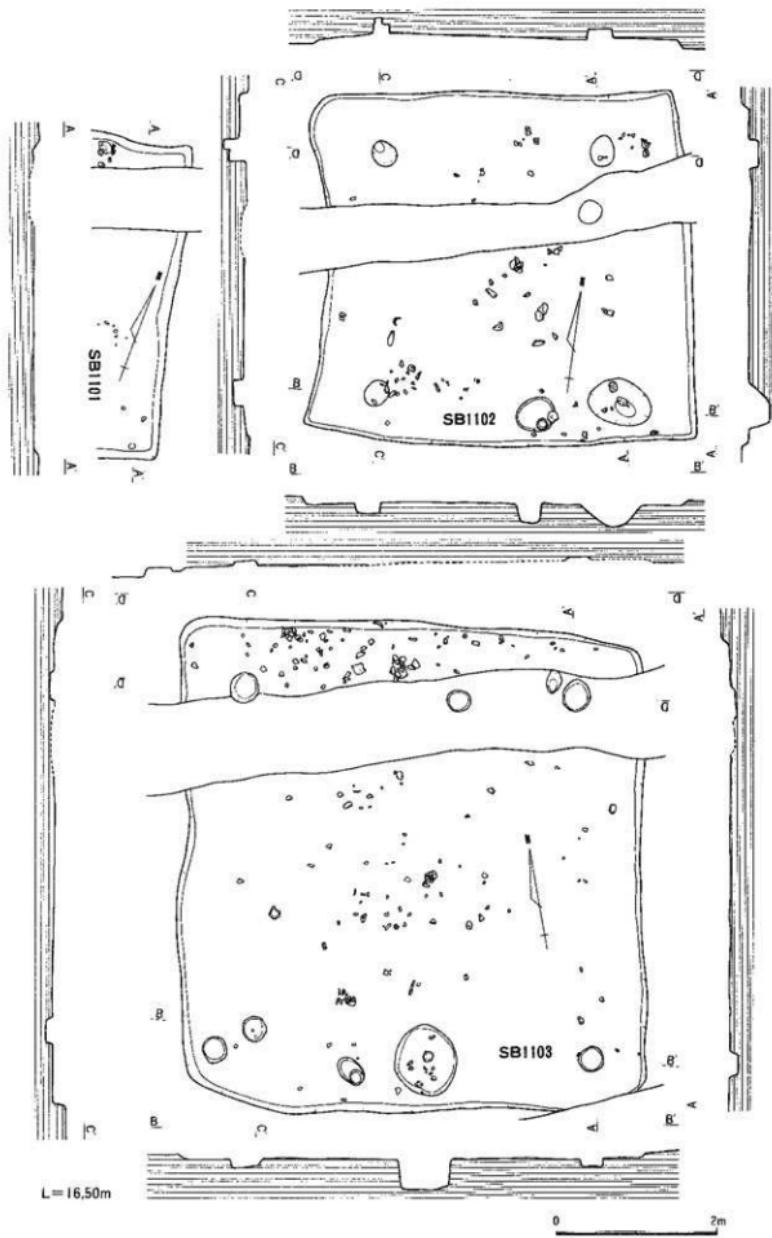
図 3 は西南端で検出された壺である（壺 d）。口縁部から胴部上半が残存している。口径は 14.6cm、口縁部は短く外反し、端部は丸く肥厚する。最大径は胴部中頃にあると考えられる。剥離が進んでいるが、胴部外面にはハケ目が観察される。胴部内面には輪積みの跡が残る。

SB 803 の検出面の掘り込みは 5~15cm とごく浅く、また切り合う古墳の周溝 SD 812 との掘り込みの差も 5cm 程であるため、両者の切り合い関係の認定を困難にしているが現地調査では古墳築造時に埋没したものとの所見である。



第 7 図 SB 803 出土遺物

したがって、これらの遺物は SB 803 の埋没時点の下限を示しているので SB 803 が形成された時期は中村編年の第 I 型式 4 段階またはそれ以前にそれほど遅らない時点と考えられる。



第8図 積穴住居 SB1101・SB1102・SB1103遺構平面図

**SB1101** (第8図 図版9)

堅穴住居跡 SB 1101 は M - 17 ~ 18 グリッドに位置する。検出されているのは東側の一部分であり、それも東西方向の溝 SD 1102 によって切られている。残存している部分よりみると東西方向は 3.9 m である。柱穴・壁溝は検出されていない。遺物は土師器の壺・高壺・甕の破片である。

ある。第9図は土師器の高壺である(高壺 b)。壺部の 1/3、脚部の 1/2 が残存している。口径 15.7 cm、器高 9.8 cm、底径 10.2 cm と見られる。口縁部は狭く開き脚部と壺部の高さはほぼ同じである。脚部は短いが上部がまっすぐ下がり、「ハ」の字型に開いた裾部は水平に強く引き出している。脚部内面は空洞部が高くへらで調整されている。表面が剥離しているため器面の調整はわからない。年代的には古い段階の高壺と考えられ、堅穴住居跡 SB 803 または古墳の周溝 SD 812 とほぼ同じとみられる。

**SB1102** (第8図 図版9・22)

堅穴住居 SB 1102 は L ~ M - 19 グリッドに位置する。ほぼ方形で東西 4.65 m、南北 4.30 m と SB 1103 に比べると小型である。平面積は 19.8 m<sup>2</sup> である。掘り込みは 0.1 m と浅い。柱穴は 4 個あり、その内 3 個は 0.3 ~ 0.35 m の円形または梢円形であり、深さは 0.1 m 程度である。西北の柱穴は段掘りとなり直徑 0.1 m 程の柱の跡と考えられる。残る東南の柱穴は長径 0.8 m、短径 0.55 m の梢円形で深さも 0.25 m 程であり、炭化物も混入していた。4 本の柱穴の距離は東西 2.75 ~ 3.1 m、南北 3.0 ~ 3.2 m である。壁溝および竈は確認していないが、南側に径 0.42 ~ 0.48 m、深さ 0.25 m 程の梢円形の土坑があり、他の住居跡の位置より考えて貯蔵穴ではないかと考えられる。

出土遺物は須恵器の甕の体部小破片と土師器の壺、甕の破片である。第10図 1・2 は土師器の壺である(壺 c 2)。1 は約 3/4 残存している。口縁部の残りは少ないが口径は 13.5 cm、器高 5.3 cm である。底部は平底気味で器底も厚く口縁端部は内湾気味であったと見られる。器面も丁寧にナデられている。

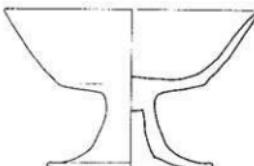
第11図 1 の SB 1103 出土の壺を

やや小型にしたものである。

2 は約 1/2 残存している。口径 11.5 cm、器高 4.6 cm で底部の半分が炭化している。器面の剥離が大きく調整は不明である。

3 は高壺で脚部の 1/2 が欠損している(高壺 b)。口径 14.1 cm、器高 10.4 cm、底径 9.1 cm である。

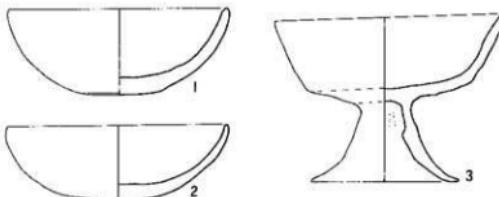
口縁部は狭く開き脚部と脚部の高さはほぼ同じである。脚部



規 模

出 土 遺 物

第9図 SB 1101 出土遺物



第10図 SB 1102 出土遺物

部は短く「ハ」の字型に開き、裾部はそのまま水平につまんでいる。脚部内面は空洞部が高くへらで調整されている。(高壺 b) 第9図の SB 1101 出土の高壺とよく似ているが、壺部の広がりがやや狭く、また脚部の裾を水平に引き出していない点が異なる。

### SB1103 (第8図 図版9・22)

**規 模** 穴住居 SB1103 は L ~ M - 18 ~ 19 グリッドに位置する。中央やや北側を東西に SB 1101、SB1102 と同様溝 SD1102 によって切られている。東西5.8m、南北6.1m とほぼ方形であり、平面積は34.4m<sup>2</sup> と SB 801 に次いで大型である。掘り込みは10~15cm とごく浅い。柱穴は8 個あるがそのうちの4 個は4.1~4.4 m のほぼ同じ距離を持ち四角くなることから支柱と考えられる。

4 本の柱穴の大きさは30~40cm で

深さも5~10cm である。壁溝および竈は確認していないが、南側に貯蔵穴と思われる長径85cm、短径80cm、掘り込みは急で深さ35cm のほぼ円形の土坑がある。この土坑の北側に少量の炭化物が検出された。

**出 土 遺 物** 出土遺物は土師器の小破片である。第12図1~2 は壊であるが剥離が大きく器面の観察はできない。1 は口径14.3cm、器高5.2cm、2 は口径14.0cm、器高4.9cm で両者とも底部は平底気味である。

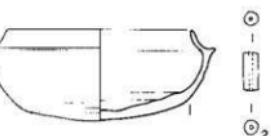
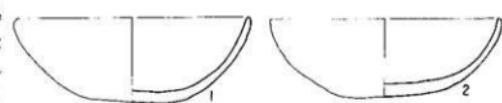
### SB1401 (第12図・図版22)

**規 模** SB1401 は調査区東側の K - 29 グリッドに位置する。西側と南側は調査区外のため、詳細は不明である。検出されている長さは南北4.3m 以上、東西2.5m である。柱穴周溝等は検出されていないが掘り込みは1.7m 程で

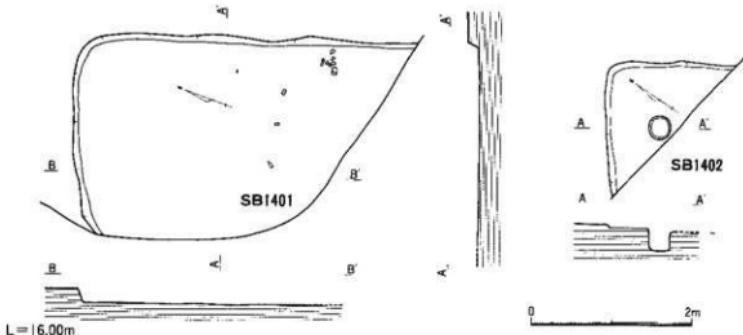
**出 土 遺 物** あるが落ち込みは明瞭であった。出土遺物は須恵器の壊・土師器の高壺・壺・管状等であるが実測できるものは少なかった。

第12図1 は須恵器の壊身である。口径11.4cm、最大径14.4cm、器高5.6cm である。底部は

第11図 SB1103出土遺物



第12図 SB1401出土遺物



第13図 穴住居 SB1401・SB1402造構平面図

平らに作られ、約1/3にへラ削りされる。立ち上がりは比較的短く、端部は内傾するが、口縁部は直立に近く、受け部とも丸く作られる。中村編年の第II型式3段階と見られる（須／坏身d）。図2は床面で検出された管状である。石質は輝緑凝灰岩である。長さ23mm、直径8.5mmである。中心の孔は単方向から穿けられ、直径は2mmである。表面はよく削かれており緑灰色を呈す。

規 管 玉

#### SB 1402 (第13図)

SB 1402はSB 1401の東側に一部分が検出されている。掘り込みも4cmとごく浅く、径25cm、深さ28cm程の柱穴が1ヶ所検出されている。遺物は含まれていない。SB 1401と平面プランが重なる事から、SB 1401の前後の時期の建替えの跡である可能性が強い。

規

管

横

### 第5節 挖立柱建物跡

掘立柱建物跡は7区で7棟(SH 701、SH 702、SH 703、SH 704、SH 705、SH 706、SH 707)、11区A・B・Cで6棟(SH 1101、SH 1102、SH 1103、SH 1104、SH 1105、SH 1106)の計13棟が調査された。

規 模

#### SH 701 (第14図 図版12)

掘立柱建物跡SH 701はH～I～18グリッドに位置する。南北幅より東西幅が長いので東西を棟方向とすると、桁行4.68m、梁行3.75～3.78mの東西棟の建物である。主軸方位はN-73°-Eである。柱穴は中央の東柱のものも含めると9個ある。柱穴は35cm前後と45cm前後の円または楕円形であり、深さは13～22cm程である。2間×2間の建物であり西梁の側柱の柱穴が西側に少しづれる事、中央に東柱を持つ事から総柱建物と考えられる。平面積は17.63m<sup>2</sup>である。出土遺物はP1より須恵器の壺体部小破片が、またP7よりは土師器の环の破片が、P9よりは土師器の小破片が含まれていた。SH 701は総柱建物である点と平面積からみるとSH 702に類似している。

規 総柱建物

#### SH 702 (第14図 図版10)

掘立柱建物跡SH 702はI～J-18～19グリッドに位置する。柱穴は中央のものも含めると9個ある。柱穴の並び方より考えると南北方向のP2・P6はやや外側にずれた位置にある。したがって梁行3.72m、桁行4.32～4.36m、南北棟の2間×2間で中央に東柱を持つ事から総柱建物となる。主軸方位はN-10°-W、平面積は16.12m<sup>2</sup>である。柱穴は径38～50cmのほぼ円形で深さは17～31cm程で、東柱の柱穴はやや深く37cmである。9つの柱穴の内4個P1・P2・P3・P5には径15～23cmの柱痕がみられた。出土遺物はP1・P6・P7・P8より土師器の小破片がみられた。

規

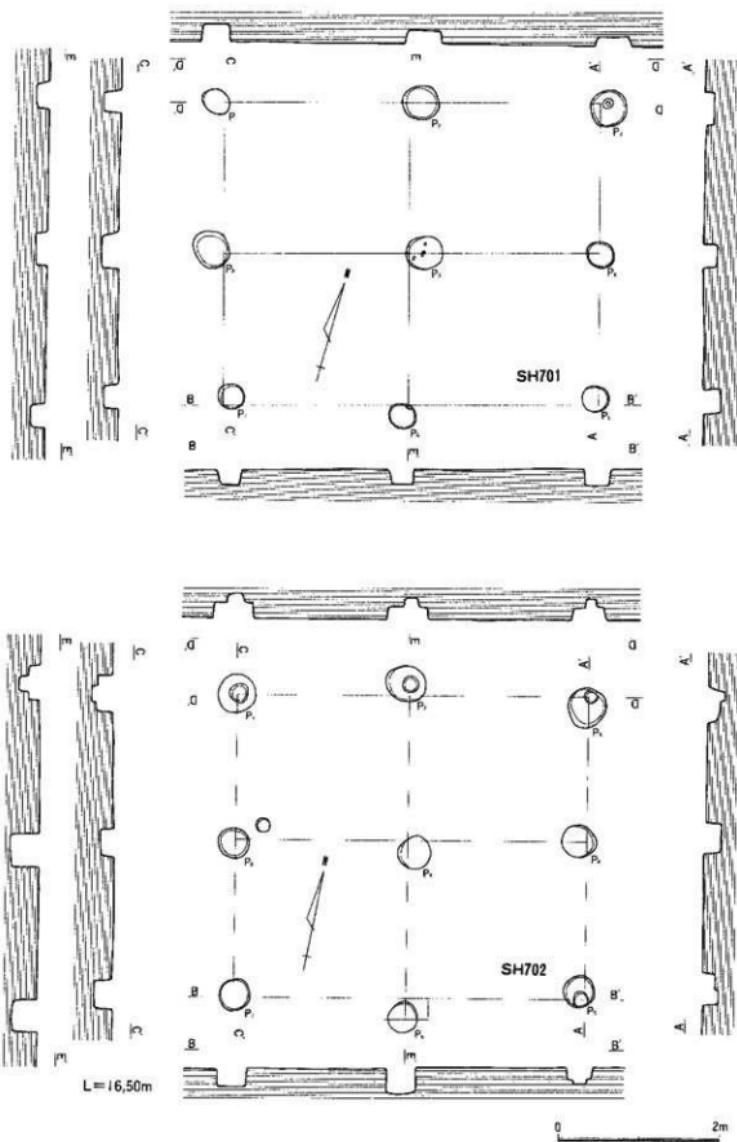
模

#### SH 703 (第15図)

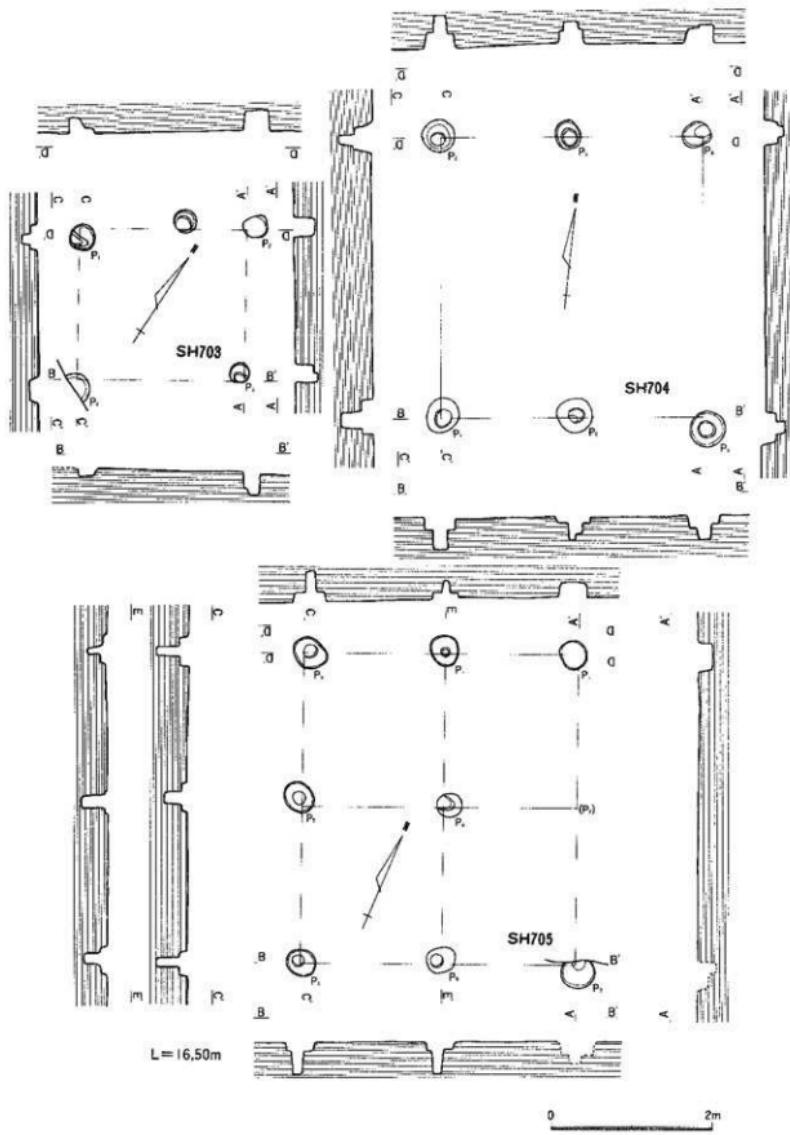
掘立柱建物跡SH 703はJ-18グリッドに位置する。柱穴は4個であり、南端は調査区外に一部かかる。東西2.08m、南北1.90mとやや東西が長いため、2間×1間の東西棟の建物と考えられる。主軸方位はN-58°-Eである。柱穴の大きさは25～31cm、深さは19～28cm、P1には径19cm、P3には径15cmの柱穴が残っていた。平面積は検出された中で

規

模



第14図 据立柱建物跡構実測図 1 SH701 SH702



第15図 摺立柱建物跡遺構実測図 2 SH703 SH704 SH705

は最も小さく3.95m<sup>2</sup>と人が住むには適さない大きさなので倉庫または小屋と考えられる。

#### SH 704 (第15図 図版12)

規 模 挖立柱建物跡 SH 704 は J ~ K - 19 グリッドに位置する。東西幅より南北幅が長いので南北を棟方向とすると桁行き3.47 m、梁行き3.26 m の南北棟の建物である。主軸方位は N - 6° - W である。四隅の柱の外にそれぞれ側柱の柱穴を持つ事から、1間×2間の棟持柱を持つ建物と考えられる。柱穴は四隅の各柱穴が径40~44cmの円形で、西側の柱穴の深さは40~42cmと東側の柱穴の深さの30~31cmに比べてやや深くなる。また棟持柱の柱穴の深さは23~27cmと四隅よりやや浅くなる。柱穴はいずれも径18~21cm程の柱痕の跡が残っていた。平面積は11.3m<sup>2</sup>と小型であり倉庫と考えられる。出土遺物は P2・P3・P4 より摩滅した土師器や弥生土器の小破片がみられた。器形等はわからない。

#### SH 705 (第15図 図版12)

規 模 挖立柱建物跡 SH 705 は J ~ K - 20 グリッドに位置する。南北幅は東西幅よりやや長いため、南北を棟方向とすると桁行3.82~3.84 m、梁行3.40~3.44 m の南北棟の建物である。

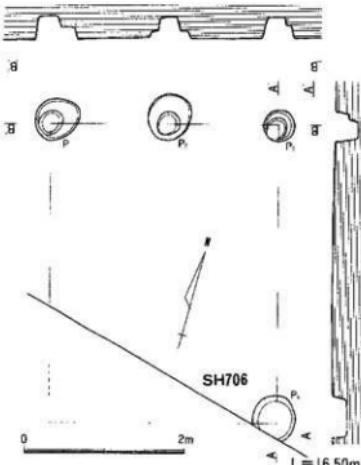
総柱建物 主軸方位は N - 23° - W である。柱穴は東側の側柱を欠いているが、他の3面は側柱を持ち、また中央には東柱を持つ2間×2間の総柱建物である。柱穴は長径45~30cm、短径29~37cmの円または楕円形であり、P4・P6・P9 が40~41cmと深いのに対し、P1・P5・P7 は19~29cmとやや浅かった。柱穴 P4 ~ P9 まではいずれも11~22cm前後の柱痕を持つ。平面積は13.1m<sup>2</sup>である。

遺物は P1・P4・P9 で土師器の甕の底部、また P7 で頭部のいずれも小破片が含まれていた。

#### SH 706 (第16図)

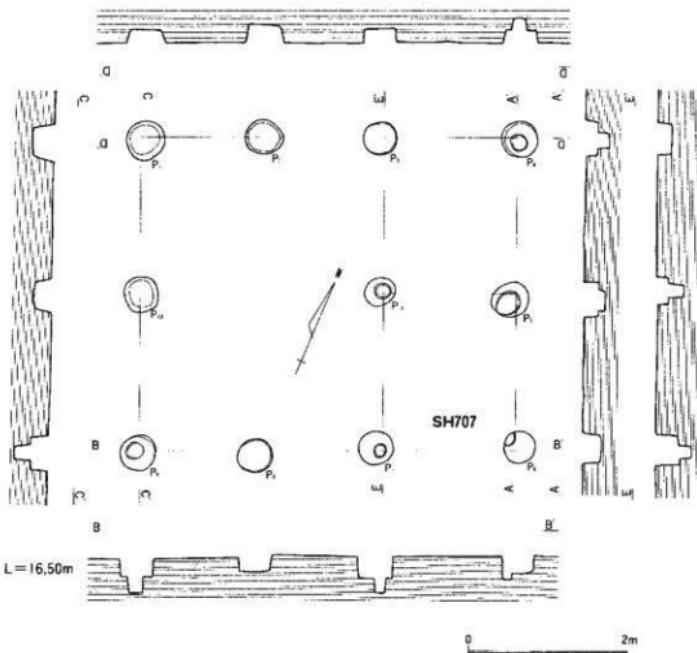
規 模 挖立柱建物跡 SH 706 は K - 19 グリッドに位置する。南側部分は調査区外であるが、柱穴の配置からみると2間×1間の建物である。南北方向が棟となり、梁に支柱がある事から棟持柱建物である可能性がある。桁行3.6 m、梁行2.81 m で平面積は10.1m<sup>2</sup>と SH 704 に規模や構造がよく似ている。北側の3個の柱穴は深さが25~30cmであり、いずれも径24~30cm程の柱痕を持つ。

出土遺物はいずれも摩滅した土師器の小破片である。



#### SH 707 (第17図 図版2)

規 模 挖立柱建物跡 SH 707 は K ~ J - 19 ~ 20 グリッドに位置する。東西が南北より長い点、



第17図 捜立柱建物跡遺構実測図 4 SH707

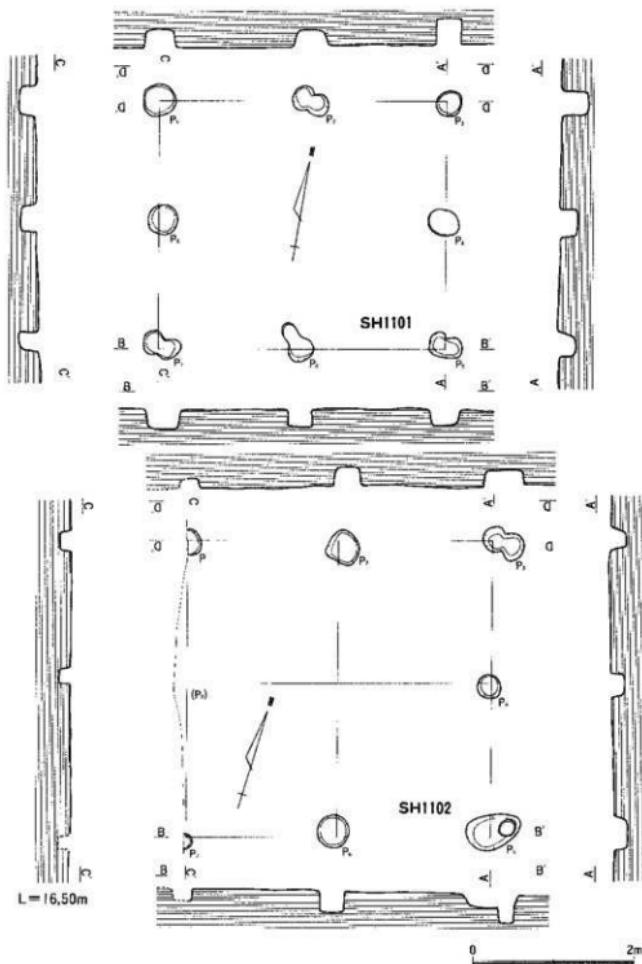
また東西は2本の側柱を持つに対し南北は1本である点から2間×3間の東西棟の建物である。桁行4.7m、梁行3.88mで主軸方位はN-67°-E、平面積は18.43m<sup>2</sup>である。桁行の柱間距離は各1.45~1.69mであるのに対し梁行の柱間距離は各1.90~1.98mと30~40cmほど長くなる。柱穴は径30~50cm程度でいずれも円形で、深さは18~46cmとややばらつきがある。P4・P5・P6・P7・P9には径16~27cmの柱痕が残っていた。P11のような東柱を持つので総柱建物と考えられる。その際P1とP8の中央に検出されていないが東柱があった場合には2本の東柱を持つ総柱建物となる。平面積にも検出された掘立柱建物の中で最も大きく、また間取りも多い建物である。出土遺物は柱穴P1より土師器の壺・高壺・甕体部等の小破片が含まれていた。その他の柱穴ではP2・P3・P7・P11より摩滅した土師器の小破片が含まれていた。

#### SH1101 (第18図 図版13)

掘立柱建物SH1101はL=17グリッドに位置する。南北より東西が長い。東西棟建物で桁行3.51~3.56m、梁行3.02~3.08mである。主軸方位はN-81°-Eである。各支柱の間に側柱を持つことから2間×2間の建物である。桁行の支柱間の距離は1.69~1.87m

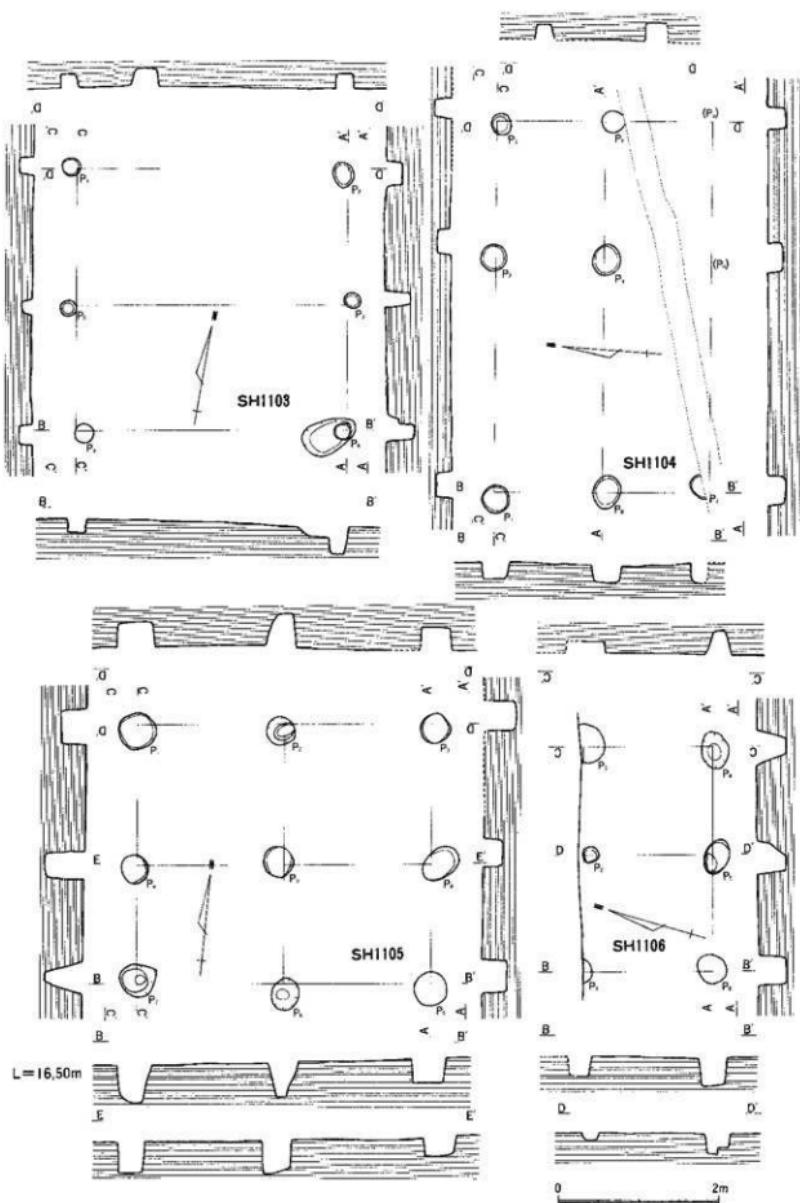
規 模

最も大型の  
建 物



第18図 振立柱建物跡遺構実測図 5 SH1101、SH1102

であるのに対して、梁行の支柱間は1.45~1.56 mである。柱穴はP1・P3・P4・P8が30~40cmの円形であるのに対して、P2・P5・P6・P7は建替えの跡がみられる。柱穴の深さはいずれも20~33cmである。平面積は10.96m<sup>2</sup>とSH 704・SH 706に最も近いが両者



第19図 振立柱建物跡遺構実測図 6 SH1103, SH1104, SH1105, SH1106

とも1間×2間である点が異なる。出土遺物はなかった。

#### SH 1102 (第18図 図版13)

規 模 挖立柱建物SH 1102はK-17グリッドに位置する。SH 1103と重複している。東西が南北よりやや長いので東西棟とすると桁行3.8m、梁行3.59~3.66mである。主軸方位はN-74°-Eである。いずれの面も側柱を持つため2間×2間の建物である。柱穴の大きさはP2やP6のように40cm大のもの、P3やP4のように30cm大のもの、P7・P8・P9のよう20cm大のものに分かれるが深さは17~24cmとあまり変わらない。径が20cm大のものはP5の柱痕が径20cm程である事から柱痕が検出されているとみなすと、P9は総柱と考えられ、この建物は総柱建物となる。平面積は13.8m<sup>2</sup>であり面積的にはSH 705・SH 1104に近い。

#### SH 1103 (第19図 図版13)

規 模 挖立柱建物SH 1103はK-17グリッドに位置する。東西幅が南北幅より少し長い点、また南北方向にはそれぞれ支柱があり棟持柱になると考えられる事などから、SH 1103は1間×2間の東西棟で桁行3.8m、梁行3.59~3.66mとなる。主軸方位はN-83°-Eである。SH 702と重複しているP4を除くとその他の柱穴は径20~30cmの円形であるし深さも18~20cmと共に通している。P4についてはその柱痕部分は径20cmであり深さも20cmである事から、その他の柱穴は柱痕部分のみが検出されている可能性がある。

#### SH 1104 (第19図 図版14)

規 模 挖立柱建物跡SH 1104はK-L-18グリッドに位置する。南側部分は調査区外であるが東西を棟とする2間×2間またはそれ以上の建物である。桁行は4.57m、梁行きは2.6m  
柱 建 物 で主軸方位はN-87°-Eである。P2を側柱と考えるとP1-P2は2.87m、P2-P3は1.35mとなる。いずれも他の建物跡の側柱～支柱間と比べて最大または最小となる。またP9が東柱であるならこの建物は総柱建物となる。検出されている柱穴は径27~40cmの円形で深さは20~23cmである。柱穴よりの出土遺物はなかった。柱穴間の距離に差があり過ぎる事から建物としては疑問があるが現地調査の所見に従って報告しておく。

#### SH 1105 (第19図 図版14)

規 模 挖立柱建物跡SH 1105はL-M-17~18グリッドに位置する。東西幅が南北幅より長いので東西が棟方向となる。主軸方位はN-84°-Eである。桁行3.7m、梁行3.2mで各面とも側柱を持つことから2間×2間の建物である。中央に東柱を持つので総柱建物である。柱穴はいずれも径35~48cmの丸または楕円である。深さは東側が25~31cmであるのに対し西側は全体的にやや深く38~48cmである。平面積は11.84m<sup>2</sup>とSH 704・SH 1101と最も近いが構造的にはSH 701・SH 702に似ている。

出土遺物はP1・P9より土師器の壺体部破片がまたP2・P3・P4・P8よりは上師器の摩滅した小破片であった。

#### SH 1106 (第19図 図版14)

規 模 挖立柱建物跡SH 1106はL-17~18グリッドに位置する。北側は調査区の外に外れている。検出されている柱穴は6個であるので東西方向を棟とすると桁行は2.78mとなる。北端中央の柱穴P2が東柱であるとすると隣接する調査区のSH 1101の方向に柱穴は続いている。

第2表 古墳時代掘立柱建物一覧表

S H 掘立柱建物跡

施設建物跡	幅(柱間)cm	奥	行(間)	奥間柱間cm	通	間(cm)	面	積(m <sup>2</sup> )	柱穴	柱	柱	柱	柱	柱	名
									(柱径+柱径+深さ)cm	周長	高さ	柱径	柱径	柱径	施設
SH701	P1~P2 2.33	P1~P3 4.68	P1~P8 1.94	P1~P8 3.78		17.63		P1(36×29~22)							2間×2間
	P2~P3 2.35		P7~P8 1.84		(P1 P2 P8 P9	4.52)	P2(45×13~17)								東・西 檐
	P5~P6 2.35	P5~P7 4.68	P3~P4 1.93	P3~P5 3.75	(P2 P3 P4 P9	4.54)	P3(47×44~13)								縦状建物
	P6~P7 2.33		P4~P5 1.82		(P4 P5 P6 P9	4.28)	P4(35×31~17)								N 73° E
	壁柱H間				(P6 P7 P8 P9	4.29)	P5(33×32~21)								
	P4~P9 2.35						P6(35×31~19)								
SH702	P8~P9 2.33						P7(33×32~19)								
							P8(48×41~21)								
							P9(48×42~15)								
	P1~P2 2.15	P1~P3 4.36	P1~P8 1.79	P1~P7 3.71		16.12		P1(49×46~31)	柱櫛有(径23cm)						2間×2間
	P2~P3 2.23		P7~P8 1.92		(P1 P2 P8 P9	3.81)	P2(50×45~27)	柱櫛有(径19cm)							縦柱 建物
	P5~P6 2.21	P5~P7 4.32	P3~P4 1.78	P3~P5 3.72	(P2 P3 P4 P9	3.97)	P3(49×47~21)	柱櫛有(径15cm)							(横持柱)
SH703	P6~P7 2.11		P4~P5 1.94		(P4 P5 P6 P9	4.29)	P4(45×40~21)								東・西 檻
	壁柱H間(横持)				(P6 P7 P8 P9	4.05)	P5(40×37~21)	柱櫛有(径16cm)							N -74° E
	P2~P9 1.93						P6(49×37~34)								
	P6~P8 2.19						P7(36×36~23)								
							P8(38×36~17)								
							P9(42×38~32)								
SH704	P1~P2 2.08			P1~P4 1.90		3.952		P1(32×31~19)	柱櫛有(径29cm)						1間×1間
	P3~P4 2.08			P2~P3 1.90			P2(31×28~26)								東・西 檻
							P3(25×24~28)	柱櫛有(径15cm)						N -58° E	
							P4 指 定								
	P1~P2 3.47	P1~P6 1.67	P1~P5 3.26			11.312		P1(44×30~40)	柱櫛有(径21cm)						2間×1間
	P4~P5 3.47	P5~P6 1.59	P2~P3 1.61	P2~P4 3.26			P2(41×30~42)	柱櫛有(径19cm)							南・北 檻
SH705	P3~P6 1.91	P4~P5 3.44	P3~P9 1.67	P3~P4 3.44	(P2 P3 P8 P9	3.22)	P3(36×31~27)	柱櫛有(径20cm)							(横持柱)
	P7~P8 1.91	P4~P9 1.77	P4~P9 1.77	(P4 P5 P8 P9	3.43)	P4(37×31~41)	柱櫛有(径16cm)								N -65° W
	P8~P9 1.96			(P5 P6 P7 P8	3.34)	P5(40×34~34)	柱櫛有(径17cm)								P5(44×43~30)
							P6(43×43~31)	柱櫛有(径19cm)							
								P7(39×34~24)	柱櫛有(径19cm)						
							P8(30×29~34)	柱櫛有(径22cm)							
SH706	P1~P2 3.60	P1~P2 3.60	P1~P3 2.81			10.116		P1(57×50~33)	柱櫛有(径30cm)						2間×1間 以上
	P3~P4 3.60	P2~P3 3.60					P2(68×53~25)	柱櫛有(径25cm)						(横持柱)	
							P3(58×38~29)	柱櫛有(径25cm)						南・北 檻	
							P4 指 定							N -15° W	
							P5 指 定								
							P6 指 定								
SH707	P1~P2 1.55	P1~P4 4.74	P1~P10 1.90	P1~P9 3.88		18.43		P1(50×47~27)							2間×3間
	P2~P3 1.51	P9~P10 1.98		(P1 P2 P7 P9	11.87)	P2(45×42~23)									東・西 檻
	P3~P4 1.68	P6~P9 4.71	P4~P5 1.94	P4~P6 3.89	(P3 P4 P5 P11	3.26)	P3(41×40~16)								N -67° E
	P6~P7 1.69	P5~P6 1.95		(P5 P6 P7 P11	3.30)	P4(45×45~31)	柱櫛有(径20cm)								
	P7~P8 1.57						P5(47×42~27)	柱櫛有(径27cm)							
	P8~P9 1.45						P6(40×40~24)								
SH708	壁柱H間						P7(44×41~45)	柱櫛有(径16cm)							
	P5~P11 1.70						P8(45×41~19)								
							P9(46×42~41)	柱櫛有(径19cm)							
							P10(46×43~22)								
SH709							P11(39×34~35)	柱櫛有(径18cm)							

構造物番号	断面寸法(mm)	断面(m)	初期長さ(m)	初期高さ(m)	面積(m <sup>2</sup> )	積(m <sup>3</sup> )	柱・梁・壁・梁・柱		構造物番号
							柱	梁	
SH1101	P1~P2 1.87	P1~P3 3.56	(P1~P8 1.50)	P1~P7 3.08	10.964		P1(41×38 21)		2間×2間
	P2~P3 1.69		(P7~P8 1.56)				P2(47×21~21)		壁柱ではない
	P5~P6 1.75	P5~P7 3.51	(P3~P4 1.45)	P3~P5 3.02			P3(32×30~33)		1つの柱
	P6~P7 1.76		(P4~P5 1.55)				P4(48×21~22)		か
							P5(41×21~23)		東 西 檻
							P6(60×17~22)		N 87°~E
SH1102	P1~P2 1.97	P1~P3 3.80	(P1~P8) 1.77	P1~P7 3.66	13.8		P1 植 定		2間×2間
	P2~P3 1.83		(P7~P8) 1.94	(P1 P2 P8 P9)	3.39		P2(45×39~24)		壁柱建物
	P5~P6 1.98	P5~P7 3.82	P3~P4 1.79	P3~P5 3.59	(P2 P3 P4 P9)	3.26	P3(53×22~20)		東 西 檻
	P6~P7 1.84		(P4~P5 1.80)		(P4 P5 P6 P9)	3.56	P4(31×29~17)		N~27°~E
	P4~P9 1.90				(P6 P7 P8 P9)	3.57	P5(68×40~18)		
	(P8~P9 1.91)						P6(40×40~18)		
SH1103							P7 植 定		
							(P8) 植 定		
							P9(35×19~7)		
							P1(23×19~18)		2間×1間
	P1~P2 3.36	P1~P6 1.70	P1~P5 3.26		10.92		P2(32×25~20)		壁柱建物
	P4~P5 3.34	P5~P6 1.56		(P1 P2 P3 P8 P9)	5.71		P3(21×18~20)		東 西 檻
SH1104							P4(68×40~20)		N 87°~E
							P5(24×23~17)		
							P6(20×20~14)		
	P1~P2 2.87	P1~P3 4.57	P1~P8 1.35	P1~P7 2.66	12.17		P1(35×33~21)		2間×2間
	P2~P3 1.70		P7~P8 1.31	(P3~P5) 2.67	(P1 P2 P8 P9)	3.87	P2(32×25~?)		壁柱建物
	(P5)~(P6) 1.70	(P5)~P7 4.57	P3~P4 1.35	(P2 P3 P4 P9)	2.30	P3(27×25~?)		東 西 檻	
SH1105	(P6)~P7 2.87		(P4~P5) 1.32	(P4~P5) (P6~P9)	2.24	P4(29×25~23)		N~27°~E	
	P4~P9 1.70			(P6~P7 P8 P9)	3.76	(P5) 植 定			
	P4~P9 1.70					(P6) 植 定			
	P5~P9 2.87					P7 植 定			
						P8(40×33~22)			
						P9(37×34~20)			
SH1106	P1~P2 1.79	P1~P3 3.69	P1~P8 1.76	P1~P7 3.20	11.83		P1(47×45~32)		2間×2間
	P2~P3 1.90		P7~P8 1.44	(P1 P2 P8 P9)	3.15		P2(36×33~41)		壁柱建物
	P5~P6 1.93	P5~P7 3.70	P3~P4 1.70	P3~P5 3.20	(P2 P3 P4 P9)	3.23	P3(38×35~28)		東 西 檻
	P6~P7 1.80		P4~P5 1.60	(P4 P5 P6 P9)	2.88	P4(48×38~28)		N~84°~E	
	壁柱建物			(P6 P7 P8 P9)	2.60	P5(45×41~31)			
	P4~P9 1.70					P6(39×34~43)			
	P8~P9 1.91					P7(48×40~46)			
						P8(36×34~48)			
						P9(39×36~38)			
	P1~P2 1.43	P1~P3 2.77		P1~P6 1.60	4.45		P1 植 定		1間×2間
	P2~P3 1.34		P3~P4 1.61	(P1 P2 P5 P8)	2.29	P2(20×19~10)		(1間以上)	
	P4~P5 1.34	P4~P6 2.78		(P2 P3 P4 P5)	2.16	P3 植 定		<2間	
	P5~P6 1.44					P4(46×34~38)		東 西 檻	
						P5(44×30~36)		N 77°~E	
						P6(38×36~34)			

いないため、2間×2間の縦柱建物である可能性が強くなる。また他の柱穴の深さが34～38cmであるのに比べP2の柱穴の深さが10cmとごく浅い事からこれを除外して2間×2間の建物とも考えられる。出土遺物はP1より土師器の壺の口縁部が出土しているが、SD 308で出土している壺e1に類似している。

## 第6節 土 坑

### SF 701 (第20図 図版15・23)

J - 17グリッドに位置する。直径0.68m、深さ0.26mのはば円形の土坑で暗褐色粘土が含まれていた。中央のやや西側寄りに直径0.26m、深さ0.1m程の円形の穴があり黒褐色の粘土がつまっていた。2段掘りされている上段の底に須恵器の壺身と土師器の壺が重なっていた。出土状態より見ると、半分に割れた十筋器の壺の上に須恵器の壺身が重なり、その上に残りの土師器の壺の一部が重なっているもので同時期と考えられる。

共伴して  
出 土

第20図1は須恵器の壺身である。口径11.5cm、最大径13.3cm、器高4.5cmを測る。底部は平底で離縫からの切り離しの痕を残す。外面の約1/2前後に回転ヘラ削り調整が見られるがそれ以上の部分はノタ目が顯著である。立ち上がりは短く低くなり内頸が著しい。立ち上がり、受け部とも端部は丸くつくられている。口径が小型化しつつあり省力化が目立つ事から中村編年の第二型式5段階とみなされる(須／壺身f)。

図2は土師器の壺身である。口径12.2cm、器高3.8cmでやや平底である。表面の剥離がはなはだしいが外面部には黒斑がみられる。受け部にはわずかに稜を残す。口縁部は直立する。

### SF 801 (第20図 図版15・23)

J - 23グリッドに位置する。直径1.75m、深さ5.5mの円形の七坑である。土坑中より土師器の壺一個体分と土坑に流れ込むような状態でつぶれた土師器の壺口縁部が出土した。壺は横位で検出され、第20図の断面図のように土坑の中程に宙に浮いた状態でいるため土坑の底に置かれた状態にはみえず、土坑に流れこんだものと考えられる。

土坑への  
流れこみ

第20図3は土師器の壺の口縁部である。残存は1/4程で剥離が大きいが、推定口径は16.1cmである。肩部はわずかに外に開き折り返された口縁部がさらに外に開く。頸部から折り返し部分にかけての厚さの変化はない。

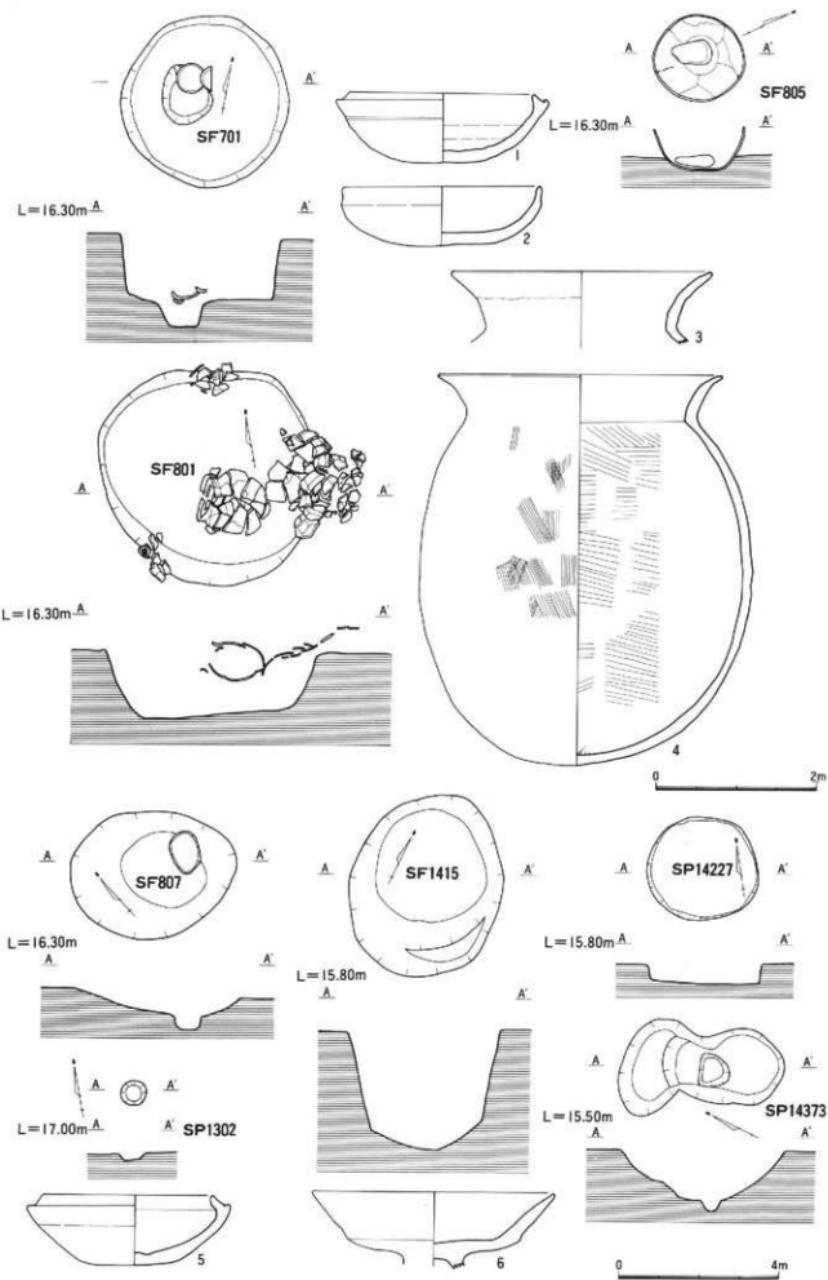
図4は土師器の壺である(壺e2)。ほぼ1個体分が残っていた。口径17.4cm、胸部最大径20.5cm、器高24.1cmである。底部は丸底で胴部最大径はほぼ中央にあり全体的に丸味をおびる。口縁は短く「く」の字型に外反し、特に端部は薄手で水平に引き出す。器面の剥離は大きく底部の調整は不明であるが胴部内面は4本／1cmの横方向のハケ目が見られるのに対し、外面は8本／1cmの斜め方向の細かいハケ目が見られる。口縁部についてはナデている。また底部と胴部の一部に炭化の跡が見られる。

壁穴住居  
との関連

SF 801から出土した壺と同様に破片は周囲の溝SD 806からも出土しておりSB 801と関連する溝や土坑としてその性格を考える必要がある。

### SF 805 (第20図)

8区J - 22グリッドに位置する。土師器の壺の胴部以下が深さ5cmほど上中に埋もれた状態で検出された。壺は直立した状態で置かれており、底部には長径16cmほどの礫が置かれていた。胴上部がはじめから欠損した状態で置かれたか否かは不明である。



第20図 土坑遺構平面図・出土遺物 6 SF701 SF801 SF805 SF807 SF1415  
SP14227 SP14373 SP1302

### SF 807 (第20図)

J - 24 グリッドに位置する。楕円形で長径1.37m、短径1.04m、深さ0.2m程である。中心部に幅0.25m程の柱穴がある。

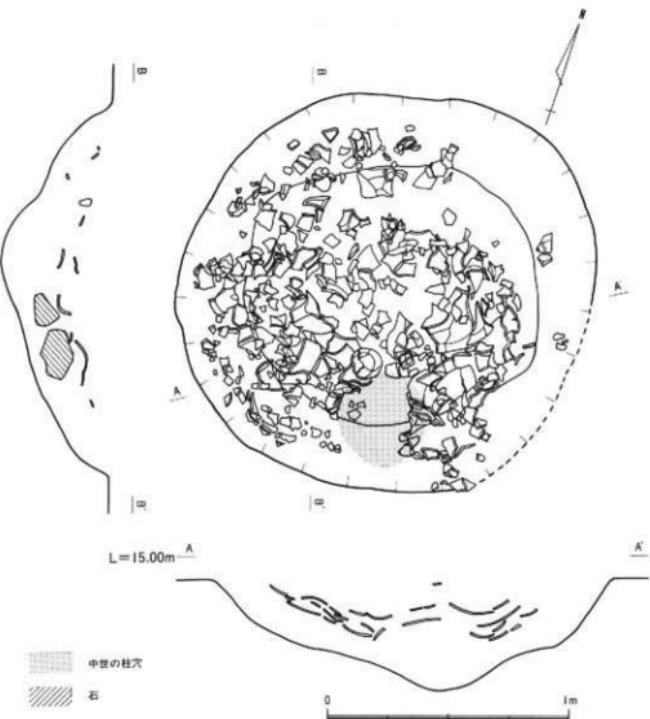
### SF 1415 (第20図)

14区 K - 31 グリッドに位置する。竪穴住居状遺構 SB 1403 の北端に位置する。ほぼ円形の土坑で長径1.52m、短径1.26、深さ97.0cm程である。掘り方は垂直に近く貯蔵穴の可能性もある。出土遺物は須恵器・土師器の小破片である。土師器は壺(第20図5)・高壺・壺・瓶の破片であった。

### SF 1416 (第21図 図版16・23~24)

SF 1416は14区の東端の集落の外れ部分である I - 35 グリッドに位置する。平面を検出した段階で炭化物が多く散布する中に所々土器片の集中する部分が見られた。茶褐色粘土の覆土の範囲はほぼ円形であった。第20図の遺構平面図の南下側のスクリーントーンの部分はこの土坑に掘りこまれていた直径38cm程の円形の柱穴である。まずこの部分から調査

円形の土坑

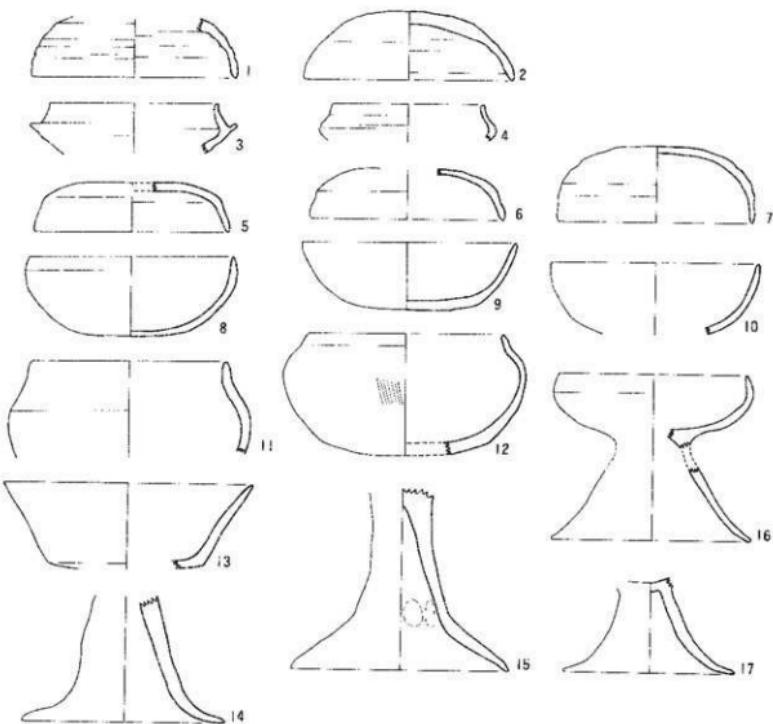


第21図 土坑 SF 1416 遺構平面図 (1 : 20)

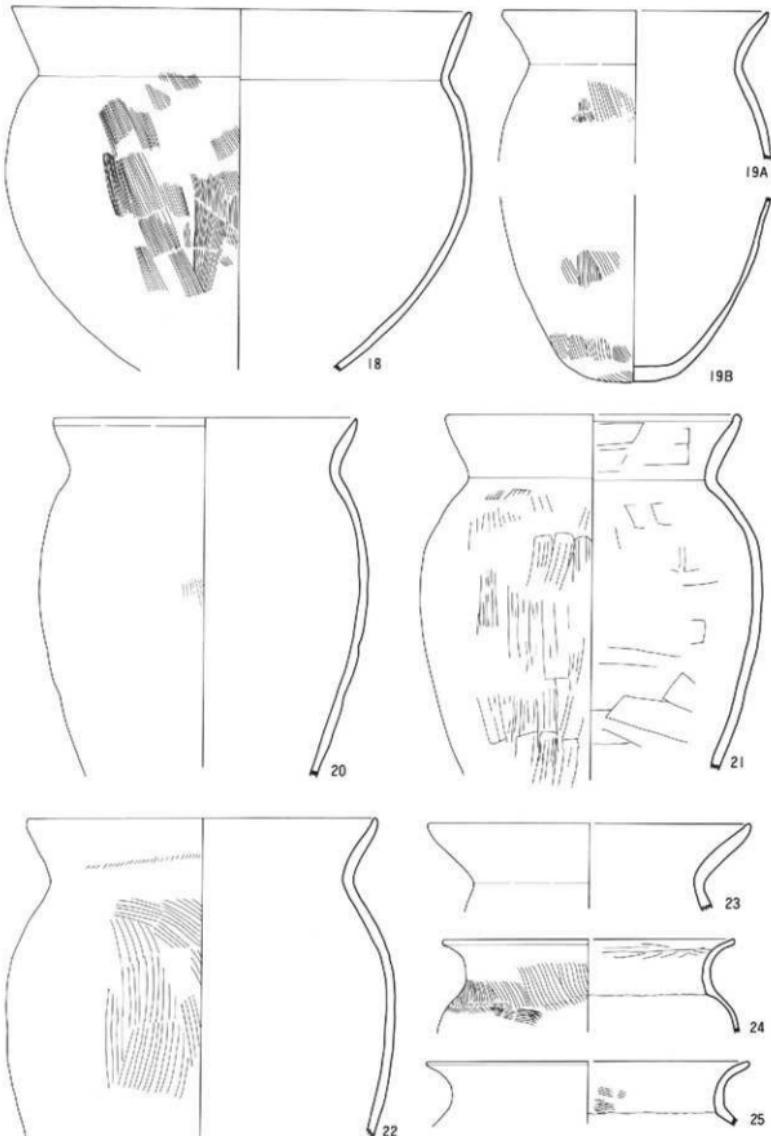
**出土状況** したがりには山茶碗が散かれた状態で出土しているため中世の遺構として相当する時期で扱う事とする。柱穴はやいあまり深くないため上器の集中部への影響は少なかった。次に平面プランに沿って掘り下げるとすぐに土坑いっぱいに多量の土器が密集して折り重なる状態で検出され、炭化物の塊もみられた。掘り上がりは直径1.7m、深さ0.45m程の浅い傾斜のなだらかな土坑となつた。

**施業遺物** 出土した遺物のほとんどは土師器であり、須恵器は数点である。平面図の様に遺物は幾重にも重なった状態で出土しているが、特定の器種が部分的に集中する事もなく、また満足な形をしている土器が1点もないのは、これらの遺物が施業品であることを示している。

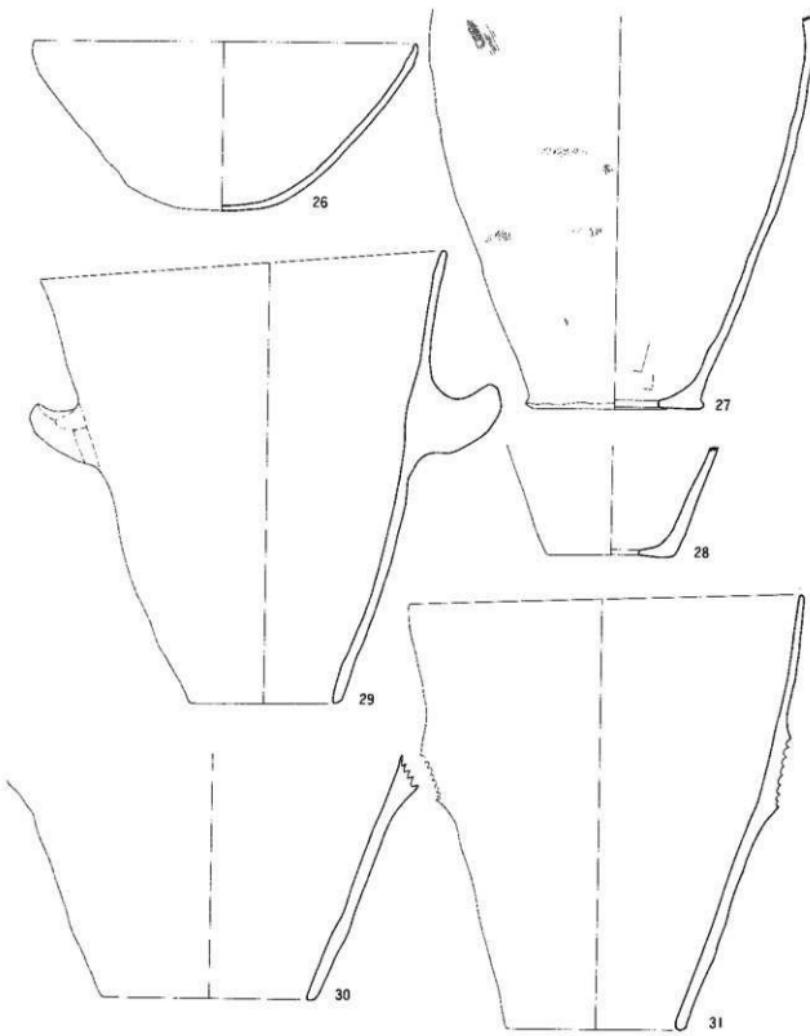
**須 恵 器** 第22図1～4は須恵器である。1・2は杯蓋である。1は口縁部の破片であり、口径は12.6cmと推定される。大井部は不明であるがヘラ削りの痕は高い。稜は沈線に近く、口縁部は短い。また口縁端部はわずかに内傾する。中村櫻年の第II型式5段階に相当する。2



第22図 SF 1416出土の一括遺物 その1



第23図 SF1416出土の一括遺物 その2



第24図 SF1416出土の一括遺物 その3

は口径12.7cm、器高4.2cmで器高は低く偏平な印象を受ける。欠損しているのは口縁部の1/2で他は完形であるが器面が摩滅している。天井部は器高の1/2まで荒いヘラ削りの痕が見られるがヘラ切りは未調整である。また稜線は全く見られない。1と比較しても省略化が目立つ事から中村編年第II期の5段階でも新しい要素をもつものである(須／坏蓋g)。3は环身の破片である。口径10.4cm、最大径は12.4cmでやや小型の偏平な形と推定される。

両受け部は丸みを帯び口唇部は内傾し、端部は垂直につまんでいる。黒斑が目立つ事から袋井市岡崎衛門板窯と似ている。4は短頸壺の口縁部である。口径は9.3cmで器高は低く浅いものとみられる。

第22~23図5~31までは土師器である。土師器の内訳は坏蓋3点・环3点・碗2点・高环5点・壺1点・甕7点・鉢1点・瓶5点である。

5~7は模倣の坏蓋である。5・6はいずれも1/4程残存している。形はいずれも偏平で口径は12.0cmである。稜の位置が器高の約1/3と高い位置にある(模倣环身b)。5は6に比べやや肩が張り気味である。7(模倣坏蓋c)はほぼ完形である。口径12.0cm、器高4.7cmであるが、稜の位置は器高の1/2程度である。粘土の巻き上げの跡が残る。外面の剥離は激しいがナデ調整が施されている。8~10は环である。8は口径12.7cm、器高4.8cmで底部は平底氣味である。口縁部は特にナデで直立させているため端部は三角形を呈する。器面は全体にていねいにナデしている。9(环d)は口径13.3cm、器高4.2cmで平底である。口縁部は外反させ端部は三角形を呈する。器面は剥離しているが、粘土ひもの巻き上げ痕が見られる。10は1/4程の破片である。口径は12.8cmで端部は垂直につまみ出しており、8と同一のタイプである。

11~12は碗である。11は口縁部の1/5程の破片である。口径は12.0cm、胸部最大径は15.0cmである。12(碗c)は口径12.0cm、胸部最大径が15.0cmで11に比べて器壁がやや薄い。底部は平底でヘラ削りの痕跡がある。器高は7.5cmで高く、球形の胸部をもつ。胸部には縱方向のハケ目の痕がわずかに残る。胸部の最大径は中心より上にあり、口縁部は短く内傾する。13~17は高环である。13は高环の环部で口径15.4cmである。稜線は明瞭で口縁部は狭く直線的に開くが先端に行くに従いやや外反する。端部は三角形につまみ出す。14~15は高环の脚である。長脚で裾部は大きく開き水平につまみ出している。底径は12.6cmと大型で内面は空洞が高くタテヘラ削りの後ていねいなナデ調整が施されている。环部13の脚部としてもおかしくはない。15(高环c)は脚部分の器高が11.0cm、底径が13.5cmである。直線的な長脚で裾部が大きくラッパ状に開き、端部は斜め下方に引き出している。内面はタテヘラ削りを环部直下まで施した後ナデ調整をしている。

16(高环d3)は模倣高环である。脚部については同一個体と思われる部分を図上復元している。环部は浅く丸みを持ち、脚部は緩やかに屈曲して開く。内面は环部直下まで空洞である。17は脚部で裾部が屈曲して大きく開いた短脚のものである。端部は水平に引き出している。环部直下までタテヘラ削りが施された後ていねいにナデしている。

第23図18~25は甕である。18(甕h)は口径28.5cm、胸部最大径は28.9cmと口径が大きく「く」の字型に屈曲して外に開き、比較的長い口縁を持つ。底部は欠損しているが胴部外面上には細かい縱斜め方向のハケ目が施されている。

19~22は甕fに分類したものである。19 A・Bは同一個体とみられる甕の口縁部と底部を図上復元したものである。口径は16.5cmの小型ではあるがやや丸みを持った長脚の甕である。底部は平底で炭化している。胴部は中央より少し上に最大径がくると思われる。口

#### 衛門坂窯

#### 土師器の 器種構成

#### 模倣 壱

#### 壺

#### 碗

#### 高 壱

#### 模倣 高 壱

#### 甕

縁部はゆるく「く」の字状に外反し端部を直上につまみ上げている。器面の剥離が大きいが体部から底部にかけて7~8本/cmの細かいハケ目が見られる。20は口径18.7cmで19よりもやや大きい。底部は欠損しているが、胴部最大径は中位より少し上に位置する。口縁部がゆるく「く」の字状に外反し、端部を直上につまみ上げている点は19と同じである。器面の剥離は大きいが、わずかに縦斜め方向のハケ目が見られる。21は口径18.2cmである。底部は欠損しているが、大きさはほぼ20と同じであり、胸部最大径が中位よりやや上にくる。口縁部はゆるく「く」の字状に外反し端部を直上につまみ上げている点は19・20と同じであるが、端部が丸く仕上げられている。内面は全面的に炭化している。内面には横方向とハケ目が、また外面には4本/cm程のハケ目が見られる。22は口縁から胴部にかけての破片で口径21.6cmである。20と同じ形式で口縁端部を直上につまみ出すが丸く仕上げるものである。胴部外面のハケ目は荒く3本/cmである。23は口縁部の破片で21と同じタイプの口縁である。24・25は口縁部の破片であるが、胴部最大径が上位に位置する長軸型と見られる(土/堀j)。口縁部が「コ」の字状に外反し、端部は丸くつまんでいる。24は口径18.0cmで肩部に4本/cmのハケ目が見られる。25は口径20.0cmである。両者とも19~23に比べ口縁部から胴部にかけて薄手である。

**鉢** 第25図26は鉢である。口径23.7cm、器高10.5cmである。丸底でそのままではやや不安定である。「ハ」の字型に開いた底部から口縁部までの厚さは均一であり、端部は直上につまみ上げている。

**瓶** 27~31は瓶である。27の底部は11.1cmあり、空洞に底板を貼り付けて、平底にして内側に径5.4cmの円穿があいている。把手の有無は不明である。胴部が上方でやや丸みを帯びる事から瓶であるとは断定できないが底部からみるとその可能性が強いためここに分類した(瓶a)。28は27と同じ形式の底部とみられる。29~31は直胴形で瓶bに分類される。29はほぼ完形である。口径27.2cm、底径9.1cm、器高9.1cmである。口縁部は直立している。把手の取り付け位置は、器高の2/3に把手上端が、また胴部中央に把手下端がくるように付けられている(瓶a)。30は下半部のみ残存している。底径が13.0cmある。31は約1/2の残存であるが口径24.5cm、底径10.8cm、器高26.6cmで29とは同形式である。

#### SP 14227 (第20図)

I-31グリッドに位置する。直径約0.9m、深さ0.12m程の円形の浅い土坑である。覆土には炭化物がみられた。遺物には土師器の瓶の把手破片が含まれていた。

#### SP 14373 (第20図)

I-30グリッドに位置する。長径1.35mの土坑である。覆土には須恵器や土師器の小破片が含まれていた。

#### SP 1302 (第20図)

13区G-9に位置する。柱穴中に須恵器の環身(第20・図6)が含まれていた。口径10.4cm、最大径12.5cm、器高4.3cmである。立ち上がりは短く、端部は丸く作られている。

## 第7節 溝

SD 308 (第25図 図版17・18・25~28)

溝 SD 308 は 3 区東側 H - 9 ~ 10 グリッドより K - 10 グリッドにかけて検出され、またその延長部分が北側は 13 区に SD 1301 として、また南側は 5 区の K - 10 グリッドにも続いている事が確認されている。南北に走る溝で断面は U 字状を呈する。幅は狭いところで 0.52 m 程度、深さは 0.56 ~ 0.60 m である。検出レベルは北側では上場 16.44 m 、下場 15.81 m 、南側では上場 16.26 m 、下場 15.68 m である。溝の壁面の掘り方はしっかりとおり人工的なものを感じさせる。溝の覆土は上層が管鉄の多い暗青灰色粘土層、下層が暗青灰色粘土層である。須恵器のうち、奈良・平安時代の遺物はこの上層から出土しており古墳時代の溝が埋没した下限を示している。なお、奈良・平安時代の遺物については『原川Ⅲ』で扱う。

出土遺物の内、須恵器は少なく大量の土師器が挙げと共に出土している。遺物や石のレベルを各断面で比較した結果、この溝は南から北側の旧流路 SD 10 B 14 の方向に向かって流れているものと考えられる。第27図は図化出来た遺物の出土地点を断面図と平面図に落としたものである。

遺物は上手の部分に集中している。土師器は胎土にシルト質が多く含まれるため剥離や摩滅が大きいが、完形の环や割れた破片もほぼ同じところに散らばっている事からごく近くで使用されたものが廃棄されていると考えられる。

出土した遺物は須恵器と土師器である。須恵器は壺蓋 2 点・短頸壺 1 点である(図版25)。

第38図 1 ~ 3 は須恵器で 3 点ともほぼ完形である。1・2 は壺蓋である(図版18-1)。1 (須/壺蓋 c 1) は口径 14.0 cm 、器高 4.6 cm で天井部は平坦である。ヘラ削りは天井部外面の約 1/2 に施されている。稜は明瞭であるが鋭さを欠いており、棱の下が沈線化している。口縁部は器高の 1/2 以上あり、やや外側に丸みを持ちながら直下に位置している。口縁端部は明瞭な段を持つがやや沈線化している。また天井部内面にわずかに同心円文が残る。2 (須/壺蓋 c 2) は口径 13.3 cm 、器高 5.2 cm である。1 に比べると天井部は丸みを持つ。天井部外面のヘラ削りは 2/3 程度施されている。稜はシャープさに欠け、稜の下が沈線化している。口縁部はやや外側に丸みを持ちながら直下に位置している。口縁端部には段を持つが沈線化している。1・2 ともヘラ削りの高さに違いはあるものの稜や口縁端部の段に退化がみられる点から、中村編年の第 II 型式 1 段階に位置している。3 は短頸壺である。口径 9.4 cm 、器高 8.0 cm 、胴部最大径が 12.3 cm である。底部は平坦面を有し、なだらかに内湾しながら肩部に統一している。肩部で最大径を持ち口縁はほぼ直立する。底部および体部下半には回転ヘラ削りがなされ、体部上半および口縁部内外面は横ナデ調整である。成形は粘土ひも積み上げによる痕跡を内面に残す。底部内面および体部外面に濃緑色の自然釉が見られる。こうした短頸壺は 7 世紀代の可能性があり混入品である。

4 ~ 94までは土師器である(図版25~28)。模倣壺蓋 1 点・碗 2 点・环身 26 点・高壺 23 点・手捏土器 1 点・埴 7 点・壺 4 点・甕 20 点・瓶 1 点・瓶把手 4 点である。

4 は模倣壺蓋である(模倣壺蓋 a)。口径 11.3 cm 、器高 3.8 cm で稜はほぼ器高の 1/2 の高さである。5・6 は碗である。底部は丸底であるが口縁が「く」の字状に外に開くものである。5 は口径 15.2 cm 、器高 5.9 cm (碗 a) 、6 は口径 13.5 cm 、器高 4.3 cm (碗 a) である。口縁部に比較的古い形態を持つものである。

南北方向  
の溝

出土状況

須恵器

土師器の  
器種構成

模倣壺

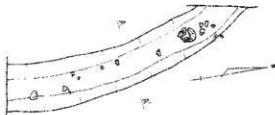
**環** 7~32は壺身である。底部の形により球形のもの（壺 a）・丸底のもの（壺 b）・平底気味のもの（壺 c）に分かれる、平底のものは1点もない。7は小型の壺で口径10.4cm、器高4.2cmである。底部が球形（壺 a）で直立した口縁部を持ち端部を丸めているもので、このタイプはこの溝からは1点である。

8~26は底部が丸底（壺 b）で口縁部は内湾し端部を三角形につまみ出したタイプである。溝から出土した壺の中では最も多く19点を数える。口径は14cm以上1点・13~14cm 6点・12~13cm 9点・11~12cm 3点である。その中でも8~17は器高が4.7~6.2cmの間にに入る比較的高いものであり、18~26は器高が3.9~4.6cmの間にに入る比較的低いものである。27~32は底部が平底気味のもの（壺 c）である。27は口縁部を直立させ端部を丸くしているものである。28~32は口縁部は内湾させているが、28は端部を丸くするのに対して、29~32は端部が三角形を呈するものである。以上のように、壺26点のうち底部が球形なもの（壺 a）は1点 4%、底部が丸底なもの（壺 b）は19点 73%、また底部が平底気味なもの（壺 c）は6点 23%である。

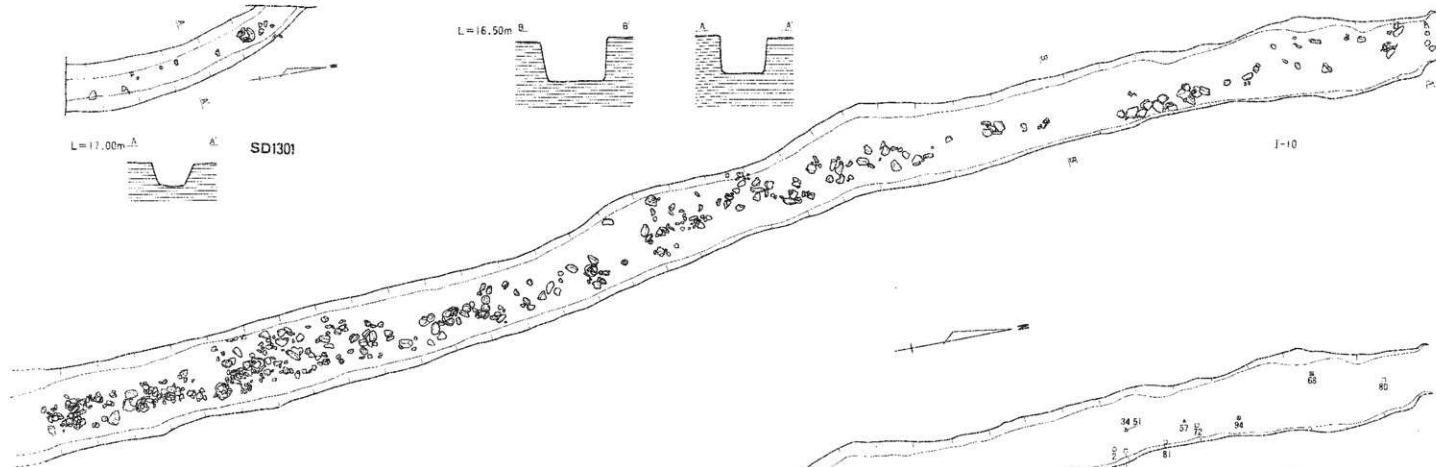
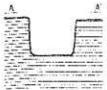
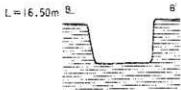
**高 壺** 33~54は高壺である。模式図では壺部の口縁部分が大きく開くもの（高壺 a）と狭く開くもの（高壺 b）と碗型を呈するもの（高壺 d）に分かれる。

33~36・42・46・47は口縁部が大きく開く高壺 a に属する。33（高壺 a 1）は壺部の1/2が欠損しているが口径16.3cm、器高10.0cm、底径9.6cmである。直接的に大きく外反した口縁部を持つ。脚部と壺部の器高に占める比率はほぼ同じである。「ハ」の字型に開いた脚部を持つ。脚部内面は空洞で横へのヘラ削りの痕が残る。剥離が大きくその他の器面調整は不明である。34（高壺 a 1）は33と同じ型で、壺部の一部が欠損しており、口径16.6cm、器高11.5cm、底径9.65cmである。壺部と脚部は別々に作られ、後から接合されている。壺部には接合の痕が見られず底部から口縁部まで一体になったものを脚部に接合したと思われる。また脚部はもともと中空に作っておいたものを壺部に接合し、後から空洞部へ粘土をつめている。壺部にはヘラによる6本／1cm程の細かい横ナデ調整が内外面ともに施されている。「ハ」の字型に開いた脚部を持ち空洞部は高い。35は口縁から脚部の3/4が欠損している。口径は14.4cmで脚部の先端は欠損しているが、ほぼ33・34と同じ型である。空洞部は33・34に比べて高い。36・37は同一箇所から出土した壺部と脚部で直接接合できないので図上復元したものである。38~41は高壺の脚部である。脚部が「ハ」の字型に開き内側の空洞部が高いものである。42（高壺 a 3）は壺部から脚部にかけての1/2が欠損している。壺部は大きく外反し、空洞部も高いが、脚部の中位にややふくらみが見られる。脚部が屈曲して大きく開いた脚部の端を下方につまんだものである。43~45は脚部の中でも42と同じ空洞部が高く、屈曲して大きく開いた脚部の端を下方につまんだものである。46は壺部底から脚部にかけて残存している。42~45と同じ脚部の形を持つが脚部内面は充填している。脚部側面には脚部を壺部に接合させる際のしづり痕が残る。この接合後の底部内面の丁寧なナデ調整によって脚部の空洞部分がふさがれている。47（高壺 a 2）はほぼ完形で口径15.2cm、器高10.3cm、底径9.8cmである。脚部は直線的か、あるいはやや外湾気味に開き、裾部は「ハ」の字状に広がる。脚部内面が充填している点は46と同じであるが裾端部を水平に引き出している点が異なる。壺部は底部と体部を接合している接合痕が稜付近に残る。48~53は裾端部を水平に引出し、脚部内面は充填した47と同じ形の脚部である。

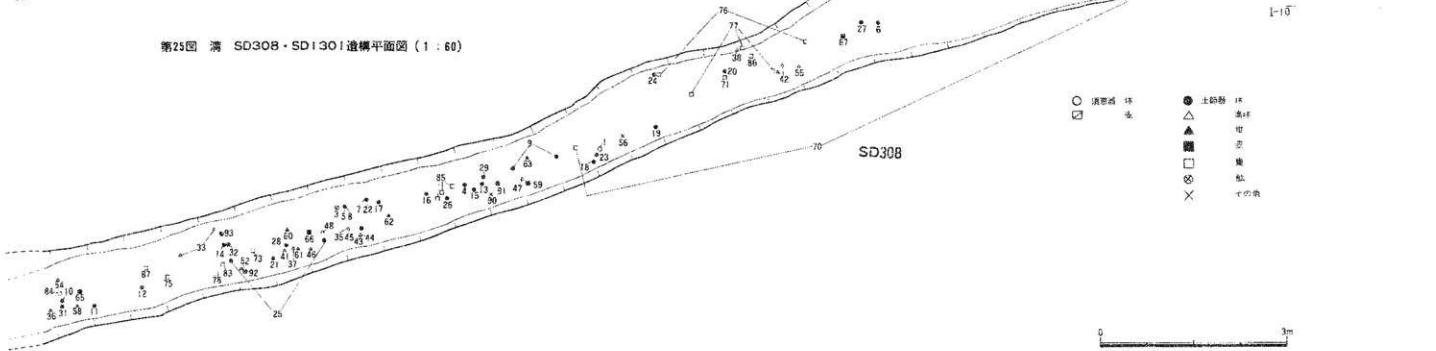
54は壺部の1/2と脚部が残存している。口縁部の形からは狭く開く B 類に属する。口径14.3cm、



L=17.00m A SD301



第25図 溝 SD308・SD301遺構平面図 (1:60)



L=16.50m --



第26図 SD308遺物出土地点模式図

底径9.75cm、器高9.9cmである。坏部は深く坏部の器高に占める比率は約2/3である。脚部は短く「ハ」の字型に開き据部は広く端部を水平に引き出している。脚部内面は空洞部がナデ調整によって充填された状態に近くなっている。

55は脚部である。幅の広い短脚で「ハ」の字型に大きく開く。脚付の碗、または碗型の高坏の脚部の可能性もあるが不明である。

56は手捏土器である。ほぼ完形であるが、底部および口縁部の欠損が激しい。口径7.6cm、手捏土器  
胴部最大径は8.2cm、器高5.8cmである。底はやや先細りで底部と言えるほど平ではない。  
最大径は器高の2/3程の位置にあり、口縁部は内傾する。内部は指頭による縱方向のナデを  
巡らす。口縁外面にも縱方向のナデの痕が残るが、体部下半は荒い横ナデによりその痕が  
消えている。石英などの小石や砂粒を多く含み器面は荒く日常的な用途に使用された痕跡  
はない。

57～65は壺である。壺は壺（57～63）・長頸壺（64）・短頸壺（65～68）に分かれる。  
57～63は壺である。57（壺 b）は口縁部と体部の一部が欠損している。口径10.7cm、器高  
13.0cmである。底部は丁寧にナデられており、丸底気味であるが中央部分は狭い範囲ながら  
平坦面を有する。胴部は下ぶくれ気味で、最大径は13.0cmあり、ほぼ器高の1/3に位置する。  
口径部はほぼ直線的に外反させ端部をつまんでいる。器面の剥離が激しいが、内外面とも丁寧にナデしている。底部・体部・口縁部を別々に作り接合している。58（壺 a 2）は口  
縁部から胴部中央にかけて残存しており、それ以下を欠損している。口径は10.5cmである。  
体部は丸みを持ち最大径は16.3cmで胴部中央にくる。口縁部は少し外反するが、端部は直上に引き出す。口径は胴部最大径の約2/3である。59は口縁部は欠損している。底部はほぼ  
方形をなすがすわりは良くない。これは籠の痕跡が底部に残るからで、底部及び胴部下半を  
籠の中で型作りし、その上に粘土ひもを巻き上げて体部を成形しているためである。胴部  
断面は楕円形である。胴部最大径は13.2cmで中央より少し下位に位置する。60は胴上部  
の破片である。最大径は13.2cmである。61～63は口縁部が短くいずれも口縁部から胴部に  
かけての破片である。61～63は最大径が胴部中央にくるもので口径より胴部最大径がやや  
大きい。どれも底部が欠損しているが、ほぼ口径と器高の比率が同一になるとみられる。  
61は口径9.3cm、最大径10.7cmで特に口径が10cm以下と小型である。62・63は口径が10～13cm  
以内のものである。62は口径11.2cm、最大径12.5cmで器壁が薄手である。63は口径12.4cm、  
最大径14.1cmで体部の一部に斜め方向のハケ日を残す。口縁は外反させた後、端部を真上  
に向けている。64は小型の長頸壺の頸部である（壺 e）。

65～68は折り返し口縁を持つ壺である。65（壺 b）は口縁部の一部と胴部の1/2が欠損して  
いる。口径20.0cm、器高30.5cmである。底部は丸底気味であるが狭い範囲に平坦面を有する。  
胴部は球形で最大径29.5cmはほぼ胴部中央に位置する。頸部はわずかに外に開き、  
折り返された口縁はさらに外に開き、端部はそのまま丸めているが、口縁内面にナデ調整  
による凹が見られる。底部内面には指頭圧痕が多く凹凸がある。内外面とも器面の剥離が  
激しいが胴部内面は4本／1cmの横のハケ日がわずかに残る。また頸部以上は内外面とも  
ナデしている。胴部外面には5本／1cmの内面より細かいハケ日が縱または斜め方向にわざ  
かに残っている。体部から底部にかけての器壁は薄い。66は口縁部の1/6が残存している。  
口縁部が短いが肥厚している。わずかに折り返し口縁の残存とも見える部分が残っていた  
ためここに含めたが、そうでない場合にせよ小型の短頸壺である。67は口縁部の1/6が残存  
する。口径15.8cmでわずかに外反した口縁部はそのまま折り返し口縁となる。端部はやや

壺  
壺

籠の跡

折り返し  
口縁

上向きに丸めている。68は口縁部の3/5が残存する。口径21.7cmで口縁部からは65と同様な大きさと見られる。11縁部は広く外反し、さらに折り返し部で外に開いている。端部はそのまま丸めている。折り返し部分端の整形は不規則でむらがあり雑な印象を受ける。

#### 小型の壺

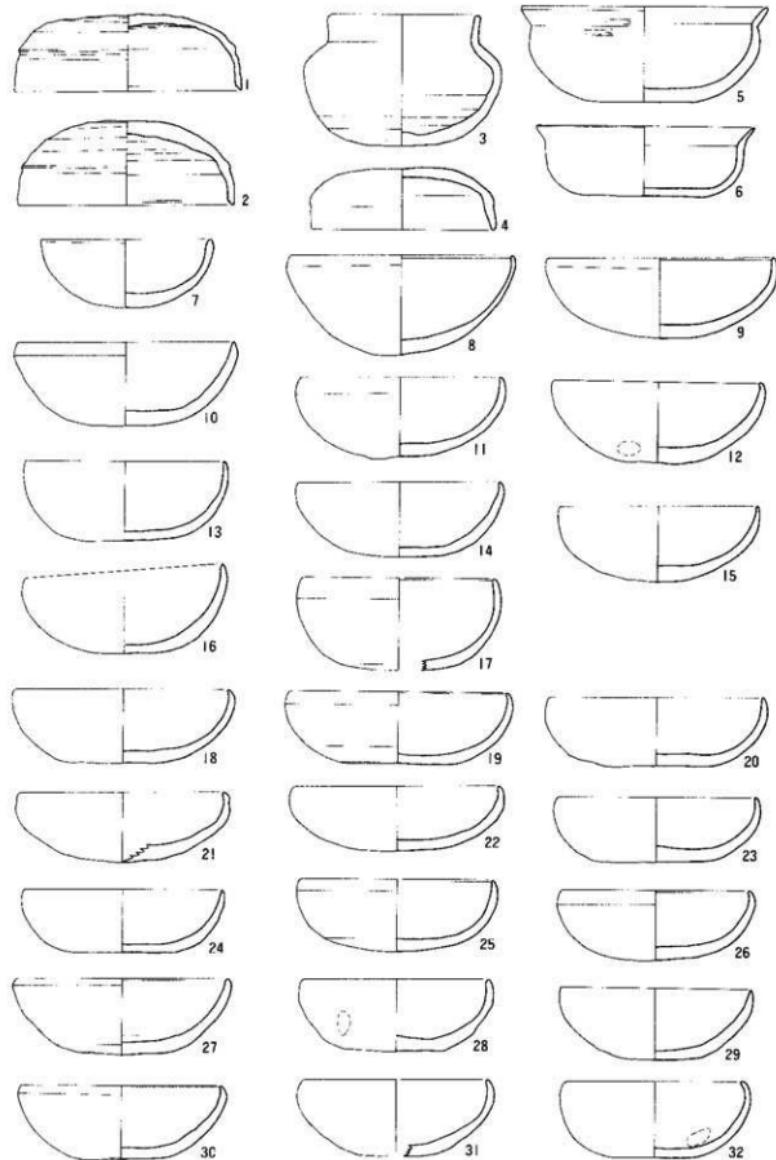
69~89は壺である。69は小型の壺である(壺a)。最大径が胴部中央より下部にくる下ぶくれのものである。底部と胴部の境に稜線が残る。体部外面には斜め方向で5本／1cm単位のハケ目が見られる箇所がある。口縁部は外反させ端部を丸めている。鉢ともみなされる。

70・71は口径が13cm以上、72以下に比べれば器高の低いものである。70(壺b)はほぼ完形で口径14.0cm、器高20.4cmである。底部は丸底で外面には竹の編み目が残る事、また内面には全体に粘土を押し伸ばした指頭圧痕が見られる事などから、底部は竹籠を用いた型作り手法によっている。胴部は球胴で最大径は18.5cmあり、胴部中央に位置する。体部外面には縦または斜め方向4本／1cmのハケ目が見られ、また底部と胴部の境には接合の後に横方向のハケ口調整を行う。胴部は輪積み成形で胴部内面には4本／1.6cmの荒いハケ目が見られる。口縁部は外反させ端部は丸めている。口縁部は内外面とも荒い横ナデをしている。体部中央に黒斑が見られる。71(壺c)は器形のほぼ半分が欠けている。口径13.4cm、器高19.5cm、底部は丸底である。最大径は16.0cmあり下ぶくれて胴部中央より下位に位置する。

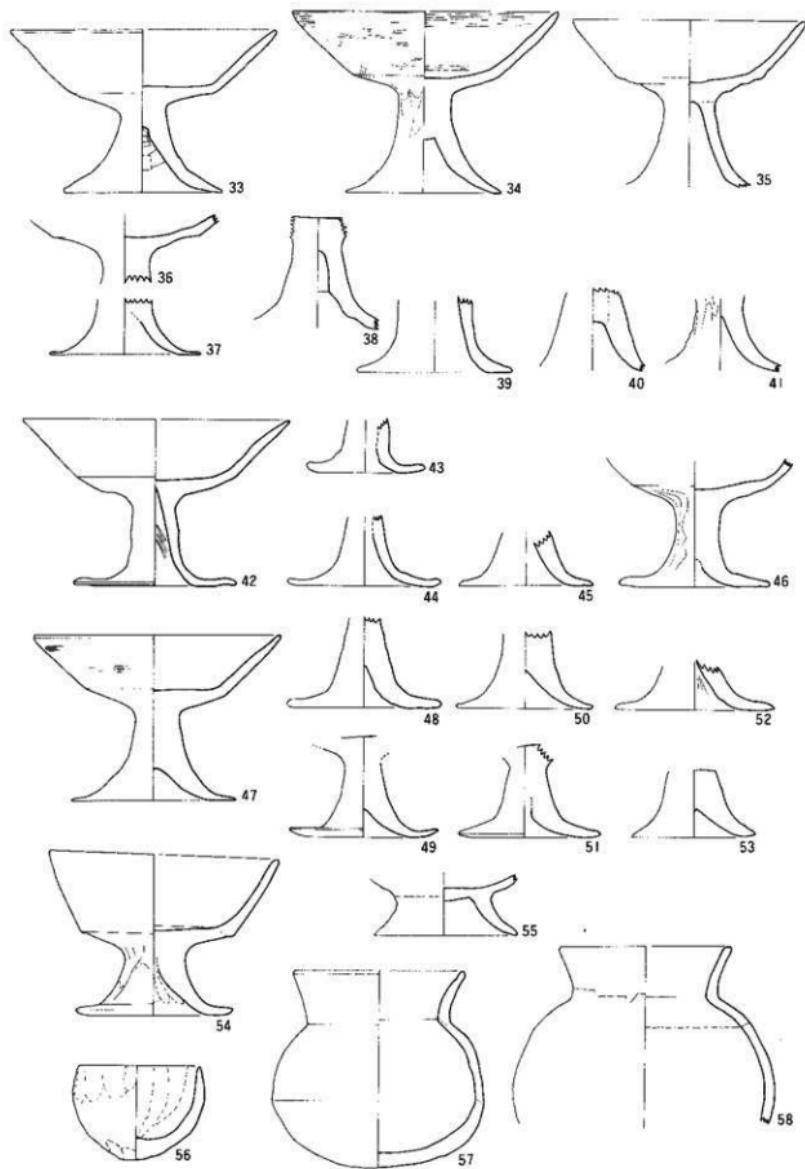
#### 長胴型の壺

72以下は長胴型で球胴の壺である。最大径の位置により器高のほぼ中央にくるもの、中央より上部にくるもの、中央部より下部にくるものに分けられるとすれば、器高が明らかな72・73・75・76・78・79・80はいずれも最大径が器高のほぼ中央に位置するもの(壺e)にあたる。また口縁部はいずれも「く」の字型に外反するが端部等の処理の仕方には変化があり、72~76は口縁端部をそのまま丸めている(壺e1)にあたる。また72~80は口縁部が薄手のものであり81~86は口縁部が厚手のものである。

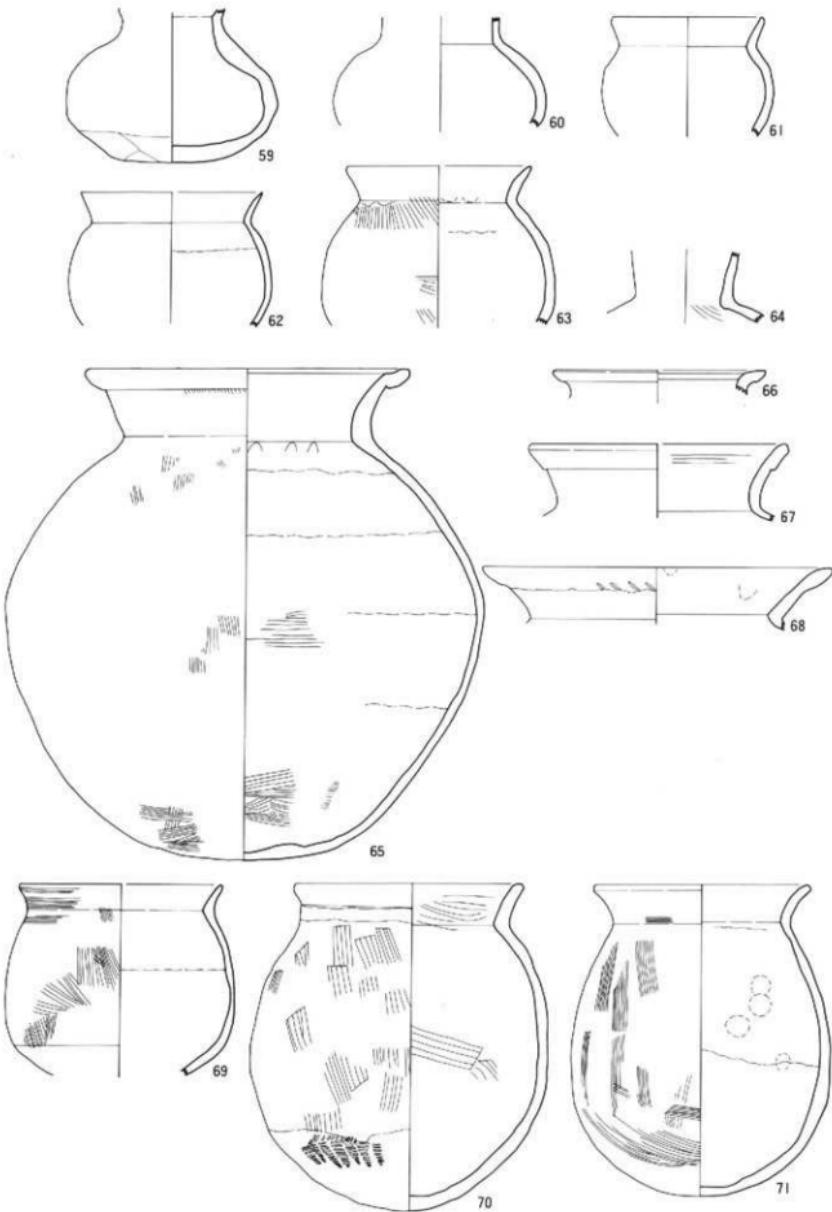
72は口縁部の約1/2を欠損しているがほぼ完形である。口径17.0cm、器高29.0cm、最大径21.9cmを測る。底部は丸底であり型作り手法によるものと見られるが接合部分に荒い横方向のヘラ削りを施し接合痕を消している。「く」の字型に外反した口縁端部は直上方向に面取り気味に丸めているため、口縁の内側に浅い段がみられる。胴部内面は中央から底近くにかけて6本／1.6cmの縦斜め方向のハケ目が施されているが中央部から頸部には横方向のナデが施され指頭圧痕が残る。また胴部外面は5本／1.3cmの斜め方向のハケ目が施されている。また口縁内側にも横方向のハケ日の跡が見られる。胴部外面は器高の2/3まで炭化している。73はほぼ完形であるが器壁が薄く器皿全体の剥離が大きい。口径17.8cm、器高26.9cm、最大径は21.1cmである。底部は型作り手法によるもので、狭いながら平坦面を有するのはこの1点だけである。口縁端部は直上方向に丸めている。74は口縁部分が約1/2残存し口径16.5cmである。口縁端部は直上方向に丸めている。75は胴部の一部を欠損し剥離も激しいがほぼ完形である。口径17.5cm、器高27.0cm、最大径23.0cmを測る。底部は丸底であり型作りであったとみられる。口縁端部はそのまま外反させて丸めている。胴部内面は横方向の6本／1.5cmのハケ目が見られる。また外面には縦または斜め方向の6本／1.2cmのやや細かいハケ目を施す。胴部の1/4に炭化の跡が残る。76は底部を除く1/2が残存している。口径16.9cmで最大径は20.2cmである。口縁部端部の作りは75と同じである。胴部内面には5本／1.1cmの横方向のハケ目がまた外面には4本／1cmの斜め方向のハケ目が残る。77は口径27.5cmの大型の壺であり、口縁部の2/3が残存していた。口縁端部を75と同様にそのまま



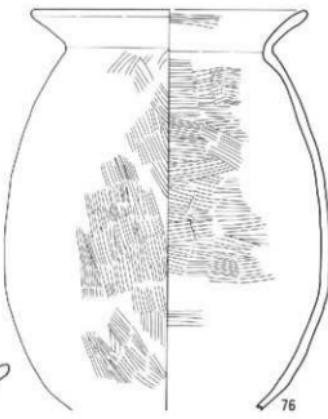
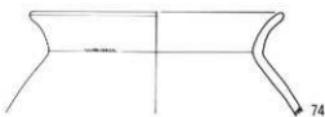
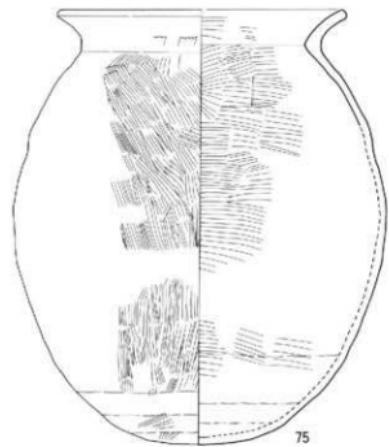
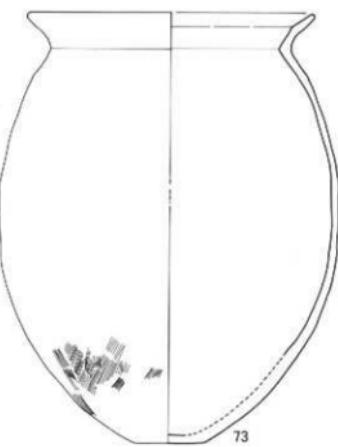
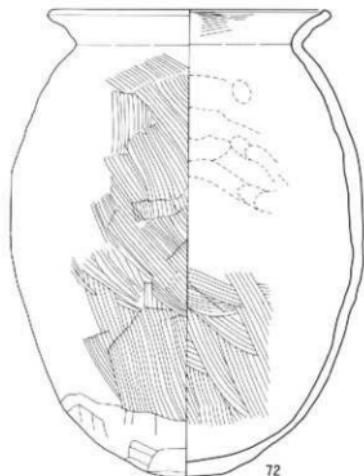
第27図 SD308出土の遺物 その1



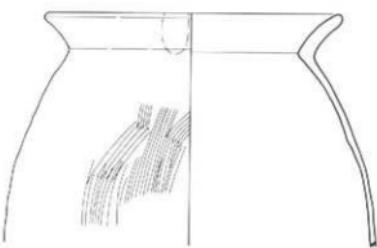
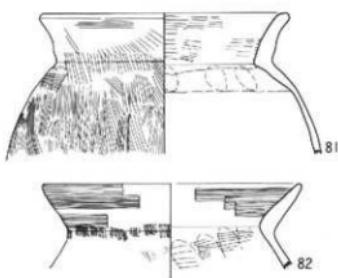
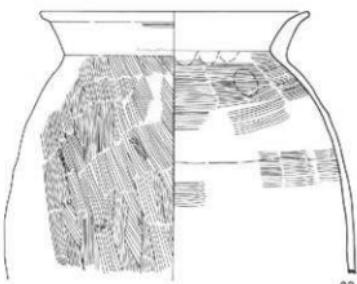
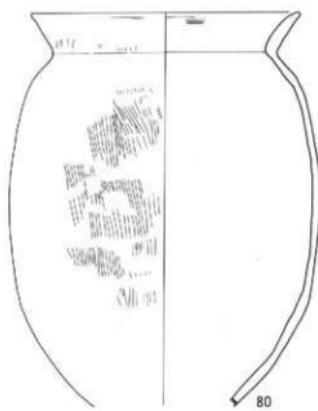
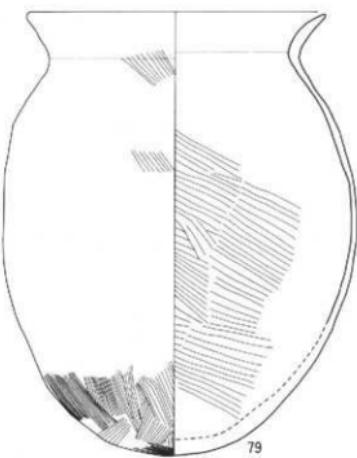
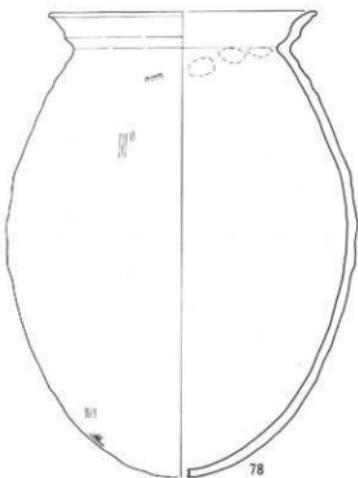
第28図 SD308出土の遺物 その2



第29図 SD308出土の遺物 その3



第30図 SD308出土の遺物 その4



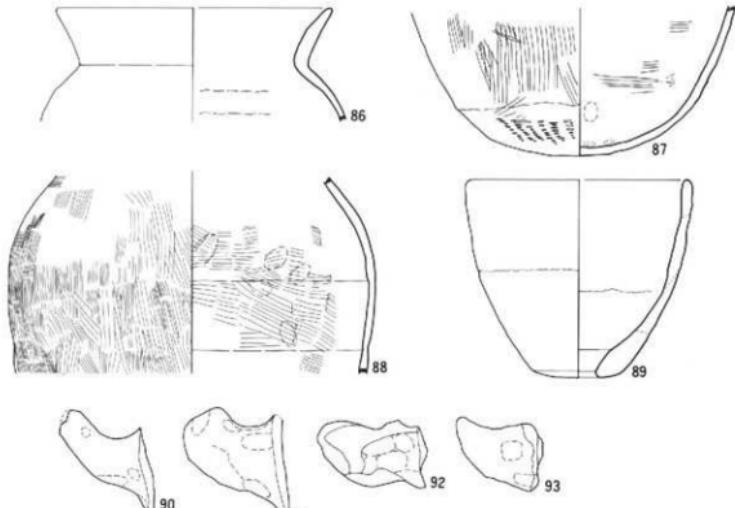
第31図 SD308出土の遺物 その5

ま外反させ丸めているためここに図示した。

78~80は口縁端部をそのまま外反させ三角につまみ出している(壺e2)。78は底部から胴部にかけて1/2が欠損している。口径16.5cm、器高28.8cm、最大径21.7cmである。底部は丸底である。器面の剥離が大きいため調整は不明である。79は口縁部の約1/3が欠損しているが他はほぼ完形である。口径18.5cm、器高27.5cm、最大径22.0cmで底部は丸底である。器面の剥離が大きいが胴部内面には、5本／2cm程の荒い斜め方向のハケ目が見られるが底部にはおよばず凹凸が見られる。また外面には4本／1cmの斜め方向のハケ目がわずかに残るが底部には7本／1cmの細かいハケ目が丁寧に施されている。80は底部から体部にかけての2/3を欠損している。口径16.5cm、最大径は19.3cmでやや丸みが少ない。口縁部は厚手でありその点では83~86にも似ている。胴部内面には横方向のハケ目の跡がわずかに見える。また外面は5本／1cmの細かい縦または斜め方向のハケ目が残る。体部外面の1/5に強く炭化した部分を残す。

81~86は口縁部から体部にかけての破片である。86は口縁部が「く」の字型に外反する壺の中で特に頸部との接合部分が肥厚しているものである。いずれも端部はそのまま外反させ丸めている。81は口径15.2cmで胴部外面には細かい斜め方向のハケ目が見られる。82は口径15.8cmである。81・82は口縁部内面にもハケ目の跡が見られる。83は口径16.5cmである。胴部内面の横方向のハケ目は6本／1cmで、同じ工具で外面にも斜め方向のハケ目が施される。84は口径17.5cm、85は口径18.0cm、86は口径17.0cmである。87は底部の破片である。底に残る編目は底部を竹籠の中で成形した型作りの手法による事を示している(壺e3)。

**竹籠の跡**  
**小型瓶**  
e3) 88は壺の胴部である。89は小型の瓶で約1/3が残存している(小型瓶)。口径13.5cm、器高12.2cm、底径5.5cmで底部中央に約2.5cmの円形の穴があいている。内面に輪積みの跡を残す。90~93は把手である。91・92は同一遺物である可能性をもつ。



第32図 SD308出土の遺物 その6

### SD 307 (第34図)

I～J - 9 グリッドに位置する。長径4.5m、短径0.5m程、深さ0.1mの浅く、SD 308と東端が重なるがSD 308より新しい時期の溝である。出土遺物は須恵器の环身(第34図5)である。完形で、口径8.5cm、最大径10.2cm、器高2.9cmである。器形は浅く偏平でヘラ削りの位置も低い。立ち上がりは低く短い。中村編年第II型式6段階に位置付けられ、この溝の年代を示すものである。

### SD 501 (第1図)

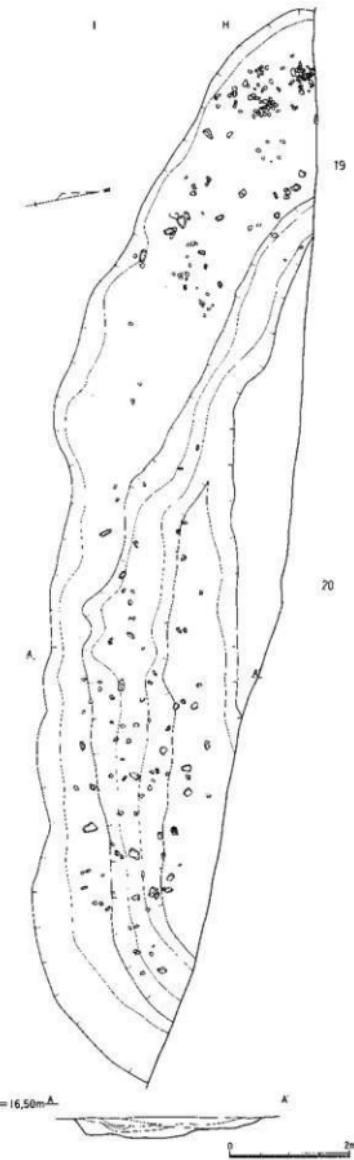
5区J～K - 13～14 グリッドに位置する。5区をほぼ南北に横断する溝で、幅0.45～0.5m、深さ約0.2m 程である。中央部分は電柱跡による攪乱を受けている。無遺物であるが現地調査の所見では古墳時代である。

### SD 703 (第33図)

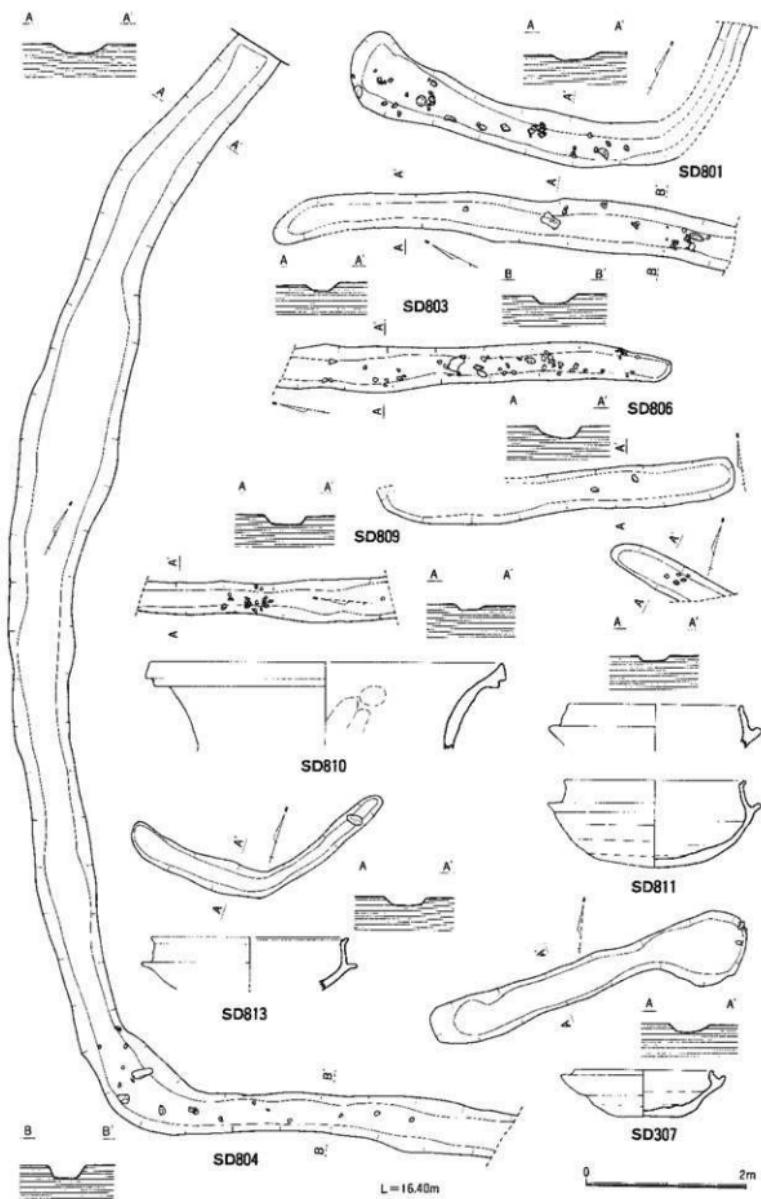
H～I - 19～21 グリッドに位置する。7区中央部分の北端で検出した溝で緩いカーブを描きながら7区北側へ北端が続いている。検出長は約17m、幅も3.0～3.5mあるが深さは0.25mと浅く広いが、土層断面からは新・旧の流れが観察される。遺物は須恵器・土師器と小砾が散在している。須恵器は环蓋、环身、甕等の破片である。环の中には中村編年第I型式4段階の包含層遺物第22図1と良く似ているが稜がやや付いた手の环蓋の口縁部破片や第II型式5段階のSF 1416出土遺物(第22図3)に良く似た环身の口縁部破片が含まれており、新・旧の溝の年代を示している。土師器は古墳時代のものであるがほとんど小破片で、固化できるものはなかった。

### SD 801 (第34図)

8区J - 23 グリッドに位置する。検出長5.6m、幅0.6m、深さ0.05～0.13m 程のL字型の深い溝である。一部が近世の攪乱により破壊されている。このため出土遺物の中には灰釉陶器や山茶碗の破片も少し混入



第33図 溝 SD703造構平面図 (1 : 80)



第34図 溝 造構平面図 (1:60)・出土遺物 SD307 SD801 SD803 SD804

SD806 SD809 SD810 SD811 SD813

しているが、大部分は古墳時代の須恵器や土師器である。いずれも小破片であるが須恵器には环や壺の口縁部が、また土師器には高环脚部・壺の折り返し口縁部・壺底部破片等が含まれていた。SD 801 は SD 812 を周溝とする古墳の中に位置するが SD 801 の須恵器の环の破片が SD 812 から出土したものと同一個体である点や埴輪の破片も含まれていた事から、古墳の墳丘が削平された後、SD 801 ができたといえる。

#### SD 803 (第34図)

J - 22 グリッドに位置する。検出長約6.0 m、幅0.23 m、深さ0.1 m 程の南北方向の浅い溝である。南側を平安時代の溝 SD 701 に切られている。遺物は土師器小破片で环・高环脚部・壺口縁部等である。

#### SD 804 (第34図)

I ~ J - 22 ~ 23 グリッドに位置する。幅0.8~0.5 m、深さ0.1~0.15 m 程の浅い溝である。SD 801 を巡るように半円形に近い。遺物は須恵器の环や土師器の环・高环・壺の小破片であり、埴輪らしき破片も含まれていた。SD 806・SD 810 等と切り合っているが、両者を SD 801 からの小さな排水溝とすれば、SB 804 は SB 801 の周囲を巡る大きな排水溝とも考えられる。

区 画

#### SD 806 (第34図)

I ~ J - 22 ~ 23 グリッドに位置する。検出長4.7 m、幅0.55 m、深さ0.15 m 程の南北方向の細長い浅い溝である。北側は SB 801 に、南側は SD 804 に切られているが、SB 801 と SD 804 を結ぶ排水溝的な性格も考えられる。出土遺物は土師器片の环や壺の折り返し口縁部、埴輪小破片、祭祠遺物である滑石製模造品の有孔円盤 (第11節 第53図6、図版40) 等である。

有孔円盤

#### SD 809 (第34図)

J - 22 グリッドに位置する。東西に細長い溝で検出長4.5 m、幅0.5 m、深さ0.1 m 程の浅い溝である。遺物は土師器の环・壺等の小破片である。

#### SD 810 (第34図)

I ~ J - 22 グリッドに位置する。検出長3.2 m、幅0.53~0.4 m、深さ0.07 m 程の南北の細長い溝である。北側は SB 801 に、南側は SD 804 に切られているが、SD 806 と同様に SB 801 からの排水溝的な性格も考えられる。出土遺物は須恵器と土師器である。須恵器は第35図1に図示した広口壺の环部である。口縁部の約1/6が残存している。口径は21.8cmで口縁部は緩やかに外反し、端部は二段になる。この頸部破片は SD 806 からも同一個体の破片が出土しており、SD 806 との同時性を示している。土師器は壺の小破片である。

#### SD 811 (第34図)

J - 23 グリッドに位置する。検出長1.4 m、幅0.4 m、深さ0.06 m 程の東西南方向の浅い溝で東側を SD 804 に切られる。出土遺物は須恵器と土師器の小破片である。第34図2~3は須恵器の环身である。2は約1/6が残存している。底部は11.2cm、最大径13.2cm、器高5.2cmである。底部は丸底で、ヘラ削りは底部の約1/3である。受部は強く水平に引き出しているがやや丸みを持つ。立ち上がりは高くわずかに内傾するが、端部は垂直である。端部は段を持つが若干鋭さに欠ける。SB 801 より出土した环身 (第7図1) と同じ器形の特徴を持つが受部や口縁端部の段が鋭い点などから中村編年第II型式1段階の中でも古い要素を持つものとみられる (須／环身 b3)。3は小破片である。受部は水平に引き出しているが鋭くはない。立ち上がりは高いが端部の段を消滅している事から2よりも1段階新しく中村

編年第II型式2段階に位置付けられる可能性を持つ。

#### SD 813 (第34図)

J-22に位置する。緩いL字型の溝で検出長3.75m、幅0.43~0.35m、深さ0.1m程である。SD 812を周溝とする古墳の墳丘内にあるが、SD 812の造り出し部の一部とも切り合っている。出土遺物(第34図4)は須恵器の坏身である。口縁部の小破片であるが受部は強く水平に引き出しているが鋭さに欠ける。立ち上がりは高く、わずかに内傾するが端部を強く引き出し外反させ、端部内面には段を持つ。SD 811の須恵器坏身(第34図2)とほぼ同じ特徴を持つ事から中村編年第二型式1段階に位置付けられる可能性が強く、古墳の墳丘が削平された後とみられる遺構SB 801やSD 806と同時期のものである。

#### SD 10B11 (第3図)

10区BのE-18グリッドに位置する。幅0.2m、深さ0.08m程の浅い溝である。出土遺物は土師器の壺の破片である。

#### SD 10B12 (第3図)

D-E-18~19グリッドに位置し調査区を南北方向に横断する。検出長10.5m、幅0.9m深さ0.2m程の浅い溝である。出土遺物は土師器の壺・模倣高壺・鉢・甕・瓶の把手であるがいずれも小破片である。

#### SD 10B13 (第3図)

D-18~19グリッドに位置する。ほぼ東西方向の溝で検出長10.5m、幅0.7~0.8m、深さ0.2m程である。

#### SD 1101 (第35図)

11区ABCを東南から北西方向に走る溝である。11区Aでは途中で途切れる部分があるため短い溝が連続する形となる。溝の幅は約0.7~1.0m程、深さは0.1~0.15m程の浅いものである。溝には拳大の縹が多く散在し、その中に須恵器や土師器の破片が含まれていた。

第35図1は須恵器の坏蓋である。約1/2が残存して口径9.9cm、器高3.9cmである。内面中央部にわずかにヘラ削りが施される。縹線は沈線化しており、口縁部を内傾させている。器型が小型化するため中村編年第二型式6段階に位置付けられる(須/坏蓋h1)。2は土師器の壺である(壺c3)。約1/3残存し口径13.5cm、底径6.0cm、留高6.0cmである。底部は平底で器壁が厚い。器高が高いため立ち上がりは急で口縁端部はそのままつまんでいる。

SD 1101は11区で検出している掘立柱建物SH 1104と切り合い関係を持ち、また11区の掘立柱建物群と方位的な整合性を持たない。この事からSD 1101は検出された須恵器坏蓋1の年代とみられ、掘立柱建物群よりは新しいものである。

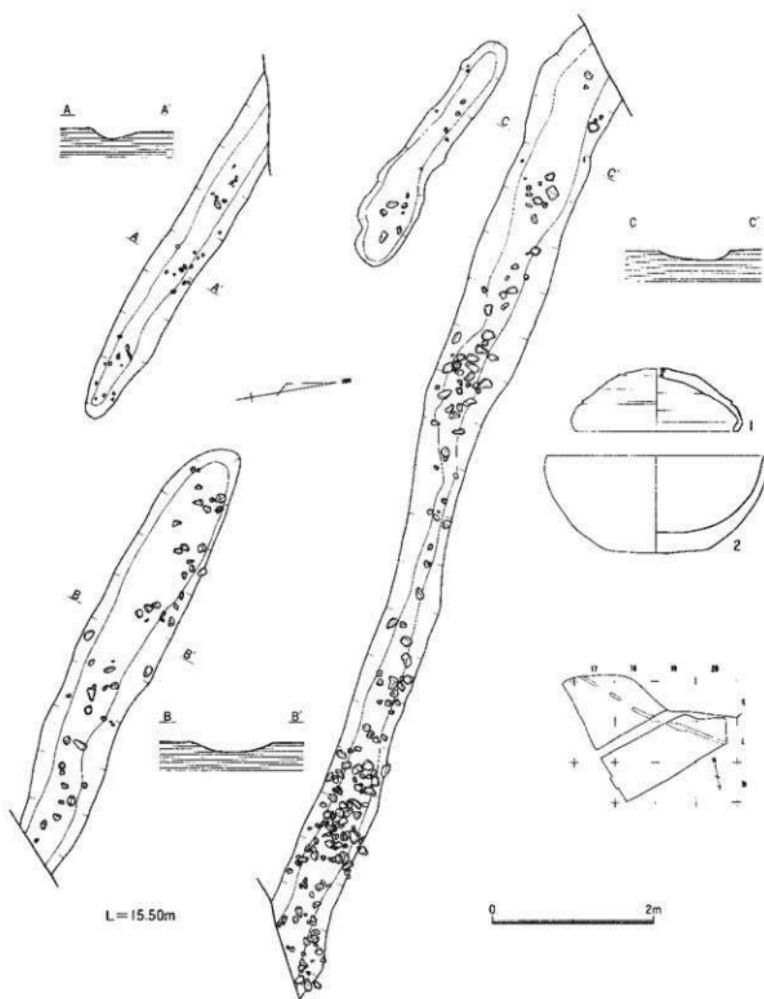
#### SD 1426 (第36図 図版19)

J-K-31~33グリッドに位置する。東西方向の溝である。幅1.0m前後、深さは0.1~0.2m程の浅い溝である。付近には奈良・平安時代の柱穴が集中しているため特に東側部分は覆土も不明確で所々で攪乱を受けていたが、西側部分は比較的土師器片の集中する部分がみられた。遺物は須恵器と土師器に分かれるがいずれも小破片である。須恵器には坏蓋・坏身・甕等の破片が含まれていた。土師器は壺・高壺・短环壺・甕等が含まれていたがその内図示できるものを第36図1~3に示してある。1は高壺の脚部である。2は短环甕の把手である。3は甕の口縁部である。

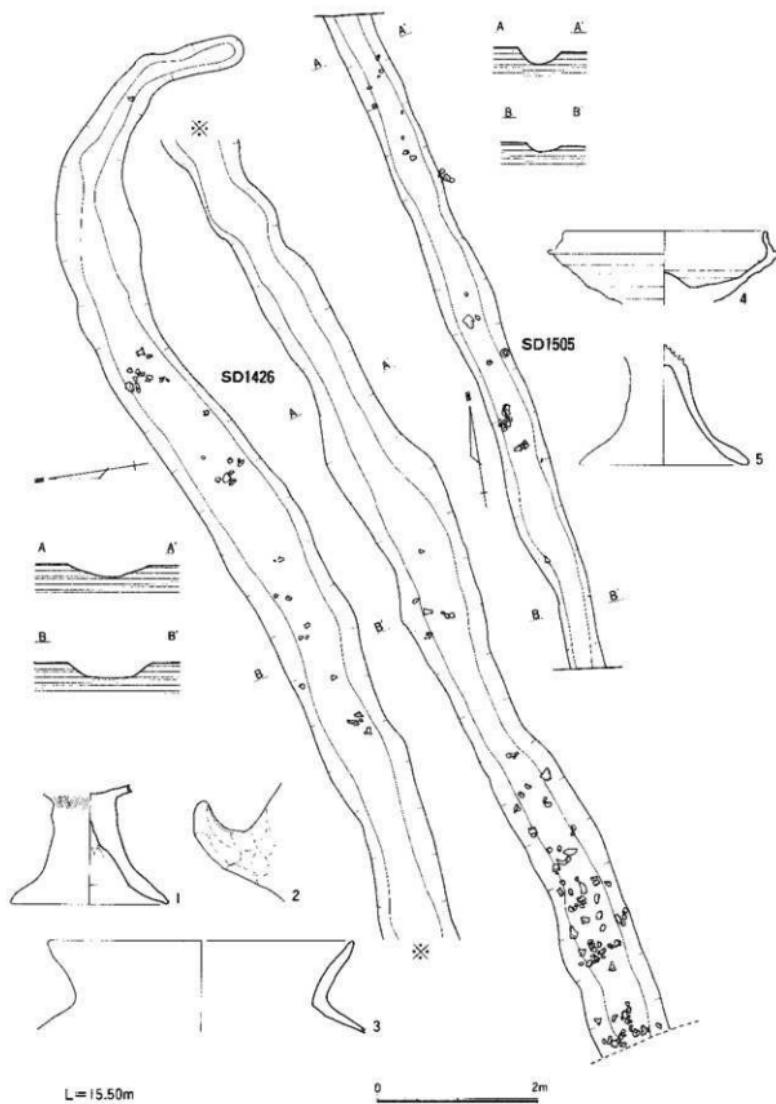
### - 南北方向の溝

SD 1505 (第36図 図版19)

F - 33 ~ 34 グリッドに位置する。15区を南北方向に横断する溝である。幅0.55m、深さ0.2m程であるが上層断面からは0.5m程の掘り込みを持っていたとみられる。遺物は須恵器と土師器、小砾である。第36図4は須恵器の坏身である。約2/3残存しているが底部を



第35図 溝 SD 1101 造構平面図 (1 : 60) 出土遺物



第36図 溝 SD1426 SD1505遺構平面図 (1 : 60) 出土遺物

欠損している。口径12.45cm、最大径14.5cm、器高4.5cmである。ヘラ削りはわずかであり、ノタ目が顯著である。受部は水平に引き出し、立ち上がりはやや内傾するが短い。器面は荒くまた底部内面に大きな焼成ムラがある。中村編年第II型式5段階に位置付けられる。5は土師器の高杯の脚部である。

## 第8節 旧流路

### SD 816 (第37図 図版20・29~33)

H～J-24～25グリッドに位置し、8区A北側東隅より8区Bの南側にかけて両地区を斜めに横断する形で検出された旧河道である。第37図は8区A南東側の土層断面図である。当初SD 815として断面図中の(A)のレベルまでを8区A第2面で検出したが、さらに第3面で幅広い河道跡である事が解り、改めてSD 816として調査した。その結果、断面図中(A)はSD 816が埋没していったあの時期の流れを反映しているものである事が解った。しかし包含する遺物を比較すると両者に含まれる年代差のある十器の出土レベルは混在しており、あえて分離して示す必要はないとの判断した。またSD 816の下層部分をさらに観察すると断面図(B)(C)にあたる新旧の2本の流路から成り立っており、遺物を含むのは新しい河道(B)である。

古い河道(C)は無遺物であり河道の川床ないし両岸壁は砂礫層である。これらの流路の形成については「原川遺跡I」第7章の加藤芳郎氏の分析を参考されたい。新しい河道は完掘時点長さ約25m、幅9m、深さ約1.5mである。北西から南東にかけて蛇行し、所々に凹凸がみられ、須恵器・土師器・碟・木片の破片が散在していた。多量の遺物の大部分は摩滅した小破片であるが、その中で図示できるものを第39図～43図に示した。新しい河道の遺物は5世紀後半から7世紀後半にかけてのものが多い。特に第38図15の須恵器の有蓋高杯の蓋や24の短頭壺は川床の砂礫層直上より出土しており、新しい河道の上限を示すものである。またこの新しい河道は、上層部分では8区に広がる奈良・平安時代の包含層と明確な区分ができないためSD 816の埋没年代は確定できない。しかし図示できなかったが、流路の上層部分の遺物の中には若干の高台のある須恵器の壺や灰釉陶器、山茶碗の破片を含むので、奈良時代以降は小さな河道となり平安時代末頃までには埋没したものと考えられる。

#### 須恵器

第38図1～25は須恵器である。1～14は壺でその内1～6は壺蓋、7～14は壺身である。1は壺蓋で約1/2が残存している。口径12.0cm、器高4.6cmである。天井部は平坦でヘラ削りは天井部外面の2/3以上あり、稜は明瞭であるがやや摩滅している。口縁部は器高の1/2以上あり、中央部分が外側にふくらみを持つ。口縁端部は明瞭な段を有する。中村編年の第I型式5段階とみられる(須／壺蓋b)。2は小破片であるが口径14.2cmである。

3は約2/3が残存している。口径14.1cm、器高3.8cm、器高は低く偏平である。天井部は器高の1/2まで荒いヘラ削りの痕がみられるがヘラ切りは未調整である。また稜線はみられないがその位置が段をなしている。SF 1416で出土した第22図2の壺蓋と同一であるがヘラ削りがやや丁寧で、また稜の痕跡が残ることから中村編年第II型式5段階の古い段階とみられる(須／壺蓋f)。

4は約1/3が残存している。口径11.4cm、器高4.6cmである。天井部は平坦でヘラ削りは天井部の1/3ほどである。稜はやや丸みをもち口縁部は器高の1/3で口縁端部はやや内側に

#### 旧 河 道

#### 新・旧の 流 路

#### 出 土 状 況

#### 新し 河道 の 年 代

#### 須 惠 器

丸めている。5は1/3が残存している。口径11.5cm、器高4.4cmである。天井部は平坦でヘラ削りは天井部のごく一部に過ぎない。縁は沈線化し口縁端部もやや内傾しながら丸く仕上げられている。4・5は3に比べやや小型化する事から中村編年第II型式5段階の新しい部分に位置付けられる(須／环身g2)。6は1/2が残存している。口径10.4cm、器高3.7cmである。ヘラ削りは天井部だけで稜線も消滅し口縁部分をわずかに内傾させている。最も小型化に向かう段階として中村編年第II型式6段階とみられる(須／环身h2)。

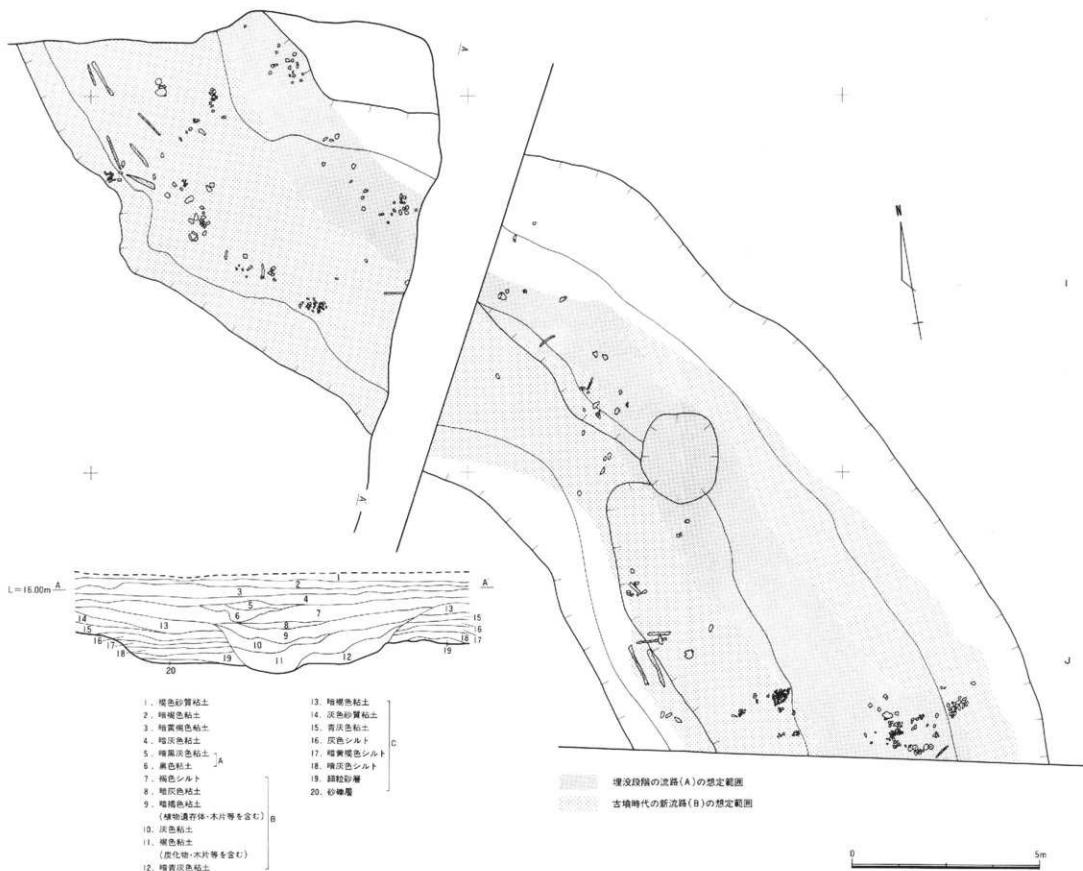
7・8は小破片である。7はヘラ削りの位置も高く身受けも鋭角であり口縁端部にも段を有するがやや大型化しているので中村編年第II型式1段階とみられる(須／环身b)。8は身受けと口縁端部は丸みを帯びている。中村編年第II型式3段階とみられる(須／环身d)。

9は环身で1/2残存している。口径10.5cm、最大径12.7cm、器高3.85cmである。底部は平らで回転ヘラ切りは未調整で、底部外面にわずかに回転ヘラ削りが施されている。立ち上がりは低く受け部とも端部は丸くつくられている(須／环身g1)。10は小破片で立ち上がり部分を欠損しているが、端部は丸く底部にわずかに回転ヘラ削りがみられ、また器形も9に似ている。中村編年第II型式5段階の新しいものに位置する。11は口径9.4cm、最大径11.6cm、器高3.95cmでほぼ完形である。底部は平底でヘラ削りは器高の約1/3である。立ち上がりは低く受け部と端部は丸くつくられている。12・14は完形である。12は口径9.0cm、最大径10.6cm、器高3.55cmである。器高の1/3にヘラ削りがみられる。13は口径9.2cm、最大径11.0cm、器高3.15cmである。器高の1/3に複雑なヘラ削りがみられる。14は口径9.2cm、最大径11.1cm、器高3.15cmである。底部はわずかにヘラ削りを施すがきわめて複雑である。12～14はいずれも立ち上がりは低く短く、受け部とともに端部は丸くつくられている。11～14はいずれも口径が10cm未満であり、最も器形が矮小化した中村編年第II型式6段階に位置づけられる(須／环身h1)。

**有蓋高环の蓋**  
15～20は高环である。15は完形に残っている有蓋高环の蓋で口径12.3cm、器高5.1cmである。大井部はやや丸みを帯び、ヘラ削りは天井部の約1/3以上でそれ以下はていねいにナデている。つまみは貼り付けてあり中央が凹んでいる。縁は鋭く、口縁をやや内傾させた後口縁端部を強く外側に引き出すようにナデしているため、端部内面にはっきりした面ができる。11と同じ中村編年第I型式5段階に位置付けられる。16は环部の破片であるが口縁部と脚部が欠損している。17・18はいずれも脚部である。17は小型の高环の脚部である。17の脚部は短く「ハ」の字状に開き端部は面を取る。脚部内面もよくナデである。

**ヘラ記号**  
19～20は鉢の底部である。21は平瓶で2/3以上残存している。口径7.2cm、胴部最大径16.6cm、底径5.8cmである。底部は平底であり回転ヘラ削りは外面の1/12ほどである。底部と胴肩部上面に「川」のヘラ記号がみられる。胴部最大径は肩部に位置し二重の沈線を施す。环部はほぼ垂直で中位で二重の沈線をめぐらした後少し外反する。口縁端部は丸めている。7世紀代と考えられる。22は壺の底部破片ではないかとみられるが横瓶の体部の可能性もある。

23は小型の短頸壺であるが口縁部を欠損している。体部最大径は胴部の1/2以上にあり、体部上面の肩の張りは明瞭にみられる。底部は丸く良くナデしている。胴部中央にカキ目が残りまた肩部には5本/1cm単位のクシ描き列点文がみられる。24は短頸壺で約1/2残存している。口径12.8cm、器高24.5cmで底部は丸底氣味である。胴部は丸みをおび胴部最大径はやや中央より上に位置し24.8cmである。内面から口縁部は丁寧にナデしている。外面は5



第37図 旧河床 S D 816遺構平面図 (1 : 100)

本／1.4cmのタタキが施されている。

25は大型壺の頸部である。頸部径が36.5cmである。内外面ともよくナデであり、内面には当て具の跡がわずかに残る。その他図示できなかったが須恵器には高台を持つ环身底部破片・壺底部破片、灰釉陶器には碗・壺の破片・少量の山茶碗底部破片が含まれていた。

#### 土師器

第39図1～第42図75は土師器である(図版30～33)。1～38は土師器の环である。1は模倣环の环蓋である(模倣环蓋a2)。1は1/3残存しており口徑12.75cm、器高4.6cmである。稜に相当する部分に横方向のハケ目があてられているため稜は明瞭ではない。2～5は模倣环である。いずれも底部は丸底である。2は口徑13.4cm、器高4.0cmで器高の1/2の位置に受け部がある。立ち上がりは垂直で端部を丸めている(模倣环身a)。3は口縁端部が欠損している。4は口徑11.75cm、器高4.15cmで受け部が高く、立ち上がりは短く内傾している(模倣环身b)。5は口徑10.9cm、器高4.65cmで受け部は高い。立ち上がりは短く少し内傾している。6・7は口縁部を「く」の字型に屈曲させた碗である。6は口徑13.1cm、器高5.8cmで底部は平底気味である(碗a1)。7は口徑11.1cm、器高5.13cmで底部は球形である(碗b)。7の口端部の外反はごくわずかであり环aに近い。

8～38の环身は底部の形により、丸底のもの(环b)、平底気味のもの(环c)、球形のもの(环a)に分かれる。8～17は底部が丸底のもの(环b)である。8～11は口縁部を内湾させ端部を三角形につまみ出したもの、12～16は口縁部を直立させ端部をつまみ出したもの、17は口縁部を直立させ端部を丸めているものに分かれる。

18～31は底部が平底気味のもの(环c)である。18～20は口縁部を内湾させ端部を三角形につまみ出したもの、21～22は端部を丸めたものである。また23～30は口縁部を直立させ端部を三角形につまみ出したもの、31は端部を丸めたものである。32～38は底部が球形のもの(环a)である。32は口縁部を内湾させ端部を三角形につまみ出しているもの、33～38は口縁部を直立させ端部を三角形につまみ出しているものである。

39～50は高环である。形態は环部の口縁部分が大きく開くものの(高环c)と碗型を呈するもの(高环d)に分かれる。39～42はその中でも長脚の脚部を持つ比較的大型の高环(高环c1)である。39は全体の1/2が欠損している。口徑16.8cm、底径12.5cm、器高16.95cmである。环部の稜は明瞭で口縁部はやや内湾気味の後、さらに大きく開いている。端部はそのままの方向で三角形につまみ出している。また环部内底には強いナデによる凹がみられる。脚部は直線的で裾部は「ハ」の字型に開いている。脚部の空洞部は高さまでヘラで削り出している。40は39と同型で环部の1/2が欠損している。口徑18.2cm、底径12.2cm、器高16.65cmである。环部と脚部の境に接合時のしづり込みの痕が残る。41は脚部の1/2が残存しているが39・40と同型の脚部である。42は环部の1/2が残存している。环部の稜線がやや甘くなっているが39・40と同型である。43～45は短脚の脚部である。いずれも端部をやや水平に引き出しめている。脚内面の空洞部は高い。46～50は环部が碗型を呈する模倣高环(高环d)である。46・47は口縁端部をさらに外反させるもの(高环d)である。46は完形で口徑14.1cm、器高8.0cm、底径9.5cmである。环部は深く体部は丸みを持ち、环部よりも脚部が短い。脚部は环底部より「ハ」の字型に裾部が広がる。また空洞部は高く広いため脚部の器壁は薄い。47は口縁部の3/4が残存している。口徑13.5cmで46と同じ型式であるがやや环部が深く丸みを持つ。48は环部分が欠損しているが、残存する脚部の形が46によく似ているため、46の高环の大型のものではないかとみなしてここに掲載した。底径は

#### 土師器

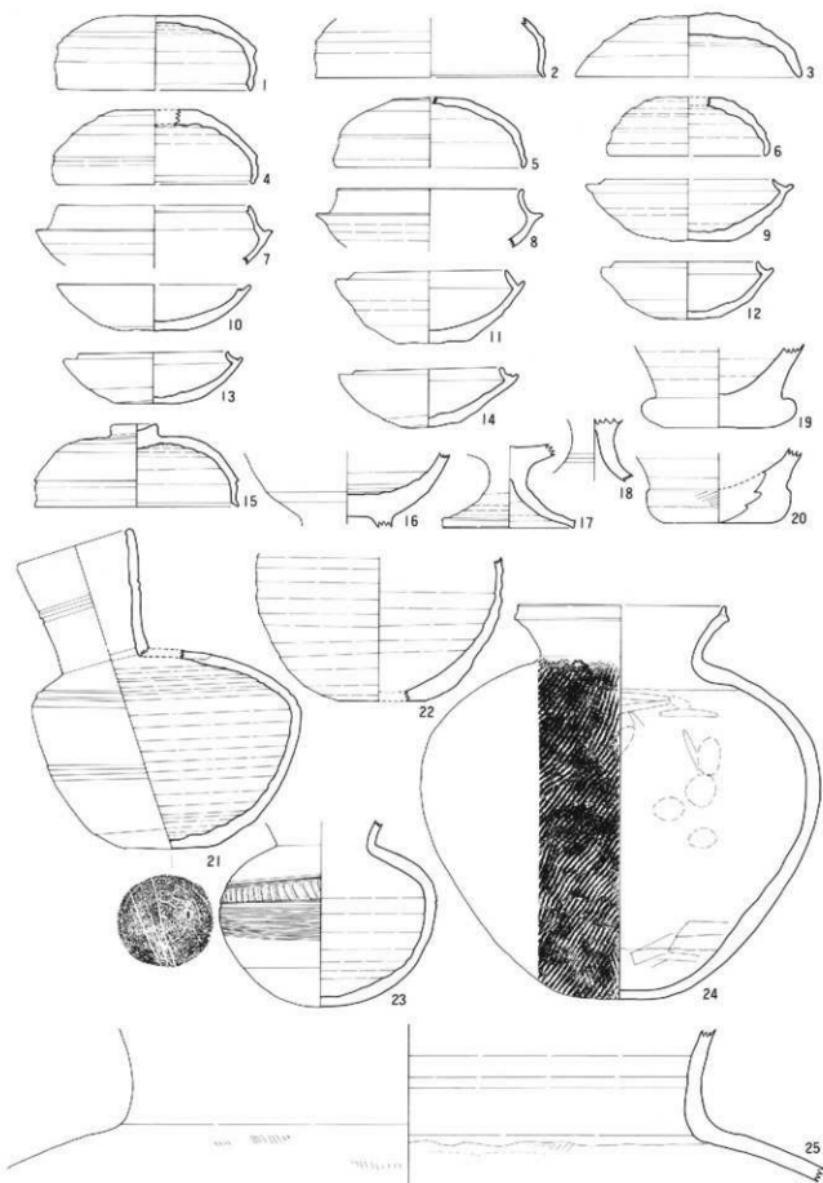
#### 模倣環

#### 环身

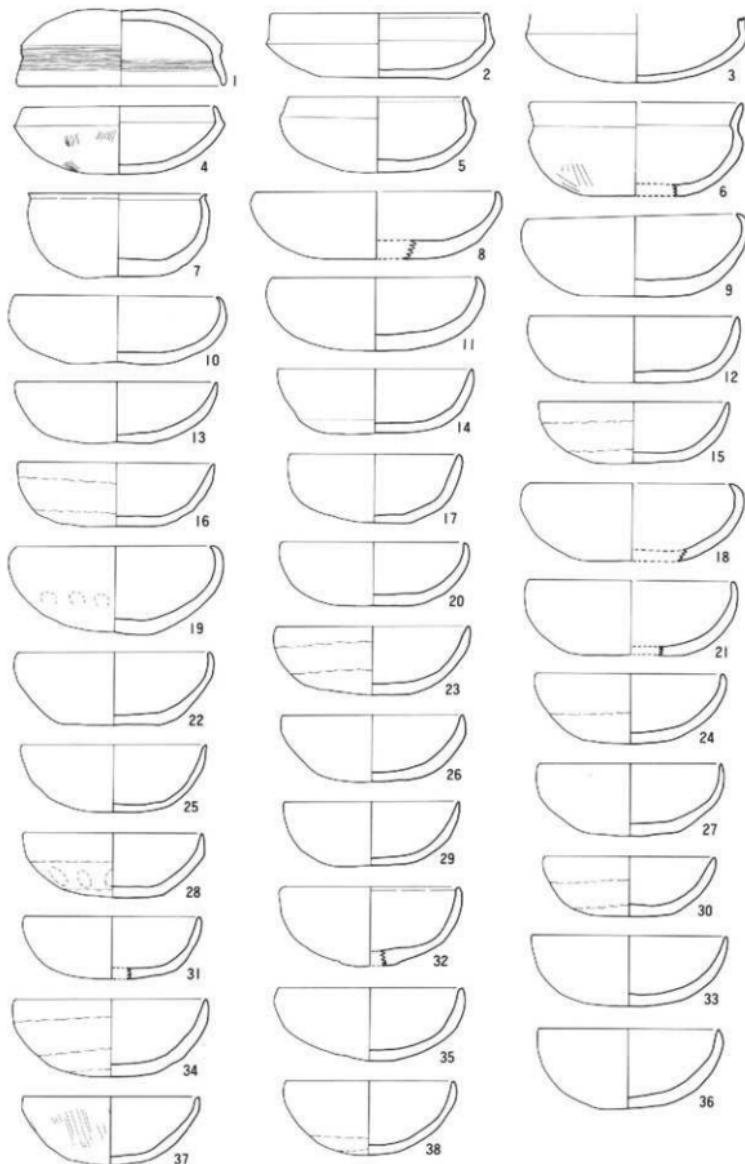
#### 高环

12.1cmである。49・50は壺口縁端部が内傾し先端を三角形につまみ出している模倣高壺(高壺d2)である。49は約3/4が残存している。壺部は浅いが、壺部に比べ脚部はより短く、短い裾部がそのまま「ハ」の字型に広がっている。また脚内部の空洞部は広く高いため器壁は薄い。50は壺部の1/2の破片である。49と同型とみられる。

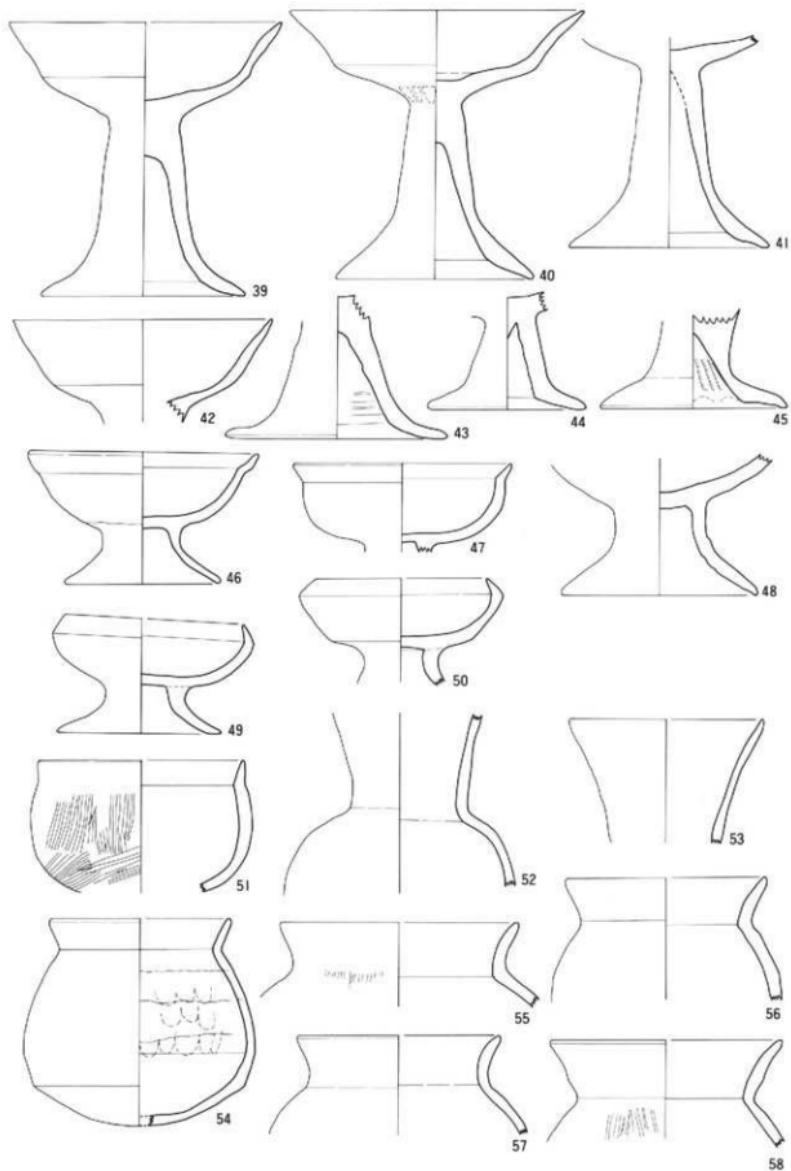
- 碗** 51は碗である(碗b)。口縁部から体部にかけて1/3が残存しており底部は欠損している。口径12.6cm、最大径13.7cmで、口縁が直立し口径と最大径の差が余りないものである。
- 壺** 52~67は壺である。52・53は長頸壺であるが底部は丸底であるため壺a1とした。52は頸部から体部、53は頸部の小破片である。54は小型の短頸壺で1/2が残存している(壺f)。口径10.9cm、器高12.75cmで底部は丸底である。脚部最大径は14.3cmで胴部下半にある。底部と脚部の接合部に明瞭な稜線を持つ。器面はていねいな横ナデである。55~58は短頸壺の口縁部破片である。いずれも「く」の字型に外反する口縁部である。59は中型の把手付壺で完形である(壺d)。口径15.6cm、器高18.7cm、底径7.1cmで底部は平底である。脚部は球形で把手位置はほぼ中位にある。口縁部は緩やかに外反し端部を丸めている。内面は幅7本/1.5cmの斜め方向のハケ目がみられる。また外面は幅0.9cm程の工具で斜め方向に調整した後ナデを施している。
- 広口壺** 60は複合口縁をもつ広口壺のLI縁部破片である(壺a)。口径15.3cmである。口縁部を外反させた後、さらにわずかに外反気味に立ち上がる。加飾はなく全てナデ調整によっている。61~63は折り返し口縁をもつ壺のLI縁部破片である(壺b)。61は口径17.4cmである。頸部はほぼ垂直に立ち上がり、折り返された口縁部はさらには外側に開いている。口縁内側は丁寧にナデされている。62・63は口縁部が「く」の字型に外反したものである。折り返し部分は61に比べ薄く調整は粗雑になっている。62は口径19.6cm、63は口径20.4cmである。
- 64~67は口縁部が垂直またはわずかに外反する壺である(壺c)。64は約4/5残存している。口径16.8cm、器高28.5cmで底部はやや丸みをおびた平底である。最大径は28cmあり、器高の約2/3に位置するため肩が大きく張っている。器面の調整は摩滅が激しくて不明である。65~67もほぼ64と同型とみられるLI縁部破片であるがLI縁端部の処理の仕方が、そのまま丸めているもの(65)、三角形につまんでいるもの(66)、内側に丸めているもの(67)とわずかに異なる。
- 甌** 68~73は甌である。いずれも口縁部が「く」の字型に屈曲する。68は口径18cmである。口縁部はナデしているが外面は斜めに、また内面は横に5本/1cmの同一工具でのハケ目が見える。69は口径18.0cmである。70(甌g)は1/3が残存している。口径17.8cm、器高27.6cmで底部は丸底である。最大径は胴部中央に位置し21cmと胴の丸みは少ない。調整は内面上部は横ハケ、外面上部が斜め縦方向のハケ目で、6~7本/1cm単位の同一工具とみられる細かいものである。外面下半は荒いハケ目で4本/1cmの単位である。71は口径18.0cmで調整は68と同一である。72は口径15.4cm、73は口径19.8cmである。74・75は甌の把手部分を反転実測したものである。なおこの他に石製品として紡錘車が検出されているが第11章で扱う事とする。
- 木製品** 76は加工木製品である(図版33)。長さ40.6cmで中央部は径6.9cm、厚み1.5cmである。上下の端は断面三角形になるように削り込んでいる。片側の端部には幅1.8cmの凹があるがその先は不明である。また中央部にも長径2.4cm、短径1.4cm程の四角い穴がある。焼けて炭化した部分は図にスクリーントーンで示してあるが裏面は約2/3が焼けている。特に中央には長
- 機具** 径6cm、短径3cm程の穴があいている。織機の一部の可能性もあるが用途は不明である。



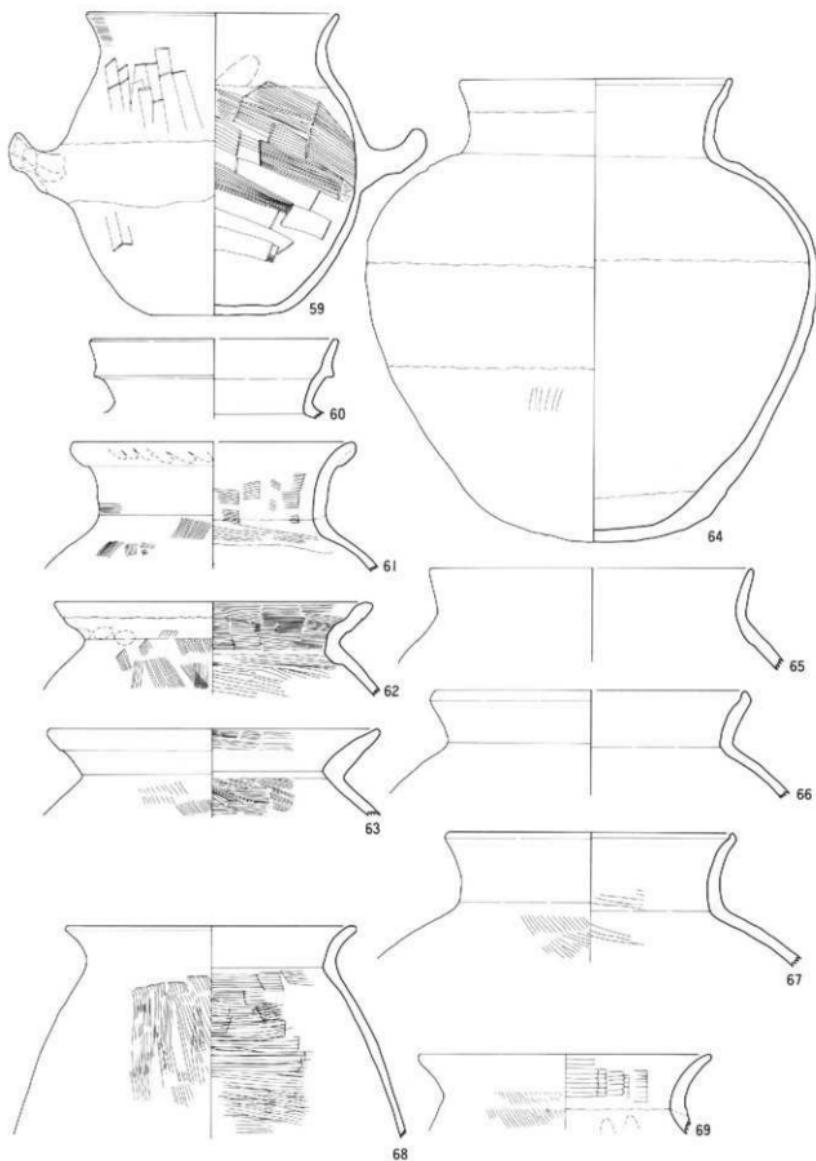
第38図 SD8 I 6出土遺物 その1



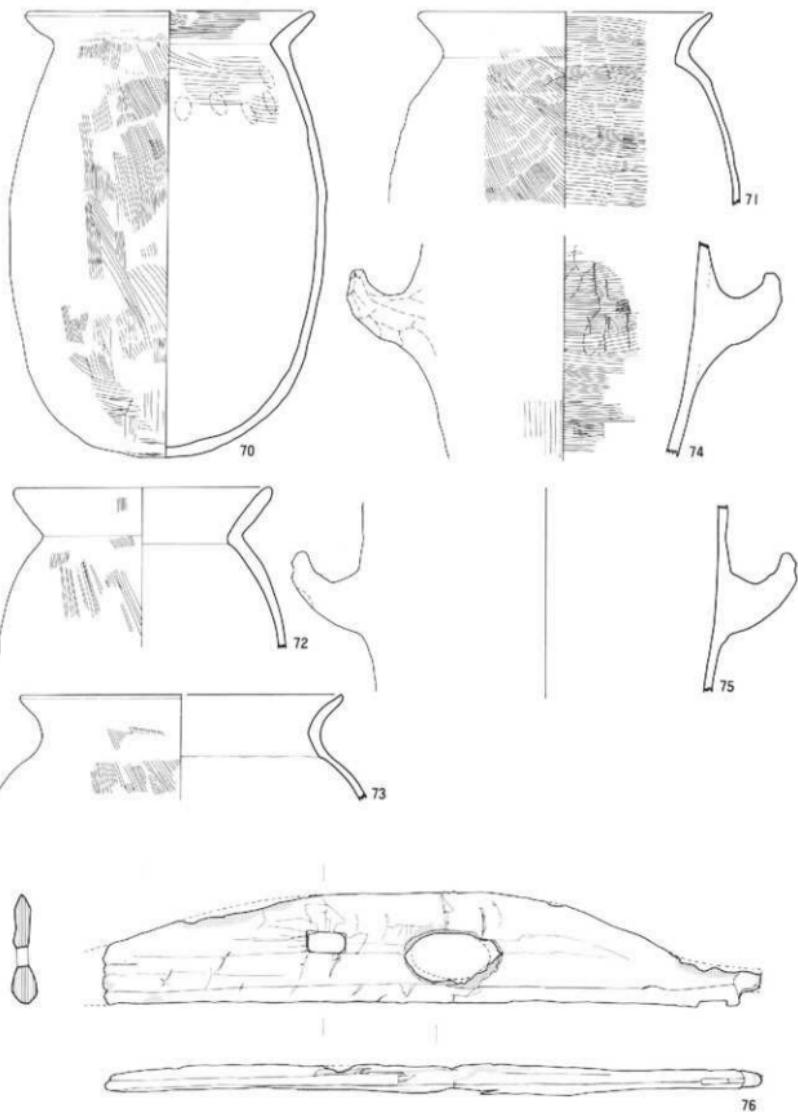
第39図 SD816出土遺物 その2



第40図 SD816出土遺物 その3



第41図 SD816出土遺物 その4



第42図 SD816出土遺物 その5

#### SD 10B14 (第43図 図版20)

**旧河道** 10区BのB～D - 17～18グリッドで検出された旧原野谷川の支流とみられる河道路である。横幅が狭い調査区のため検出した長さはわずか6.0mであるが川幅は10区Bの北側半分を占め、北端部分が左岸とすれば約18mにおよぶ幅広いものである。隣接の10区Cではこの溝の続きを検出中に法面が崩壊したため急ぎ安全のため埋め戻しを行った。このため10区C部分は推定で全体図には示していない。

#### 上層の流路

右岸側の遺物はないが左岸側はなだらかな傾斜に沿って土師器片が多数散らばっていた。また溝内は第43図の土層断面図からも明らかのように、粘土・シルト・砂層が互層をなし、その中には有機物を多く含む部分もみられた。検出した溝は深いところでは0.8m以上、浅い所では0.2m程度と起伏に富んでいた。所々に深いたまりのような陥みがみられ、その付近には藤や土師器片に混じって流木の破片も含まれていた。土器についてはいずれも小破片で確認しており、その中で実測できたものは極くわずかである。

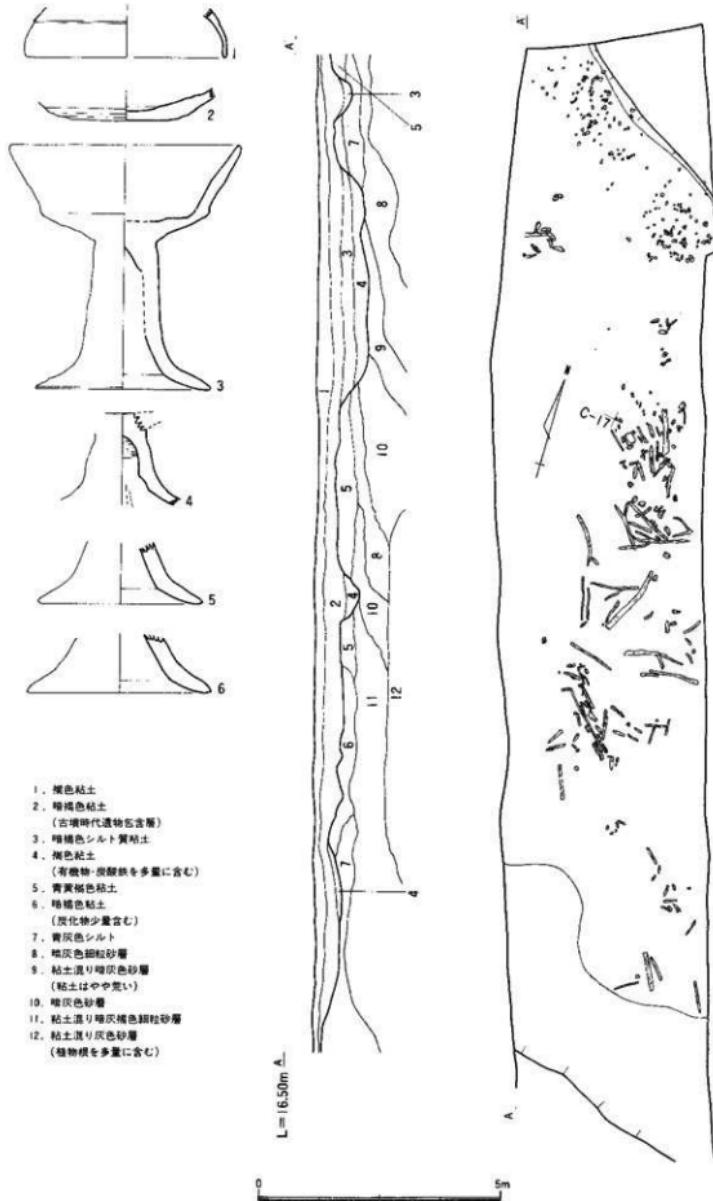
第43図1・2は須恵器である。1は環蓋の口縁部小破片である。口径は12.2cmと推定される。稜線は沈線化している。中村編年第Ⅱ型式5段階とみられる。2は環身の底部破片であるとみられる。3～6は土師器の高环である。3はほぼ1/2が残存している(高环c2)。口径14.0cm、器高15.0cm、底径10.7cmである。环部は稜線が明瞭で狭く開いた口縁部を持つ(B類)。脚部は長脚で据部が大きく「ハ」の字型に開く。脚部の空洞部は高く、中頸まで丁寧にナデている。4～6はいずれも脚部の破片である。土師器にはその他実測できなかったが环・高环・壺・壺・長胴型の壺の底部・环の把手等が含まれている。この様に遺物からみてこの溝は古墳時代後期の河道とみられ、奈良・平安時代の遺物は含まれないためこの時期までには埋没したものと見られる。

また溝SD 10 B 14の下部に当たる基盤礫層の頂部にも溝状地形が検出されている。加藤芳朗氏が指摘されているように(『原川遺跡』第7章を参照)、この溝状地形を覆って北から南側に傾いた砂層が重なる単斜構造がみられる。加藤氏はこれを「幅広い溝の曲流部内側の堆積物」と述べておられる。調査区の狭さと民家に近接する事からSD 10 B 14の下層の調査はできなかったが、東側に隣接する10区CでSD 10 B 14より下層に弥生後期の土師器片が混じり、また10区Bでも弥生中期の包合層の下にも単斜構造は続いている。この事はSD 10 B 14の下にさらに幅の広い下層の流路跡が含まれ、この流路は弥生中期以前に遡るものである事を示している。先に述べたSD 816の新しい流路はその最下層で砂礫層の直上に5世紀後半の須恵器(第38図15)を含む事からSD 10 B 14の下層流路と年代差はあるが、無遺物のSD 816の古い流路とSD 10 B 14の下層流路とは同じである可能性をもつ。

#### 下層の流路

**原野谷川** 以上のようにSD 10 B 14と南東の下流方向で検出されたSD 816の新しい溝は、若干の年代差はあるがほぼ古墳後期の遺物を中心とする事から、流れの中心の変化はあるにせよほぼ同一流路とみなされる。またSD 10 B 14の調査からは弥生中期より以前にこの付近に幅の広い流路跡が存在したことを見出している。現在までのところ原野谷川の本流が古墳時代にどこを流れているかについては確証がないが、現流路よりも東を蛇行していたことは等高線の張り出しつらからも推定される。この意味においては今回調査したSD 816やSD 10 B 14はかっては本流であった可能性を持つ原野谷川の支流というべきである。

#### 本流の可能性



第43図 旧流路 SD1OB14 造構平面図 (1 : 100) 出土遺物

## 第9節 古墳とその周溝

### SD 812 (第44図 図版44・34~38)

SD 812 は J - 22 ~ 24 グリッドに位置する。第44図はその平面図である。8区Aの調査を進める中で東端に幅1.8~2.2 m、深さ0.15 m 前後の浅い窪みが検出され、その底部に黄褐色をした厚手の埴輪片がみられた。この窪みは溝か土坑の一部と考えられたが、他の土坑や平安時代の溝 SD 813 と重なって同一面で検出されているので、その性格は不明であった。しかし東側に隣接する8区Bの調査の中で、この窪みが半円形のカーブを描きながら調査区の南側にぬける事や、その底部に埴輪片が散在している事が確認された。さらに8区A側で当初浅い土坑の一部と考えられていた窪みが、この半円形の溝の続きを当たる事が解った。これらの点からこの溝 SD 812 は南側半分は調査区外であるがほぼ円形の小型古墳の北側半分の周溝であると判断した。墳丘の盛土部分については8区A側では確認できず、また8区B側でも竪穴住居跡 SB 803 が同一調査面で重なりながら検出しているため、土層からは確認できなかった。また少量ではあるが埴輪の破片が SD 803 の覆土層の直上付近からも検出されていた。このため墳丘部分は早くから削平されており、周溝の底部分のみが浅く残っているものと判断した。従って主体部も不明である。

#### 周溝を確認

#### 小型古墳

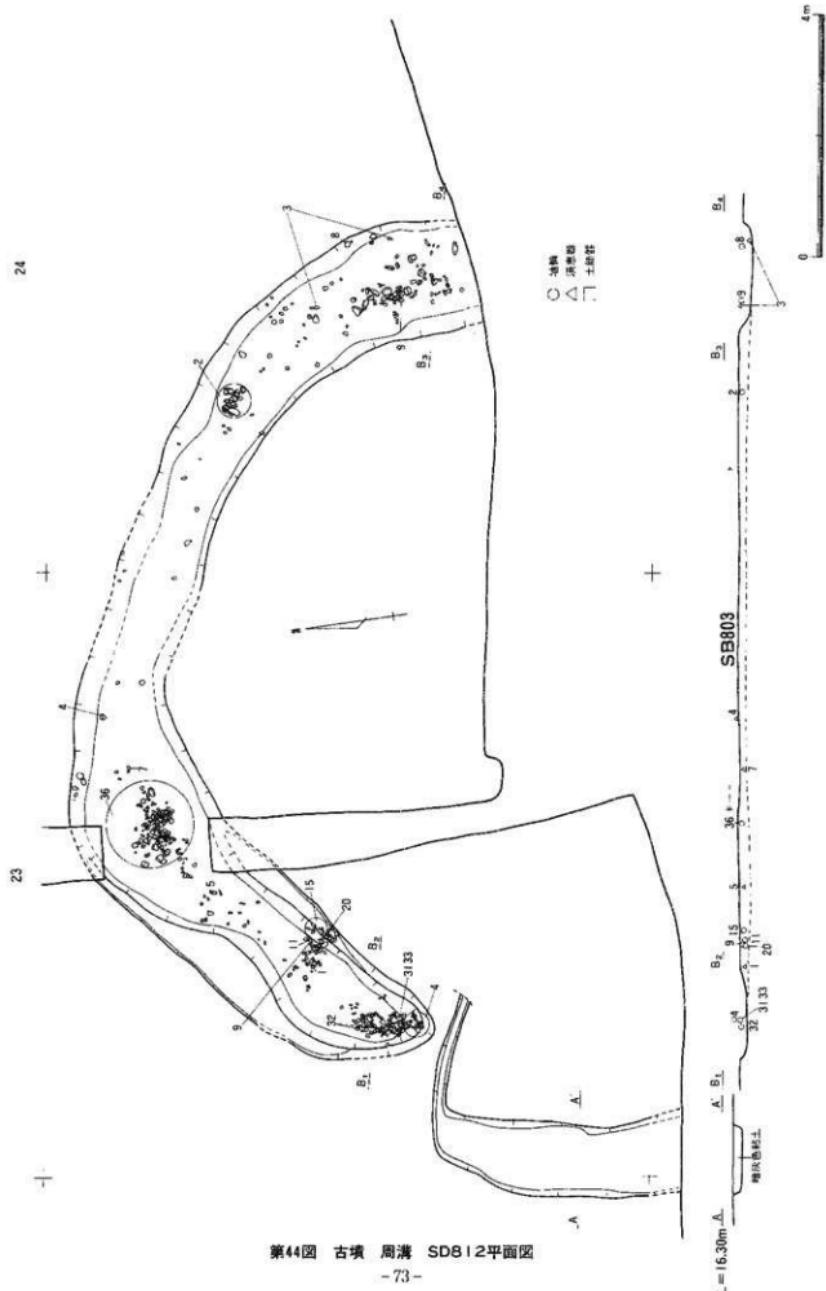
#### 出土状況

#### 須恵器

#### 須恵器からの年代観

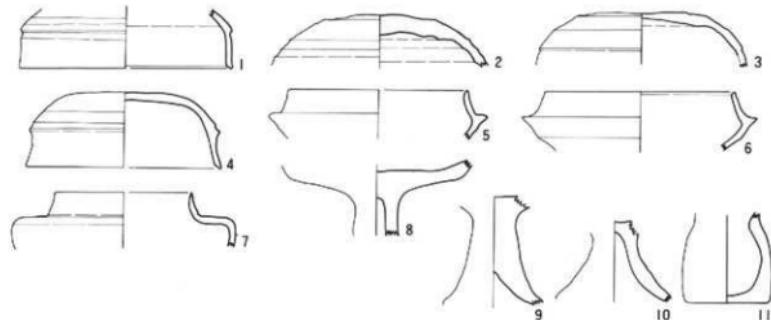
検出された周溝は幅2.22 m ~ 2.32 m、深さは0.25 mと浅く断面は半月形である。8区B東部分の周溝は他の遺構と重ならず比較的良く周溝の内外の立ち上がり部分を残していた。周溝より出土した遺物は埴輪片・須恵器・土師器・小碟である。埴輪片は円筒埴輪と形象埴輪に分かれるが特に陸橋付近から北側にかけては形象埴輪の集中部分がみられた。また東側部分には円筒埴輪片や拳大の碟の多い部分がみられた。埴輪の分布については第55図に示してあるが後述する。

第45図1 ~ 7は須恵器である。1 ~ 4は环蓋である。1は口縁部の小破片で口径13.1cmである。天井部は欠損しているが回転ヘラ削りの範囲は広い。口縁部は明瞭な稜をもつが摩滅のためやや鈍くなる。稜直下には沈線がめぐり、垂直に口縁部の端部には段を持つ。中村編年第一型式3 ~ 4段階に相当する(須/环蓋a)。2・3はいずれも天井部の破片である。いずれもヘラ削りの範囲は広く3は棱も明瞭である。4は1/3残存しており口径13.4cm、器高4.7cmである。天井部は平坦でヘラ削りは天井部外面の2/3以上に施されている。稜は明瞭であったとみられるが摩滅のため丸みをおびている。口縁部は高く少し外反し端部の段は不明瞭であったとみられる。2 ~ 4は中村編年第一型式5段階に位置している(須/环蓋b1)。5・6は环身口縁部破片であり、いずれも底部を欠損している。5は小破片であるが口径10.9cmで受部は丸みを持ち、口縁部はやや内傾する。6は口径11.8cm、最大径14.6cmである。受部は鋭く、端部はやや内傾する。5は中村編年第二型式3段階に、6はやや大型化する事から第二型式4段階に位置づけている。須恵器の环身、环蓋から見る限り1 ~ 4と5・6には年代差があるが、5は平安時代の溝 SD 813 と重なる部分に、また6はその部分の一括遺物に含まれている事から、5・6は墳丘が削平された時点またはそれ以降の混じり込みと判断した。従って周溝の年代は1 ~ 4の环蓋の段階(5世紀後半~末)とみられる。7は有蓋の短頸壺の口縁部破片である。口径8.5cmで最大径13.9cmは頸部直下に位置する。また焼成の段階で蓋をつけて焼いたものらしく頸部に重ね焼きの痕が残る。

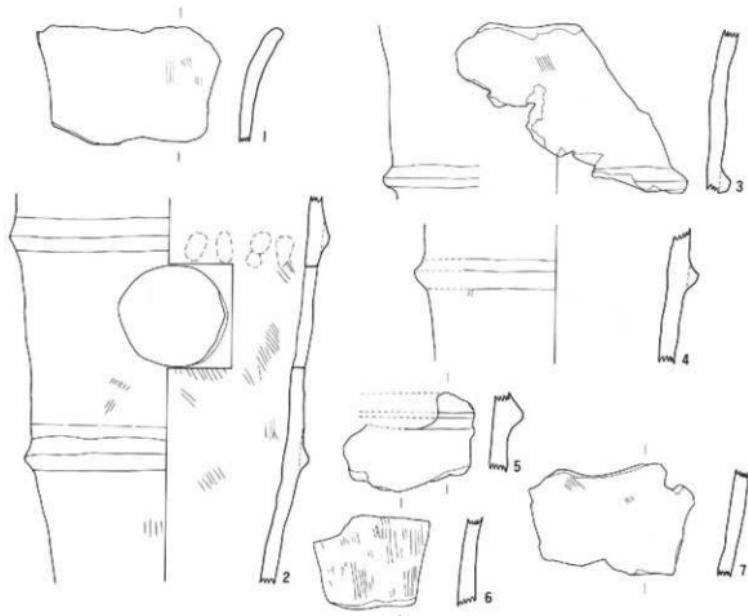


第44図 古墳 周溝 SD812平面図

8～11は土師器である。8～10は高坏である。11は小型壺である。いずれも剥離が大きく小破片で調整は不明である。土師器はこの他に図示できなかったが环・模倣坏・壺の口縁部・把手等の小破片が少量含まれていた。



第45図 周溝 SD812出土の土器



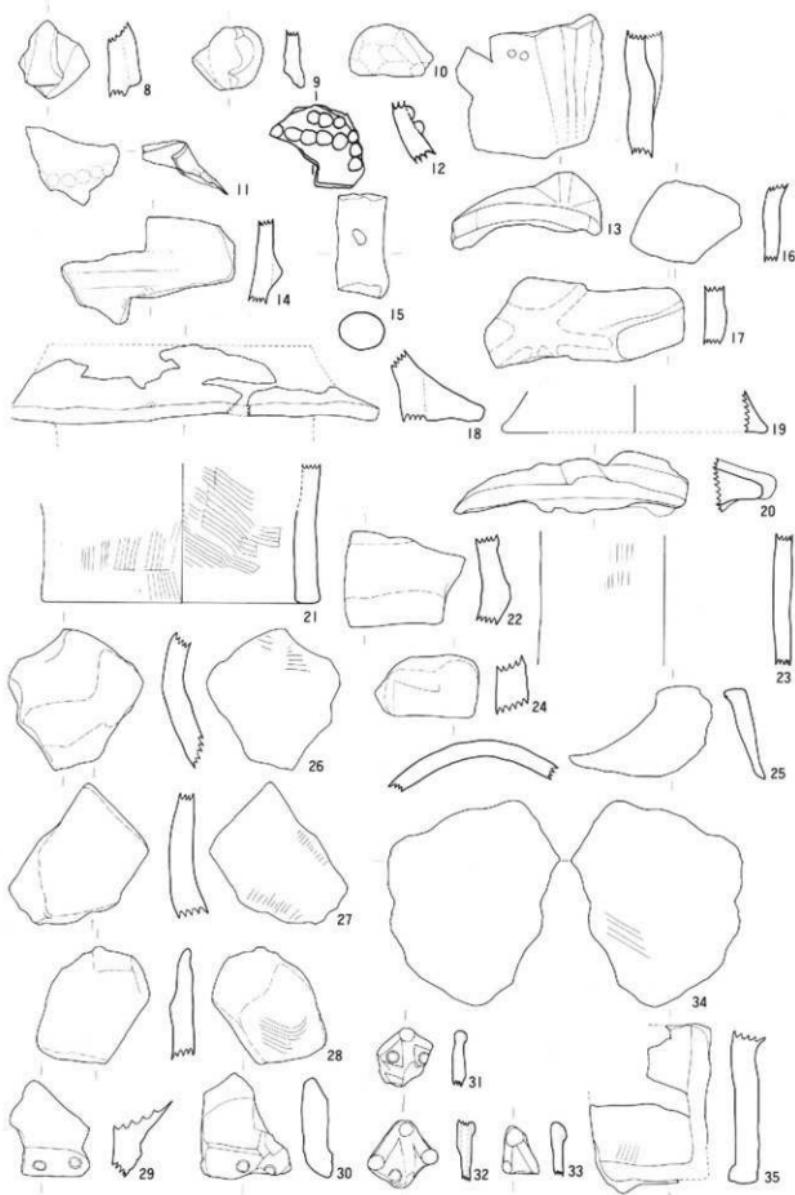
第46図 壇輪 その1 円筒埴輪

円筒埴輪 (第46図)

円筒埴輪

第46図 1～7は円筒埴輪の破片である。1は口縁部で外面にわずかに縦方向のハケ目が残る。2は最も残存がよいもので胴部である。残存部分の器高は25cmでタガは2段残る。

タ ガ



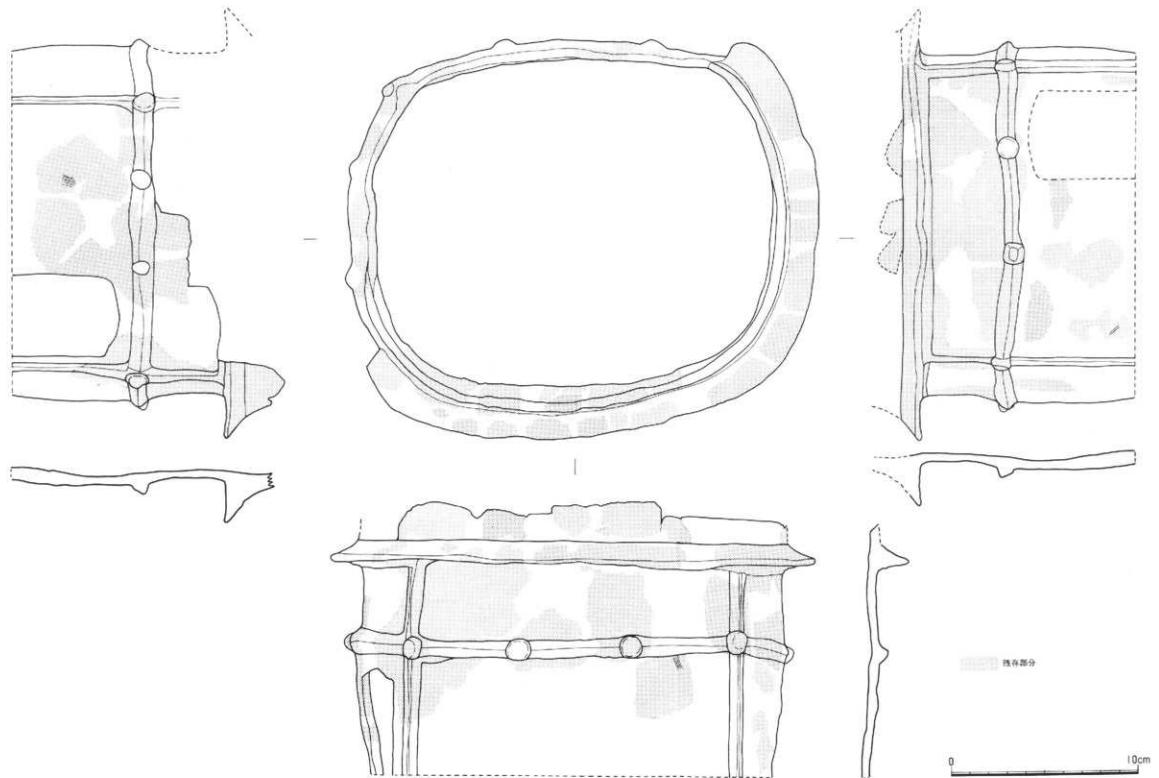
第47図 墳輪 その2 形象埴輪

**透し孔** タガとタガの間は13.2cmで直径6.5cm前後の円形の透し孔が相対する位置に2孔あいている事から中段であるとみなした。上のタガの直徑が19.8cmであるのに対し、下のタガの直徑が17.5cmと狭くなることから、下部はせいぜい中段の高さ程度で、さらに段を持って下に伸びるとは考えられない。口縁部の高さを1を参考にすれば、この円筒埴輪は約40cm程の器高であったと想定できる。器面は細かく割れ、剥離も進んでいるが、外面には縦ハケとナデの痕がみられ、また内面にもハケまたはナデの痕がみられる。タガの断面は突出度の弱い三角形で焼成時の黒斑はない。3は口縁部または中段である。タガの部分の直徑を想定すると径21.5cm程で、タガの断面も台形に近く器壁も厚手である事から、2とは別個体であると見られる。4は中段部分で、タガの断面は三角形に近い。内外面に黒斑が見られる。5は胴部の破片であるが縦ハケが残る。6のタガは台形に近い。7は中段の一部である。円筒埴輪の破片はこの他200点以上におよんだがいずれも小さく割れ、摩滅も大きいため図示できるものは少なかった。しかし図示した2～4は、いずれも川西宏幸氏の円筒埴輪の編年で示されたV期の特徴を備えている。

**人物埴輪** 形象埴輪（第47図 図版36～37）  
第47図8～35は形象埴輪である。破片数は100点以上であるが接合は困難であったため、実測可能なものを中心に取り上げた。8～28は人物埴輪の可能性が強い。8は鼻、9は耳、11～13は首または頸部、15は手の一部の可能性を持つ。11は剥離しているが直径9mm程の玉飾りの跡が6個残り、12は10mm程の玉飾りの跡が上下4個づつ2段に残っている。13は2個の玉飾りの跡がある。14は幅2.5cmほどの断面三角形の突帯がみられ、胸の帶に当たる部分である。17はヒトヅ型に何かが剥離した跡がみられ、やはり胸の一部である。18は最大径24cmほどある。人物埴輪の袋腰の部分であり、17と胎土もよく似ている。19～20も袋階の一部である。21は人物埴輪の底部と見られる。22・26・27・28は非常に厚手であり、馬具 別個体の一部とみられる。29～33は馬具の飾りの一郎とも見られ、特に31～33は杏葉ではないかと考えている。34は厚手であり円筒埴輪ではないが用途不明である。35はL字型の区画がみられ何かに接合していたものである。

**家形埴輪** 家形埴輪（第47図 図版37～38）  
出土状態 第47図は形象埴輪の中で家形埴輪を復元したものである。古墳の周溝SD812の造り出し部分より（第55図参照）に図版35のように密集して潰れた状態で検出されたため、取り上げる時点ではその形態は不明であった。遺物整理の過程でいくつかの部分に接合出来たが、器壁が厚く丸味を持たない事から円筒埴輪ではないことは明かであった。破片の中には十文字に突帯が交差しながらL字状に屈曲するものが數片あり、それを四隅に立てるとほぼ30～35cm四方の方形状のものになる事、また別に断面が三角形状で一片に剥離した跡のある庇状の破片も多く含まれている事が解った。はじめは石膏を入れずこの状態で過去にこのような突帯等の特徴をもつ埴輪の出土例を求めたところ埴輪円筒棺、陶棺または形象埴輪の中では合蓋、土器の器台、家形埴輪等の可能性が考えられたため、順次比較検討していった。

**可能性を検討** 墓輪円筒棺 表面には多くの突帯がめぐっており県内では堂山古墳や京見塚古墳で出土している。しかし堂山古墳のものは平行又はらせん状の粘土帯、または斜行又は放射状の突帯である事、円筒棺は大型で円筒状を呈する事、年代的にも川西編年のIV期に伴う事等を



第48図 塗輪 その3 家形塗輪

検討してこの可能性はないと判断した。また陶棺としては龟甲形陶棺や寄棟式陶棺が長方形型のものとして知られ、中でも奈良市歌姫古墳のものは縦横に突帯をはりつけている点には類似性もある。しかし陶棺の場合は横幅も2m以上あり、また底状の部分を持たず、底部や円筒形の足を持つのに対して、原川遺跡出土のものにはこうした底部や足はみつからない。しかも陶棺は年代的にも7世紀代で、地域的にも近畿または瀬戸内方面に中心がおかれていた事からこの可能性もないと判断した。

次に形象埴輪の中では裾や縁近くに突帯をめぐらした合子の可能性を検討した。岡山県岡山市沢田金蔵山古墳出土のものは5世紀代で長径39.3cm、器高23.8cmと大きさ的には類似性を持つが四方に縦横方向の突帯を持たず、平面的にも小判型であり、断面三角形の突帯は持たない事から、この可能性もないものと判断した。次に丸味を持つ方形の器台として群馬県高崎市綿貫町の観音山古墳出土の『両手に弦をかけ坐る三人童女』の台座を検討した。これは四隅に突帯が交差し、大きさにも類似性があるためその可能性が強いと考えた。しかし台座は上面を平坦に揃えるため上端部は一定の高さで平になるのが自然であるが、原川遺跡出土のものは上端部が一定に揃わざなむ内溝気味に上部に伸びる事から、基本的な形態は良く類似しているが、埴輪の種類としては異なる目的で制作されたものと判断した。以上のような検討の結果から判断して、形態的には観音山古墳出土の台座的な形を想定しながらも、さらに上部構造が想定できるものとして家形埴輪の可能性を考えるに至った。

推定復元は四隅の支柱の中で最も残存の良い部分に倣う形で石膏を入れた。底部分も壁の部分も4面の内の片側2面の残存が良かった。これは完形品のままで調査地点に置かれていたものが潰れた訳ではなく、築造当時の位置からは割れて落ちた状態で周溝の中より検出されているためと見られる。他の家形埴輪にみられる四角や円形の透し窓になるような部分は、残存部分が少ないので割れ口からは判断できなかった。しかし短い面の中段の横に伸びる突帯部の下に逆U字型のカーブの一部がみられたために、これを入口と考えた。中段に横に伸びる突帯部の下側の高さは底から中央突帯部の高さを参考にした。入口は2ヶ所を復元しているがこれは1ヶ所であった可能性もある。

推定復元した壁面の内、入口のない幅の長い面を桁行、入口がある幅の短い面を梁行とすれば、桁行35cm、梁行32cmである。最も残りのよい部分から想定すると底の先端までの器高は約23cm前後になる。底はほぼ外周の1/2残っており、厚さ約3cm、幅約3cmで断面は直角三角形に近い。四隅の縦の突帯は幅約2cmで断面は丸味を持った三角形であり、強くナデている点は円筒埴輪のタガの造りと類似するものである。また中段で横に一周する突帯も幅1.5~2.1cm程度で縦のものとほぼ同様の造りである。横に一周する突帯にはほぼ等間隔に幅2~2.5cm程度の丸いコブ状の突帯がつけられており、四隅を起点とすると、桁行では約9.5cm間隔に4つ、また梁行では7~10cm間隔で4つという数えかたができる。壁面は桁行に比べて梁行の面が丸味を持っている。

伴出した須恵器や円筒埴輪の年代からすれば、川西編年第V期にあたるこの時期は家形埴輪などが写実性を失いつつある時である。しかしあえて形態を考えるならば、梁行の入口の位置が正しくまたこのコブ状の突帯が支柱を反映するとすれば、この家形埴輪は3間×3間で2階立ての高さを持つ建物となり、その場合には純柱的な建物が想定される。

陶 棺

合 子

器 台

家形埴輪

入口の検討

規 模

方形の建物

3間×3間

第3表 墓輪觀察表

図面No	器種	残存	胎土	焼成	色調	内外面の手法	備考	図版
1	円筒	口縁部 小破片	不均一	普通	乳橙色	外面…わずかに斜め 方向の縦ハケ (6本/1.3cm)	2と同一個体とみられるが接 点はない。	34-3
2	円筒	中央部	不均一	普通	乳橙色 赤褐色	外面…わずかに斜め 方向の縦ハケ (6本/1.1cm) 内面…わずかに斜め 方向の縦ハケ (5本/1.5cm)	最も残存が良い。口縁部は欠 損しているが1と同一個体と みられる。2つの突帯の断面 は三角形である。残存長25cm、 器壁0.9cm。	34-5
3	円筒	口縁部又 は中央部 の小破片	均一	良好	赤褐色	外面…わずかに斜め 方向の縦ハケ (4本/0.7cm)	突帯の断面は三角形に近い台 形。	34-6
4	円筒	中央部	不均一	良好	赤褐色	外面・内面共摩滅	突帯の断面は三角形。	
5	円筒	全体小破片	不均一	良好	赤褐色	外面…横に浅いハケ (4本/1cm) 内面…ナデ	外面のハケ目がよく残る。	34-7
6	円筒	中央部 小破片	均一	普通	乳橙色	外面・内面共摩滅	突帯は摩滅のため丸味をもつ。 突帯部分の残りと剝離した影	34-8
7	円筒	中央部 小破片	不均一	普通	赤褐色	外面・内面共摩滅	丸窓の一部が残る。	34-9
8	人物	小破片	不均一	普通	乳橙色	外面…ナデ 内面…ハケか	人物の鼻か。	36-1
9	人物	小破片	不均一	普通	乳橙色	外面…ナデ 内面…摩滅	人物の耳か。	36-2
10	形象	小破片	不均一	普通	乳橙色	外面…指頭圧痕と ナデ	人物の身体の一部か。	36-3
11	人物	肩部分の 小破片	不均一	普通	乳橙色	外面…ナデ 内面…荒いナデ	人物の肩の部分で丸玉を連ね た飾りの跡あり。	
12	人物	肩部分の 小破片	不均一	普通	乳橙色	外面…ナデ 内面…荒いナデ	人物の肩の部分で丸玉を連ね て首飾りとしている。丸玉の 径は0.8-1.0cmである。	36-4
13	不明	破片	不均一	普通	赤褐色	外面…ナデ 内面…荒いナデ	突帯のような盛り上がりの部 分がある。丸玉のかすかな跡 があるため人物の一部の可 能性もある。	36-6
14	人物か	破片	不均一	普通	乳橙色	外面…ナデ 内面…ナデ	人物の胸の脇の部分の可能 性がある。	
15	人物	小破片	不均一	普通	乳橙色	外面…ナデ	人物の手の一部か。	36-5
16	形象	小破片	均一	普通	乳橙色	外面…ナデ 内面…荒いナデ	人物の肩の一部か。	
17	人物か	破片	均一	普通	乳橙色	外面…ナデ 内面…ナデ	突帯部分の残りと剝離した影 の部分がある。人物の胸の脇 の結び目部分か。	36-8

図面No	器種	残存	胎土	焼成	色調	外面の手法	備考	図版
18	人物	破片	不均一	普通	乳橙色	外面…ナデ 内面…ナデ	最大径24cm程、人物の裳腰部分。片側は切れるので一回まわるものではない。	36-9
19	人物か	小破片	不均一	普通	乳橙色	外面…ナデ	小さな破片であるが人物の裳腰の部分ではないか。	—
20	人物	破片	不均一	普通	乳橙色	外面…ナデ	人物の裳腰の部分で最大径22.4cm程である。縦に突帯がつく。	36-10
21	人物	破片	不均一	普通	乳橙色	外面…わずかに縱方向のハケ目 (4本/1.2cm) 内面…斜め方向の横ハケ (4本/1.2cm)	径17.2cm、器壁1.5cmの円筒形をした底部分であるが、高さ7cm前後に接合痕が残る。左右対称の位置にも接合痕が残る事から人物の底部と考えた。	36-11
22	形象	小破片	不均一	普通	乳橙色	外面…ナデ 内面…荒いナデ	人物の裳腰との接合部の可能性がある。	37-1
23	形象	小破片	不均一	普通	乳橙色	外面…わずかに縱方向のハケ目 内面…荒いナデ	人物の胴部の一部である可能性がある。	—
24	形象	小破片	不均一	普通	乳橙色	外面…ナデ 内面…剥離	L字型の凹凸がすかに残る。	37-2
25	形象	小破片	均一	普通	乳橙色	外面…ナデ	人物の一部か。	37-3
26	形象	破片	不均一	普通	乳褐色	外面…ナデ 内面…わずかに横方向のハケ目 (3本/0.9cm)	人物の一部か。器壁は厚手。	—
27	形象	破片	不均一	普通	乳褐色	外面…ナデ 内面…ハケ目(3本/1cm)	人物の一部か。No26と同様厚手である。	—
28	形象	小破片	不均一	普通	乳褐色	外面…ナデ 内面…ハケ目(4本/1cm)	内面のハケ目ははっきり残る。	—
29	形象	小破片	不均一	普通	乳褐色	外面…ナデ 内面…荒いナデ	馬具の飾りの一部か。	37-4
30	形象	小破片	不均一	普通	乳褐色	外面…ナデ 内面…荒いナデ	馬具の飾りの一部か。	37-5
31	形象	小破片	均一	普通	乳橙色	外面…ナデ	菱形をしており、馬具の杏葉の一部か。No32と同種。	37-6
32	形象	小破片	均一	普通	乳橙色	外面…ナデ	菱形をしており、馬具の杏葉の一部か。	37-7
33	形象	小破片	均一	普通	乳橙色	外面…ナデ	No31～32と関連する一部か。	37-8
34	形象	破片	荒い	やや軟	乳褐色	外面…剥離 内面…荒いナデ	厚手で外面はぼろぼろだが、円筒埴輪ではない。No36に関連するか。	—

図面No	器種	残存	胎土	焼成	色調	内外面の手法	備考	図版
35	形 象	破 片	不 均	普 通	乳 棕 色	外面…ナデ 裏面…ナデ	L字型の突帯が片面の端につく。何かに接合された部分である。	37-9
36	家	破片か ら復元 (屋根穴)	不 均	普 通	乳 棕 色	外面…剥離が大きい がナデ。 内面…剥離が大きい がナデでおり タテハケもか すかに見える。	桁行35cm、梁行32cmの方形の 家形埴輪で、屋根は欠損して いるが底部分までは残存して いる。四隅にタテ方向の突帯 が、また中央分部には横方向 の突帯が1周する。隅も含め て各面の横の突帯にはほぼ等 間隔に凹形の盛り上がりが見 られる。	37-10 38

## 第10節 その他の遺構

### SB 302 (第49図)

**堅穴住居の可能性** I - 9 グリッドに位置する。堅穴住居の可能性を持って検出したが北側部分は土坑 SX304 により擾乱されており、また南側中央部分も近世の土坑 SF310 により擾乱されている。掘り込みはほとんど残っていないため性格不明の遺構に分類したが幅0.2~0.25mの浅い側溝が「コ」の字型に検出されている。柱穴は柱痕を残しているものもある。掘り方が浅いため覆土中の遺物の限定はできない。柱穴より出土した遺物は主として土師器・須恵器の破片であるためここでは古墳時代の遺構の中に入れたが、灰陶陶器の小破片も含まれているため平安時代に下る可能性もある。

### SB 303 (第49図)

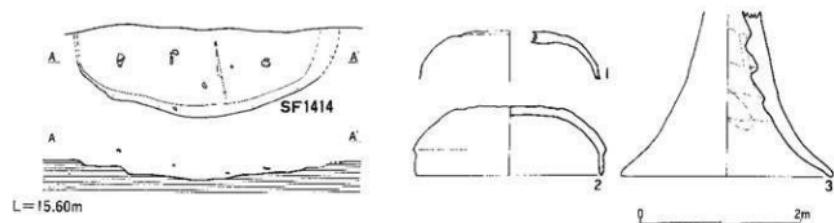
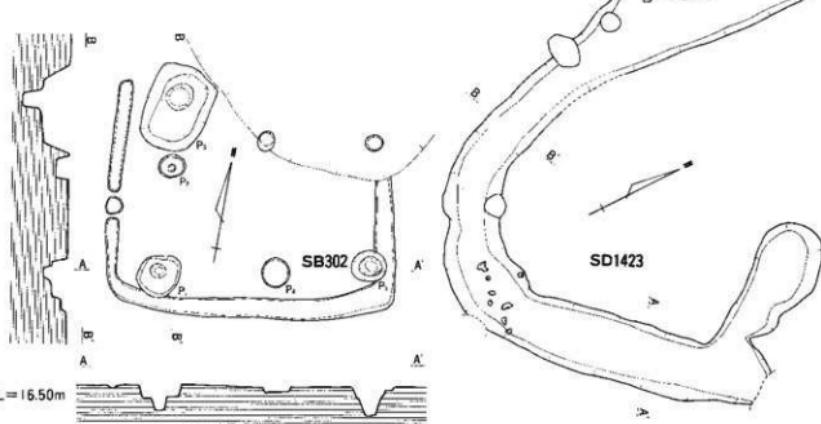
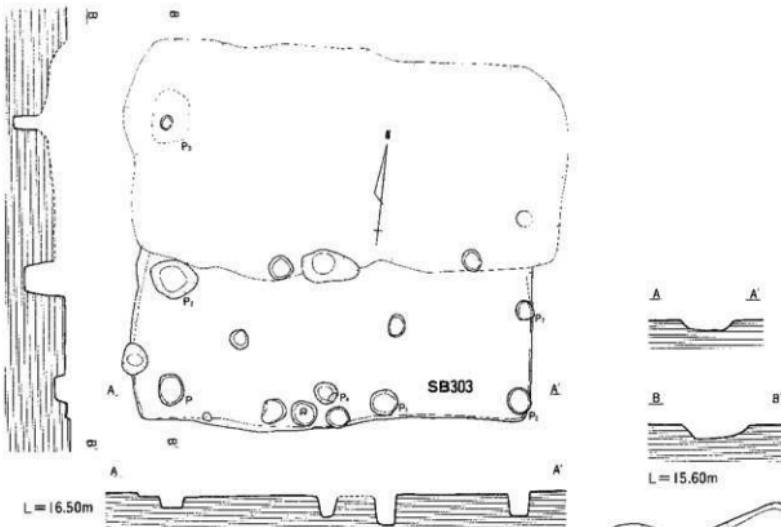
**堅穴住居の可能性** J ~ K - 9 ~ 10 グリッドに位置する。堅穴住居の可能性を持って検出したが北側の半分は中世の土坑 SX303 により擾乱されている。掘り込みがごく浅いため性格不明の遺構に分類したが、堅穴住居であるならばその掘り込みの範囲は東西5.0m、南北4.0m以上である。柱穴からの遺物は土師器・須恵器片であるため古墳時代の遺構の中に含めた。すぐ東側を SD308 が流れ、土師器が大量に出土しているが直接的な関連は出土遺物が少なすぎて不明である。

### SF 1414 (第49図)

14区 II - 33 グリッドに位置する。炭化物の強い部分を掘り下げたところ東西3.0m、南北0.7m程の半円形の窪みの中に須恵器や土師器の破片がみられた。堅穴住居の一部か浅い溝の一部の可能性がある。第50図1は須恵器の環蓋である。約1/3残存している。天井部はヘラ切り未調整で口径も11.0cm程である。2・3は土師器である。2は約1/3残存している。模倣环の环蓋である。口径11.5cm、器高9.3cmである。3は長脚の高环の脚部である。底径は13.0cmである。外側は丁寧にナデている。脚部内面の空洞部は高く巻き上げ痕が明瞭である。

### SD 1423 (第49図)

I - 31 ~ 32 グリッドに位置する。幅0.85m、深さ0.15m程の浅い半円状の溝である。奈良・平安時代からの柱穴により擾乱を受けている部分が多く性格は不明である。遺物は須恵器の小破片と土師器である。土師器には模倣环・环・長脚の高环脚部・环の把手などが含まれていた。



0 2m

第49図 その他の造構平面図 出土遺物 SD302 SB303 SF1414 SD1423

## 第11節 その他の遺物

### 1. 土 器

3 地 区 に 分 区 くから古墳時代の遺物は、原川遺跡の全調査区で出土しているので、このうち実測可能な遺物を紹介する。東西に細長い調査区なので、古墳時代の遺構の出方からいくつのかの区をまとめて、大きく西側・中央・東側の3つに分けて紹介する。

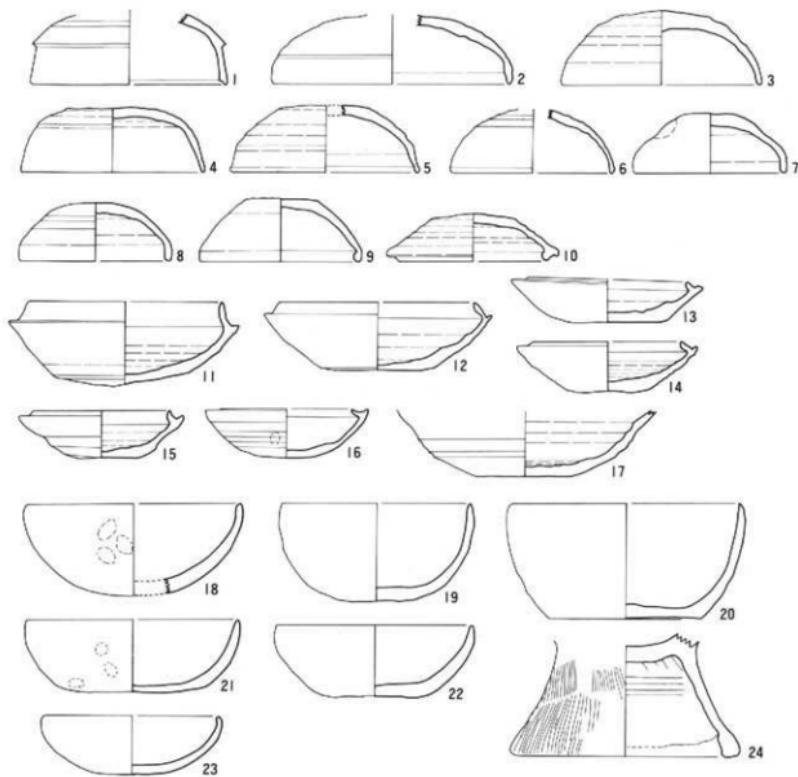
#### A. 西側部分 (第50図)

調査区内1区・3区・5区・6区・9区・12区・13区といった西側部分である。国道の北側部分の9区・12区は位置的には高く古墳時代の集落が広がっていた可能性が強いが、中・近世の遺構によって古墳時代の遺構面が全く削り取られており、古墳時代の遺物の混じり込みも少なかった。国道南側の部分の1区・3区・4区・6区は古墳時代から奈良・平安時代、中・近世に至る遺構が重複して、古墳時代の遺物の混じり込みも多かった。3区 SD 308 からは多くの先形品を含む溝が検出しているため住居跡等は不明確であるが集落の広がりが考えられる部分である。

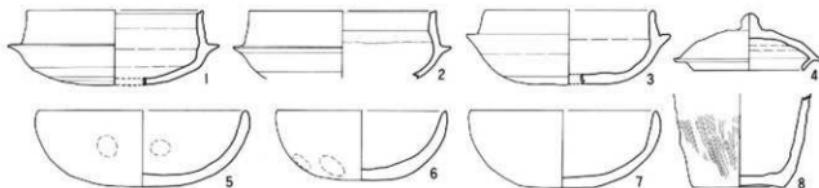
**須 惠 器** 第50図1～17は須恵器である。1～10は壺蓋である。1は3区 SX 301 に混入していた1/8程の口縁部破片である。口径12.0cmでヘラ削りは天井部外向の約1/2程とみられる。稜は明瞭で鋭く、口縁部は直下に下がり、端部には明瞭な段を持つ。II縁部や内面は丁寧にナデされており、胎土も密である。中村編年の第I型式2～4段階に属し、原川遺跡で出土した須恵器の中でも最も古手のものである(須／壺蓋 a)。2は1/5程残存している。口径14.2cmでヘラ削りは天井部の2/3程であるがII縁部は沈線化しており中村編年の第II型式4段階とみられる(須／壺蓋 e)。3は口径12.2cm、器高4.6cmで稜は消滅している。4は口径11.2cm、器高4.0cmである。稜は沈線化し、天井部近くに位置する。3～4とも天井部がヘラ切り未調整である。中村編年第二型式5段階とみられる。5は1/4が残存している。口径11.2cm、器高4.2cmである。6～9は口径が10cm未満の最も小型化する中村編年第二型式6段階のものである。口径は6・9は9.8cm、7・8は9.2cmである。7・8は天井部がヘラ切り未調整である(須／壺蓋 h 1)。9は天井部がヘラ切りで平坦になり、また口縁端部が内側に丸みをもつ(須／壺蓋 h 3)。10は口径9.1cm、器高3.0cmと偏平でつまみはないものの蓋にかえりがついた時期のものである(須／壺蓋 i)。この型式のものは原川遺跡での出土はごくまれである。

11～16は壺身である。11は約1/2残存している。口径12.0cm、最大径14.3cm、器高5.1cmである。底部は回転ヘラ切りは未調整である。立ち上がりは低く端部は丸くつくられている。2の壺蓋に伴うか、それより一段古い時期のものである。12は小破片である。13～16は口径が10cm未満のもので壺蓋6～9に伴う同時期のものである。それぞれの口径は13は9.9cm、14は9.2cm、15は8.5cm、16は8.1cmである。13・14・16は底部は回転ヘラ切り未調整である。

**土 器** 18～24までは土器である。18～22は壺である。18は口径13.2cm、器高5.7cmで丸底である。19は体部は丸みをもちながら器高が高く底部は平底気味となる。口径11.6cm、器高6.1cmである。20は底部をヘラで切り落とし平底にしている(壺 e)。体部の丸みはあまりない。口径14.1cm、器高7.1cmである。21～23は平底気味の壺である。24は台付き壺の脚部とみられ外側には6本／1cmのハケ目がみられる。



第50図 包含層出土遺物 その1 (西側部分 1区 3区 5区 12区 13区)



第51図 包含層出土遺物 その2 (中央部分 7区 8区)

### B. 中央部分（第51図）

7区・8区・10区・11区は古墳時代の遺構が面として検出されており、明確な居宅域がとらえられる部分である。包含層の遺物も古墳時代中期～後期前半の遺物が中心で、その後の時代の遺物の混じり込みは少ない。

- 須恵器** 第51図1～4は須恵器である。1～3は壺身である。1は1/6程の破片で壺穴住居SB 701よりさらに下層で検出された。口径10.8cm、最大径12.8cm、器高4.7cmである。底部は平坦につくられ、回転ヘラ削りは器高の1/3である。受け部は水平に鋭角に引き伸ばしている。立ち上がりは高く垂直で端部の段はやや沈線化している。2は1/6程の口縁部破片である。口径11.5cm、最大径13.5cmと1よりやや大きいが、受け部や端部の造りは1と同じである。1・2は中村編年第I型式4段階に属するものである（須／壺身a）。3は約1/5残存している。口径10.4cm、最大径12.6cm、器高4.7cmである。底部は平坦に造られ回転ヘラ削りは低い。受け部はやや丸味を帯び立ち上がりは高いがわずかに内傾する。中村編年第II型式2段階と見られる（須／壺身c）。1～3はいずれも7区から出土している。4は約1/2残存している。口径6.7cmと小型であることから乳頭状のつまみのついた長頸瓶の蓋ではないかとみられる。5～8は土師器である。5～7は壺で5・6は丸底気味、7は丸底である。8は小型壺の底部で、底には木栄痕がみられ、また側面には8本／1cmの細かい縱方向のハケ目が施されている。

### C. 東側部分（第52図）

14区・15区は古墳時代の遺構と奈良・平安時代の遺構がほとんど同一面で重なっている。古墳時代の包含層遺物は量が多いがいずれも小破片であった。

- 須恵器** 1～13は須恵器である。1～5は壺身である。1は1/8ほどの小破片である。口径13.1cm程度で天井部は平坦である。稜はやや観さを残す（須／壺蓋d 1）。2は小破片である。稜は丸みを帯びる。3は1/4程の破片である。口径11.9cm、器高4.5cmで天井部はやや丸みを帯びる。大井部の回転ヘラ削りはごくわずかであり、稜も沈線化している。中村編年第II型式3段階とみられる（須／壺蓋d 2）。4は小破片で、口径12.4cmである。5は2/3残存している。口径8.4cm、器高5.2cmである。天井部はヘラ切り未調整であり、稜は沈線化している。中村編年第II型式6段階にあたる（須／壺蓋h 2）。

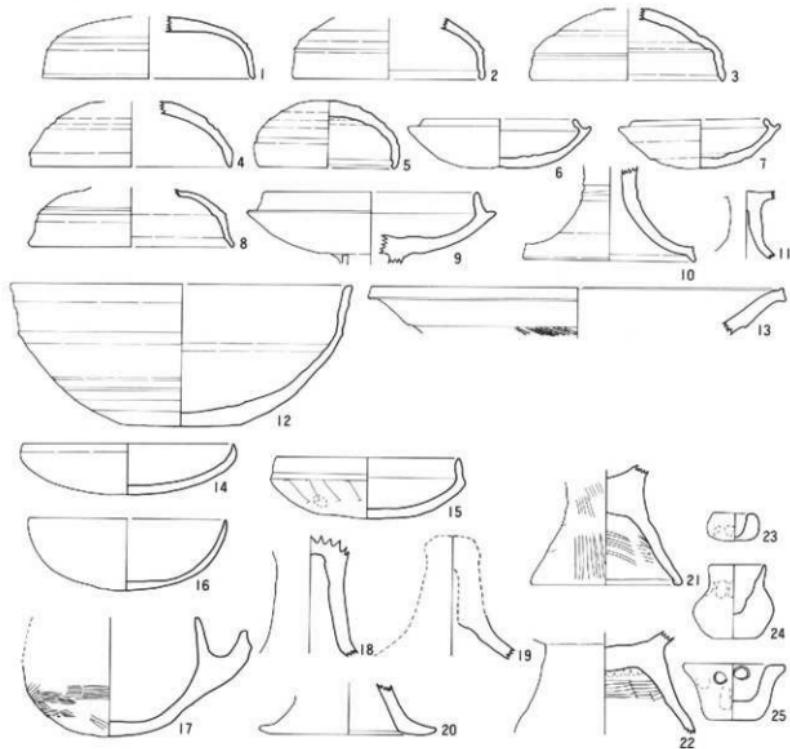
6・7は壺身である。6は小破片であるが口径は9.4cmである。7は1/2残存しており口径8.2cmである。いずれも壺蓋5と同じ時期である。8～10は高壺である。8は小破片であるが蒸とみられる。稜は沈線化している。9は壺部が1/3残存している。脚部は三方向のスカシ窓を有していた可能性がある。壺部は外表面ともいねいにナデられており、稜は水平に引き出している。立ち上がりは短くやや内傾する。10・11は、高壺の脚部である。12は須恵器の鉢である。器型は壺蓋を大きくしたような形である。約1/4残存しており口径21.3cm、器高8.95cmである。底部は平底でヘラ削りは器高の約1/5に施される。立ち上がりは緩やかであるが、器高の2/3程度に稜を持ち、口縁部は直立気味となり端部を丸めている。器壁は厚手で底部では1.0cm、口縁部でも0.5cmほどである。13は壺の口縁部で約1/7残存している。

- 土師器** 推定口径は25.8cmである。14～22は土師器である。14は口径13.2cm、器高3.2cmと底部が丸みをもつ皿の可能性がある（模倣壺身d）。15は模倣壺である。口径11.0cm、器高3.8cmでかえりを持つ。16は丸底の壺である。17は1/2残存している。口径10.2cm、器高7.4cmで、深い丸底であるが底はやや平底気味である。小型の把手を持つが左右についていた可能性もある。体部外表面には横方向のハケ目が残っている（壺f）。18～20は高壺の脚部である。

21・22は脚部である。土師器の台付き壺の脚部であろう特に21は外面に縦方向のハケ目がまた、内面にも横方向の4本／1cmのハケ目が残る。古式土師器の台付き壺の脚部であろう。

23～25は手捏土器でいずれも14区で出土している。23は口径2.5cm程で内側を指頭でへこませたものである。24は口径3.5cm、最大径5.0cm、器高4.6cmである。外面に口縁部を袋状にした指頭圧痕が残る。25は口径6.3cm、器高3.5cmである。断面は逆台形状で口縁部を外につまみ出している。一方向から径0.7cm程の棒状のものを差し込んで孔を開けているため、孔の反対側に切り取られた粘土が円形に張り付いて残っている。

### 手捏土器



第52図 包含層出土遺物 その3 (東側部分 14区 15区)

### 2. 石製品・土製品 (第53図)

原川遺跡から出土している石製品には紡錘車3点、管玉1点、勾玉1点があり、滑石製模造品として有孔円盤2点があげられる。なお管玉については竪穴住居跡SB1401より出土しているため第4節で述べている。また土製の紡錘車1点は石製紡錘車の後に含めた。

滑石製  
紡錘車

**紡錘車** 紡錘車 4点出土している。1～3は滑石製の紡錘車である。1・2はほぼ同形で、8区A古墳時代旧流路SD 816の基底部砂礫層中より検出されている。

1の色調は濃緑黒色で上面直径が2.8cm、下面が4.1cm、高さ1.4cmで、断面の形は台形に近い。表面はよく磨かれているが側面に縦方向の擦痕がみられる。孔は直径8mm程度で重さは29.6gである。

2の色調は濃緑黒色で上面直径が2.8cm、下面が4.2cm、高さ1.2cmで、断面の形は台形に近い。表面はよく磨かれているが側面には縦方向に丁寧な研磨の痕が残る。孔は9mmで重さは31.9gである。

3は1区J-6グリッドより出土している。色調は濃緑黒色で上面直径が1.9cm、下面が3.3cm、高さ1.2cmである。角の部分が欠けたり磨滅しているため形状は不明であるが断面は梢円形的な形となる。孔は6mm程度で重さは22.8gである。

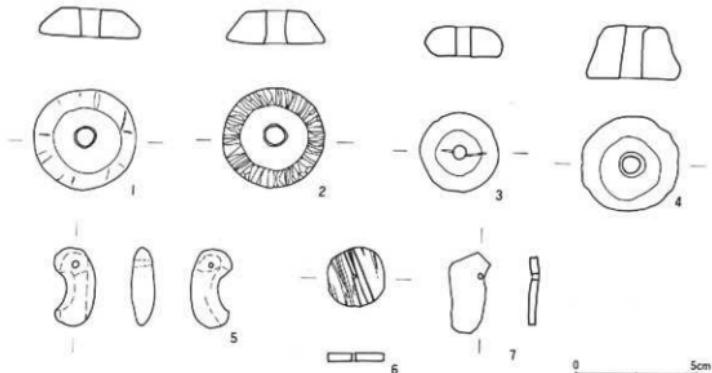
**土製紡錘車** 4は土製土師質の紡錘車である。8区Bの古墳時代包含層より検出された。色調は赤褐色で上面直径は2.5cm、下面が4.0cm、高さ2.2cmで断面の形は台形に近い。1・2とほぼ同じ上面・下面の径を持つが厚みがある。表面は磨滅していて調整は不明である。孔は22mmで重さは29.8gである。

**勾玉** 勾玉 1点出土している。5は瑪瑙製である。8区Aの古墳時代面南西隅より出土している。色調は黄褐色で長さ3.25cm、幅1.7cm、厚さ0.9cmである。孔は片側が3mmで反対側が15mmと単方向からあけられている。形状は「コ」の字状で重さは6.7gである。

**有孔円盤** 滑石製模造品 2点出土している。6は有孔円盤で8区古墳時代SD 806より出土している。色調は黄灰褐色で径約2.4cm、厚さ0.4cmである。一定方向に擦痕がみられる。孔は16mmで重さは4.4gである。

**剣型模造品** 7は8区Aで出土した破片の一部である。孔は22mmで剣型模造品の破片である可能性が強い。

以上のように石製品、並びに滑石製模造品については、14区SB 1401出土の管玉を除いてすべて8区I～J-22～27グリッドに集中している。SD 806や包含層の遺物(3・4・5・6・7)は古墳時代、5世紀後半～6世紀代にかけてこの時期の遺構と同時期の遺構の遺物と考えられる。その中で1・2の紡錘車は8区SD 816の基底部砂礫層から出土していることから、この中でも古い時期に伴うものとみられる。



第53図 石製品・土製品実測図 (1 : 2)

第4表 静岡県内捕鯨出土遺跡

<sup>7</sup>『静岡県文化財地名表I・II』静岡県教育委員会、1989より抽出し若干の補足を加えた。

## 第3章 まとめ

近年、袋井市教育委員会による坂尻遺跡の発掘<sup>①</sup>や、掛川市教育委員会(1984)や当研究所(1987)による梅橋北遺跡の調査により、原川遺跡周辺の古墳時代集落が広範囲に広がる事が明らかになりつつある。しかし現在当研究所においても坂尻遺跡で水田跡の調査が継続中であり、また近い将来原川遺跡に隣接する南側の地区で掛川市教育委員会による調査も予定されている。このためこの地域の古墳時代の全体像の検討は農耕との関係も含め後日なされるものとして、ここでは今回の調査で考えられる点に限定してまとめにしたい。

### 第1節 出土遺物について

原川遺跡の調査では弥生時代後期から古墳時代前期の出土遺物は1区の包含層と10区Cの旧流路跡に極く少量出土している。しかし坂尻遺跡(袋井市教委)の調査では4~5世紀代の遺物が発掘区東端と3E区を中心として出土している。また坂尻遺跡(研究所)の調査では古墳時代前期~弥生時代後期に至る水田が達江で初めて調査されつつある<sup>②</sup>。弥生時代後期から古墳時代前期の集落の在り方については今後の課題である。

坂尻遺跡

今回の調査で得られた遺物の大部分は古式土師器以後の土師器片であり、須恵器の量はあまり多いものではないが、これは消費地であるためである。須恵器からみれば、模式図壇蓋a~i、壇身a~hに示したように中村編年第一型式2~4段階に出現し、その後第二型式2段階が薄いもののそれ以後はほぼ各段階を追っている事が解る。しかし、坂尻遺跡(袋井市教委)と同様中村編年の第三型式、壇蓋にかえりの付く時期の須恵器はほとんどない。静岡県西部の土師器の研究はいまだ資料収集の段階であるが、坂尻遺跡(袋井市教委)の調査ではK S D25A・K S K21・K S I 6・K S D23・K S D25A・K S D25B・K S D 8 A・K S D 9・K S D 8 Bといった、一括性の強い溝状造構・窓穴状造構・土坑状造構が調査されており<sup>③</sup>、また坂尻遺跡(研究所)の調査でも堅穴住居からの一括資料が報告される予定である<sup>④</sup>。今回の原川遺跡の調査では溝S D308、土坑S F1416の遺物が一括遺物として注目される。S D308からは多少の混入品はあるものの6世紀初頭を中心とした、またS F1416からは多少の幅はあるものの6世紀末から7世紀前半にかけての遺物が出土しており各時期の土師器の組成を示す良好な資料である。

一括資料  
SD 308  
SF 1416

### 第2節 古墳時代の集落の景観

今回原川遺跡として調査した古墳時代の遺構の広がりは東西約300m程であるが、最も西側の溝S D308よりさらに500m以上西側の坂尻遺跡(研究所)の調査で古墳時代の集落の西端が調査されつつある事<sup>⑤</sup>は、この地に営まれた古墳時代の集落が東西800mにもおよぶ事を示している。集落が各時期にどのような選地をしながらその中心を移して営まれたかは今後の大きな課題の一つである。県内でこの時期の集落の調査例はあまりないため出土遺物や土層を手がかりとして今回調査した遺構の大まかな変化をあえて今後の検討のために仮説的に示すと次のようになる。

東西の  
広がり

#### ①古墳時代集落の成立

出土した須恵器の中で最も古手のものは堅穴住居S B803南側の窪みの壇蓋(第7図1)、古墳周溝S D812の壇蓋(第45図1)、8区旧流路S D816の下層流路直上よりの有蓋高壝の

## 集落の成立時期

### 古墳の築造時 期

### 自然堤防上 を選定

### 住居と溝 SD 308

### 大小の竪穴 住居

### 建物群の 構成

蓋（第38図15）、3区包含層遺物の坏蓋（第50図1）などであり、図示できなかったが7区S D703の出土遺物の中にも類似の破片が含まれていた。これらの須恵器は中村編年第I型式4段階またはそれ以前に比定されるため5世紀後半と考えられる。窓穴住居S B803の坏蓋（第7図1）はS B803の埋没時点を示している。S B803は原野谷川の旧流路S D816により形成された自然堤防上の右岸側の最も立地条件の良い場所に造られている。古墳時代中期、5世紀後半には集落が成立し、その範囲は7区・8区を中心とし3区にもおよぶ可能性がある。

#### ②古墳の築造

古墳の周溝S D812からは中村編年第I型式5段階前後の須恵器（第45図2～4）が出土しており、古墳の築造年代を示している。古墳は集落の東南端に竪穴住居S B803を演して5世紀末頃に築造されたと見られ、この集落の首長の墓とみなしてよい。旧流路S D816により形成された自然堤防上は平地でありながらも原野谷川の沖積平野をよく見渡せ、東国への道を望む交通の要地であったと思われる。平地にも古墳が築造された事は、この地帯が引き続き安定した状態であった事を示している。

#### ③集落の発展

窓穴住居S B801からは中村編年第II型式1段階の环身（环身b2、第6図1）が出土しており、6世紀初頭と考えられる。S B801は他の竪穴住居より大型で、S B801をめぐるL字型の溝S D804は西側に対する何等かの小区画の可能性がある。古墳に隣接する事から古墳を造営した首長の一族が、引き続き最も立地条件の良い場所を占有していたとみられる。S B801の西側の7区・11区では、この他竪穴住居4棟、掘立柱建物跡13棟が調査されている。これらの建物の上限は前述した①②の時期（5世紀後半～末）まで遡る可能性を持つ。またS B801から西に120m以上離れた3区の溝S D308からも、S B801と同時期の大量の一括遺物が得られている。準完形品も多い事からすぐ近くから廃棄されたと見られ、S D308の周囲にも6世紀初頭に住居が広がっていた事を示すものである。したがって古墳時代中期の集落は、5世紀後半に成立し6世紀初頭には東西150m以上の広がりを持っていたといえる。遺物の中心はこの時期までであり、6世紀前半には薄くなるため建物群の下限も一応この時期までにおきてよいと考えている。7区・11区にはS F701やS D1101の様に古墳時代後期の遺構もあるが遺物は少ない。古墳時代後期の遺物は包含層の遺物でも1区・3区の西側部分や14区・15区の東側部分に多く、集落の中心が移動しているとみられる。

#### ④集落の遺構配置の特徴

7区・8区・11区で調査された方形の竪穴住居は、S B801やS B1103のように1辺6～7m前後のものと、S B701やS B1102のように1辺4～5m前後のやや小型のものに分かれれる。S B701出土の土器類の口縁部がS D308の甕と同タイプのものであるならば、S B801とS B701は同年代になる。同時代にやや大型の竪穴住居と小型の竪穴住居との組み合わせが、S B1102とS B1103の間にも考えられ、この観点からみるとその他の遺構で扱った3区の竪穴状遺構S B302とS B303との関係も同様にとらえられる。やや大型の竪穴住居と小型の竪穴住居が建設関係になる可能性も否定できないが、両者が切り合い關係をもたない事や遺物の点からみて、むしろ先に述べた考え方で以下の検討を進めた。

これらの竪穴住居は掘立柱建物群の南東方向に位置するが、これは旧流路S D816の南北の自然堤防の高まりの方向と一致して、その西側に掘立柱建物群が位置する配置となる。

平面積からの分類

総柱建物

建物の  
切り合

建替え

前提条件

共通した  
方 位

掘立柱建物13棟は1間×1間 1棟 (S II703)、2間×1間 3棟 (S H704・S H706・S II1103)、2間×2間 8棟 (S H701・S H702・S H705・S II1101・S H1102・S H1104・S H1105・S H1106)、2間×3間 1棟 (S II707) に分かれる。間取りの点からは2間×2間が土体であり、2間×3間のS H707が特別大きい。この点を平面積的にみれば、11m<sup>2</sup>前後に5棟 (S II704・S H706・S II1101・S H1103・S H1105)、16~18m<sup>2</sup>に3棟 (S H701・S H702・S H707) と大きく2グループに分かれる。

この2間×2間の建物はいずれも中央に束柱を持つ總柱建物である。また2間×3間のS H707やそれと類似した間取りを持つ可能性のあるS H1104は、いずれも東側寄りに1本だけ束柱を持つ。掘立柱建物の性格付けは困難であるが、2間×2間の總柱建物は倉庫的な、またS II707のような2間×3間の建物は倉庫または特別な平地式住居の両方の可能性を持つと考えられる。

### ⑤遺構配置の変遷の想定

掘立柱建物の配置については主軸方位を中心としたグルーピングにより、その単位集団の構成や変化が検討されている。原川遺跡で調査したのは集落の一部分であり、全体像は不明であるが、限られた範囲の中にもいくつかの遺構の方向性が想定される。遺構配置図(第2図)をみると、S H704・S H705・S H707の間、S H1102・S H1103との間、S H1105とS H1106の間の3ヶ所に切り合い関係が見られる。中でもS H707はS H704・S H705と切り合い関係を持つ事、また切り合い関係は持たないがS H704とS H706とは近接している事から、S H704~S H707までの4棟の間には約3回の建替えがあったとみられる。こうした切り合い関係を前提とし、各建物の棟方位、平面積、相互の距離等を参考にして3回の遺構配置の変化を想定したのが第54図の遺構配置想定模式図である。図上の検討であるため次のようないくつかの前提に基づいた。  
①当初から竪穴住居と掘立柱建物は併存して存在した。  
②掘立柱建物は当初より總柱建物とそうでない建物が併存していた。  
③S H704・S H705・S H707の3棟の建替えの場合、間取り・平面積とも最も大きいS H707が新しいと考えた。  
④大小の建物群が規則性を持つ場合、小さい建物群から大きな建物群へと変化すると考えた。  
⑤建物群の配置が規則性を持つ場合、土地の狭い占有から大きな占有へと変化すると考えた。

#### 第1段階(第54図I)

竪穴住居S B803が営まれ集落が形成され始めた段階である。南北棟のS H705とS H706の2棟で1群を形成すると考えた。両者は方位に共通性を持ち約6m離れ平列しているが平面積(13.1m<sup>2</sup>~10.1m<sup>2</sup>)にバラツキが見られ、間取り(2間×2間/總柱建物-2間×1間)も異なることから異なる性格の建物とも見られる。西側のS II1104とS H1106は、棟方向は異なるがほぼ同様な桁行を持つ細長い建物であるならば、1群になる可能性がある。

#### 第2段階(第54図II)

古墳が築造された段階と考えた。古墳と一定の距離をおくS B1102とS B1103の大小の竪穴住居を中心とする。掘立柱建物では竪穴住居の西側に南北に平行して並ぶS H1101・S H1103・S H1105の3棟が対応する。3棟はいずれもN-83°-Eを中心とする棟方向を持つ東西棟の建物である。各建物はほぼ同じ平面積(11m<sup>2</sup>-11m<sup>2</sup>-11.8m<sup>2</sup>)を持つが、間取りは2間×1間・2間×2間、また總柱建物とそうでない建物とに分かれる。竪穴住居を中心として西側の3棟に対応する東側のはほ同じ位置に同様な掘立柱建物を求めるS

H704がそれにあたる。SH704は西側の3棟と同一方位、同一平面積(11~12m<sup>2</sup>)を持つ。竪穴住居を中心としてコの字型の配置をとり古墳S812の中心線の延長方向に位置する。

### 第3段階(第54図III)

大小の竪穴住居SB801とSB701が対応する。大小の竪穴住居の距離は第2段階の距離よりも拡大する。SB801とSB701とはほぼ等しい距離で、掘立柱建物SH701・SH702・SH707がL字状に配置する。3棟は東西棟ではほぼ同一方位(N-74°-E)であり、いずれも総柱建物である。前述したようにこの3棟は平面積が最も大きなグループである。また総柱建物SH1102は方位、平面積ともSH701~702に最も近く、距離的にもSB801~SB701、SB701~SH702、SH702~SH1102の三者がほぼ同間隔になる事から、この時期の遺構群に含めてよいと判断した。

### L字状の配置

## 第3節 古墳と埴輪

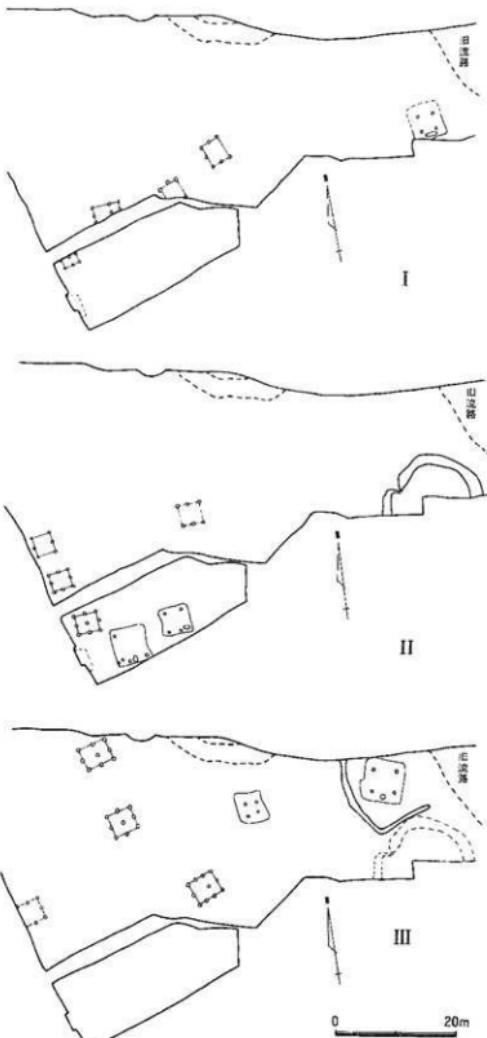
### ①古墳の形態

検出できた古墳の周溝部分の内外の外周を基に、図上にその中心点を求め、これを機軸にして左右対称に未発掘の南側部分を想定したのが第55図の古墳想定図である。円筒部分の機軸方位はE-4.5°-Sで南北の直径は10.8m、東西の長径は11.7mである。8区Aで

**陸橋部** 検出された周溝の切れ目の部分を陸橋部とすると、小型の円墳ながら西側に縦幅2.1~2.2m、横幅4.0~

**張り出し** 4.2m程の張り出し部分を持つ可能

性がある。円丘部に対して方形部が著しく小さな古墳については「造り出し付き円墳」と「帆立貝式古墳」の両者の可能性を持つことが指摘されている<sup>(3)</sup>。原川遺跡の場合は墳丘部



第54図 古墳時代遺構概念図(1/800)

分が削平されているためどちらともい難いが、張り出し部分が小さいことから造り出し部分である可能性が強い。出土した埴輪片は円筒埴輪と形象埴輪に分かれる。特に周溝の陸橋付近から北側にかけてに形象埴輪(人・馬・家)の集中部分がみられるのが特徴的で古墳祭祀の位置との関連が注目される。また周溝の東部分には円筒埴輪や拳大の蝶の多い部分がみられた。



第55図 原川古墳周溝・埴輪出土地点想定概念図 (1/160)

## ②円筒埴輪と家形埴輪

第4表は『静岡県文化財地名表I』<sup>(4)</sup>の中から遺物の観に「埴輪」が挙げられているものを抽出し、それに若干の補足を加えたものである。不完全なものであるがこれによれば県内の埴輪出土遺跡は約53個であり、これに鈴木敏則氏が星川古窯の分析で円筒埴輪の出土例として述べた浜松市の吉野D 3号古墳・瓢塚古墳・磐田市の瓢塚古墳・二子塚古墳・明ヶ島10号古墳を加えると<sup>(5)</sup>、約60以上の遺跡で少なくとも埴輪の出土が確認されていることになる。これを見ると8割以上(50遺跡)が大井川以西である。中でも都田川流域の左岸や三方原、また磐田原に特に集中し、原野谷川流域にも埴輪の出土遺跡が多い。しかし出土例の少なさに加え、少破片の出土が戦前の『静岡県史』でふれられているだけのものや未報告のものもあり、まだまだ県内の埴輪の実態は不明である点が多い。

全国的には川西宏幸氏等により円筒埴輪についての編年表が示されているが、地域的な編年については未確定な部分が多い。川西氏は遠江については松林山古墳のものをⅡ期に、また常山古墳や京貝塚古墳・千人塚古墳を、IV期(5世紀中頃)に、一ノ宮・陣内平・郡ヶ平3号墳・権現山6号墳・二子山・衛門坂塚等のものをV期(6世紀)において分類している<sup>(6)</sup>が、これには鈴木敏則氏の星川古窯の報告における批判があり<sup>(7)</sup>、埴輪製作址との関係や伴出遺物からの位置付けの積み重ねが必要である。この中で原川遺跡から出土している円筒埴輪は伴出須恵器からはIV期末からV期への移行期に当るものである。

また現在県内で知られている形象埴輪は、常山古墳のような大型古墳から出土したものが多いが、細江町の中平2号墳・狐塚古墳・陣内平古墳の様に径10~15m前後の小型古墳で形象埴輪を持つものもある。中でも陣内平古墳では「家・盾・人・物・馬・鳥」の組み合せが報告されており<sup>(8)</sup>、原川古墳の「人・馬具・家」等の組み合わせと類似性を持つ。また5世紀末とみられる森町血松塚古墳(全長48m)でも「人・動物・家」等の組み合わせが報告されている<sup>(9)</sup>。県内では家形埴輪の出土例は少なく、出土しているものも小破片であ

埴輪出土  
遺跡の分布

磐田原に  
特に集中

円筒埴輪  
の編年

IV期~V期  
への移行期

形象埴輪の  
組み合わせ

家形埴輪の写実性	<p>り、全体の形態が推定できるものは今河、原川遺跡で出土したものが初めてである。家形埴輪については住居を忠実に反映しているものもあるが、第9節で述べたように川西編年第V期（6世紀）は家形埴輪が写実性を失いつつある時期である。第IV期からV期への移行期に当たるこの家形埴輪は小型でかつ土師質あるため必ずしも忠実に当時の住居を反映しているとはい難いが、本遺跡の調査でも2間×3間の掘立柱建物が出土している事は先に報告した。また各地の調査の中でも3間×3間またはそれ以上の規模の建物が報告されつつある。この家形埴輪をあえて3間×3間の2階建ての建物と見なすことができるならば、梁行きの3間は構造上内部に柱を持つ建物とみられる。また屋根の部分ははじめからなかったか別に造られていた可能性が強く、あるとすれば、鳥取県長瀬高浜遺跡出土の家形埴輪にみられるような、緩い傾斜の屋根の上部が入母屋式、または寄棟式であるような形態が想定される<sup>(1)</sup>。また性格的には下部の側面に入口を持つ事から高床倉庫とは異なり、大型の居館又は集会所的な建物を想定できる。</p>
長瀬高浜遺跡	<p>現在5世紀～6世紀の豪族の居館跡が大阪府大岡遺跡や群馬県三ッ井寺遺跡を始め全国で報告されつつあり、その規模は予想以上に大きく、中には群馬県赤堀茶臼山古墳出土の家形埴輪のような建物群を想定させるものもあり、多様性に豊んでいる。原川遺跡が位置する原野谷川流域についての集落の調査は少ない。しかし豪族の変化からは5世紀初めに始り各和金塚古墳・瓢箪古墳・吉岡大塚古墳・岡津奥の原古墳と続く大型の前方後円墳を主体とする古長墓群が5世紀末～6世紀初めにかけて衰退し、変わって6世紀前葉より横穴群が形成されやがて圧倒的な存在となることが平野吾郎氏により明らかにされている。同氏は特に5世紀末～6世紀前半にかけて墳丘規模の縮小と副葬品の内容の貧弱化を指摘し、この地域の政治的変動の反映と捉えている<sup>(2)</sup>。今回の報告はこうした時期に原野谷川の旧河道の自然堤に成立した拠点集落の一端を示したものである。先に述べたようにこの地は東国への重要な交通路である。墳丘施設や副葬品は不明であるが小規模ながら造り出し部分や形象埴輪を伴う古墳がこの集落の首長のものであることは明かであり、このことがこの地域の政治勢力の変動の中に占める位置付けは今後の課題である。</p>
今後の課題	

#### 参考文献（敬称略）

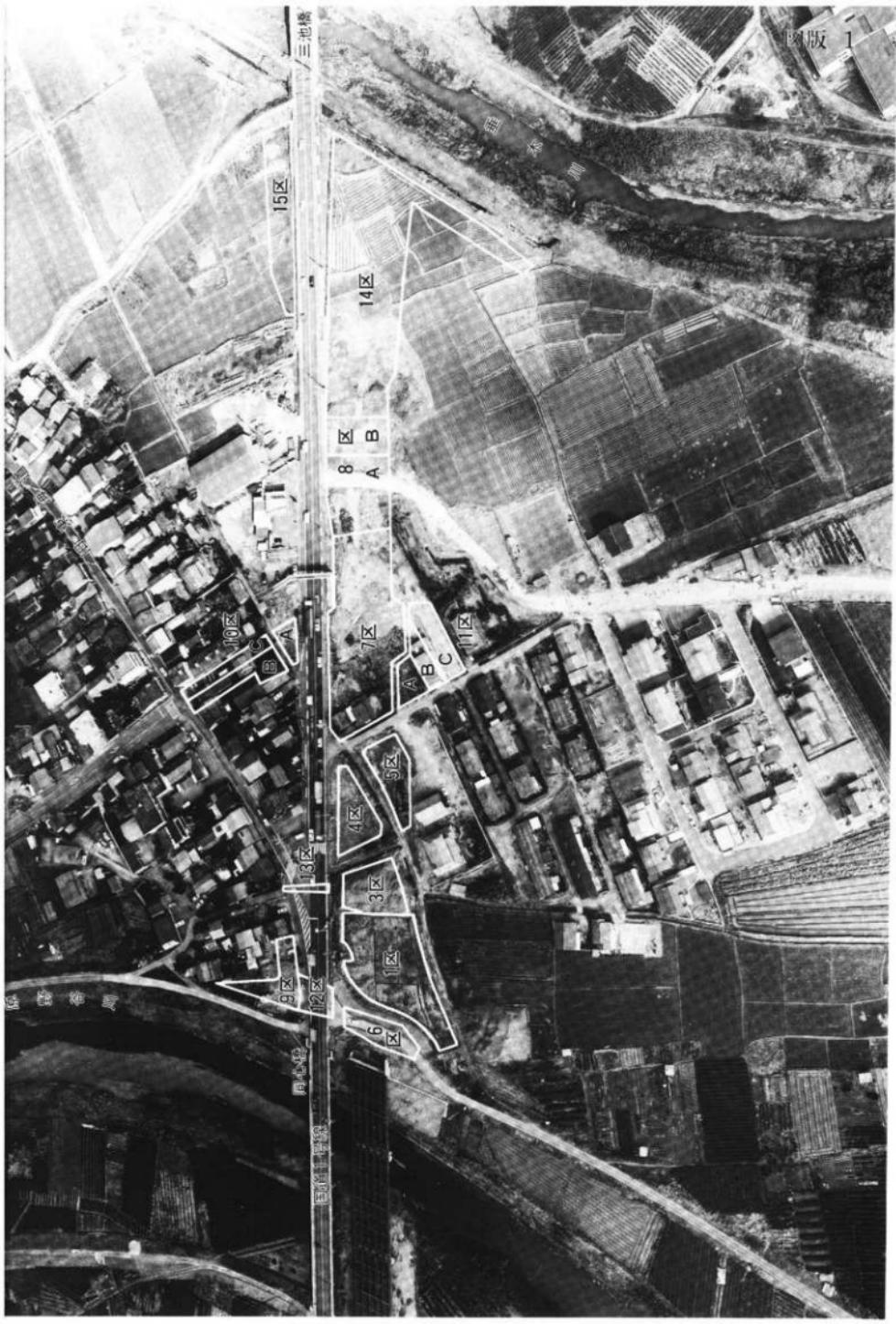
- (1) 五島 康司・松井 一・明・吉岡 伸夫他 「一般国道一号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書坂尻遺跡一序文・古墳時代編」建設省中部地方建設局・静岡県教育委員会・袋井市教育委員会 1985
- (2) 平野 吾郎・小柴 秀樹・鍛原 修二 「坂尻遺跡－昭和63年度袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報」財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所 1989
- (3) 遊佐 和敏 「帆立貝式古墳」同成社 1988
- (4) 静岡県教育委員会「静岡県文化財地名表I・II」 1989
- (5) 川西 宏幸 「古墳時代政治史序説」 岩書社 1988
- (6) 鈴木 敏則 「星川古窯跡出七遺物」 「静岡県考古学研究13」 静岡県考古学会 1982
- (7) 羽生生 保 「血松塚古墳発掘調査報告書－墳丘測量及び範囲確認調査」 静岡県文化財調査報告書第40集 静岡県教育委員会 1988
- (8) 福嶋 廉純 「長瀬高浜遺跡発掘調査報告書IV－天神川流域下水道事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（植輪編）」 財団法人鳥取県教育文化財团 1982
- (9) 平野 吾郎 「原野谷川流域の古墳群について」 「古代探叢」 滝口宏先生古稀記念考古学論集 1980

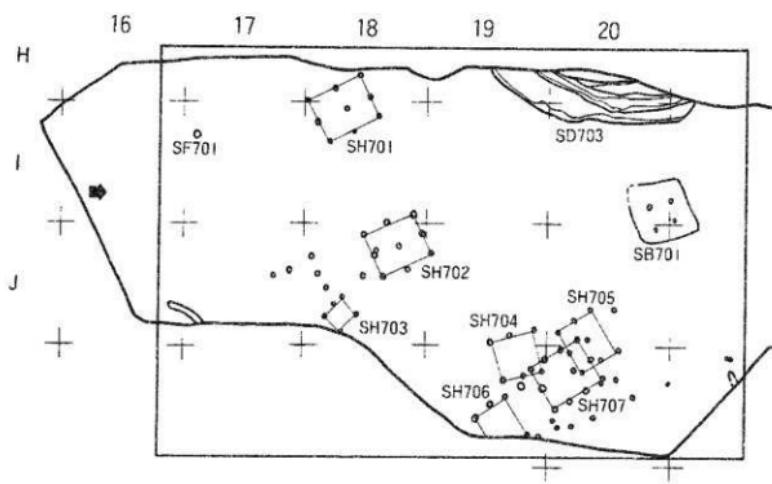
## 主要参考文献（歴史系）

- 静岡県『静岡県史（第一巻）』 1930  
後藤 守一『埴輪家の研究（一）・（二）』『人形学雑誌』 第46巻 9号・12号 1931  
後藤 守一他『沼津長塚古墳』 沼津市教育委員会 1957  
静岡県教育委員会『東名高速道路（静岡県内工事）関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 1968  
坂田 泉『家形埴輪にみられる建築形態について』『東北大大学建築学報』14号 1972  
図録『はにわ』 東京国立博物館 1973  
大林 太良『日本古代文化の探求－家』 社会思想社 1975  
川西 弘幸『円筒埴輪論』『考古学雑誌』第64巻2号 日本考古学会 1978  
群馬県歴史博物館『開館記念展 群馬の埴輪』 1979  
小笠原好彦『畿内および周辺地域における掘立柱建物集落の展開』『考古学研究』第25巻第4号・N=100考古学研究会 1979・3月号  
猪熊 兼勝『埴輪』 日本の原始美術6 講談社 1979  
赤塚 次郎『円筒埴輪製作覚書』『古代学研究』第90号 古代学研究会 1979.7  
平野 喬郎・岩井 克允・横松 章八『瓢塚古墳－測量調査報告書』掛川市教育委員会 1979  
植松・岩井『吉岡大塚古墳－測量調査報告書』掛川市教育委員会 1980  
石塚 久則他『塚廻り古墳群』群馬県教育委員会 1980  
平野・植松・岩井『各と金塚古墳－測量調査報告書』掛川市教育委員会 1981  
足立 順司『広野山七期説について』『森町考古17』 森町考古学研究会 1981.10  
小笠原好彦『東日本における掘立柱建物集落の展開』『考古学論叢I』東出版事業社 1983  
磐田市郷土館『特別展京見塚遺跡展－京見塚古墳発掘60周年』 1983  
袋井市史編纂委員会『袋井市史 通史編』 1983  
鈴木 敏則『京見塚展』をみて『静岡県考古学研究14』静岡県考古学会 1983  
杉本 尚次『日本の住まいの源流－日本基層文化の探求』文化出版局 1984  
向坂 錠二『静岡県（西部）』『古墳時代土器の研究』 古墳時代土器研究会 1984  
静岡県考古学会『須恵器－古代陶質土器－の編年』静岡県考古学会シンポジウム2 静岡県考古学会 1985  
静岡県考古学会『古墳時代の小師器』静岡県考古学会シンポジウム6 静岡県考古学会 1985  
第6回三県シンポジウム『埴輪の変遷－普遍性と地域性』曲水系古代文化研究所・群馬県考古学談話会・北武藏古代文化研究所 1985  
鈴木 邦司『昭和59年度堂山古墳－周堤確認調査報告書』静岡県磐田市教育委員会 1986  
広瀬 和雄『古墳時代の集落類型－西日本を中心として』『考古学研究』第25巻1号 N=97  
考古学研究会 1987 6月号  
川西 宏幸『円筒埴輪の技法と変遷』『世界考古学大系』日本編著選抜刷 1987  
金井塚良・他『討論 群馬・埼玉の埴輪』あおさ社 1987  
安藤 寛『昭和61年度堂山古墳－後円部・周堤発掘調査報告書』静岡県教育委員会 1988  
橋本 博文『埴輪の性格と起源論』『論争・学説－日本の考古学』第5巻 古墳時代所収 雄山閣 1988  
伊達 宗泰『道輪祭社論序説』『権原考古学研究所論集』第八巻所収 権原考古学研究所編 古川弘文館 1988  
坂 靖『埴輪文化の特質とその意義』『権原考古学研究所論集』第八巻所収 権原考古学研究所編 古川弘文館 1988  
ニューサイエンス社『特集・豪族の居館跡』『月刊 考古学ジャーナルA』 1988.4  
国立歴史民俗博物館『共同研究－古代の集落』『国立歴史民俗博物館研究報告』 国立歴史民俗博物館 1989

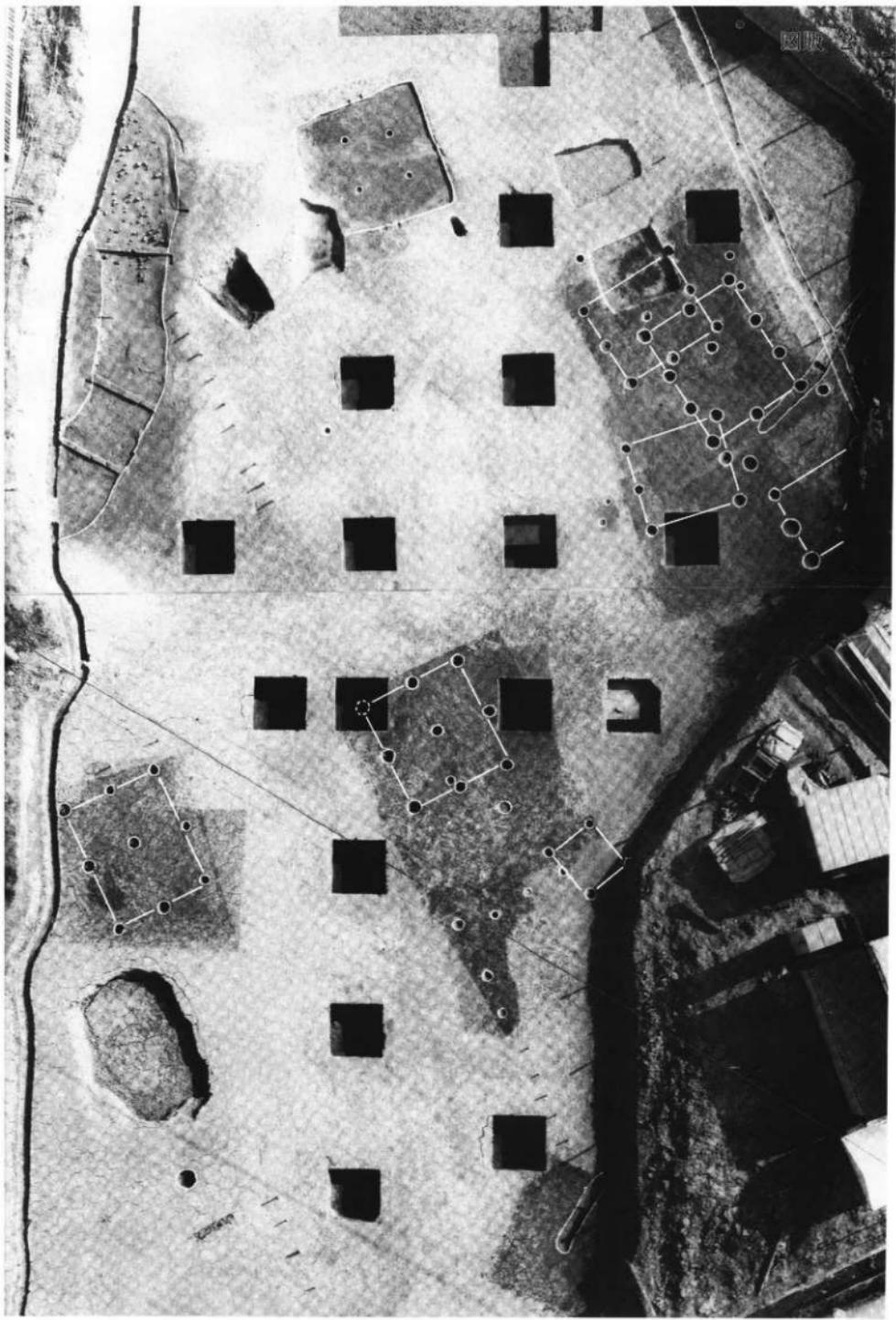
図 版

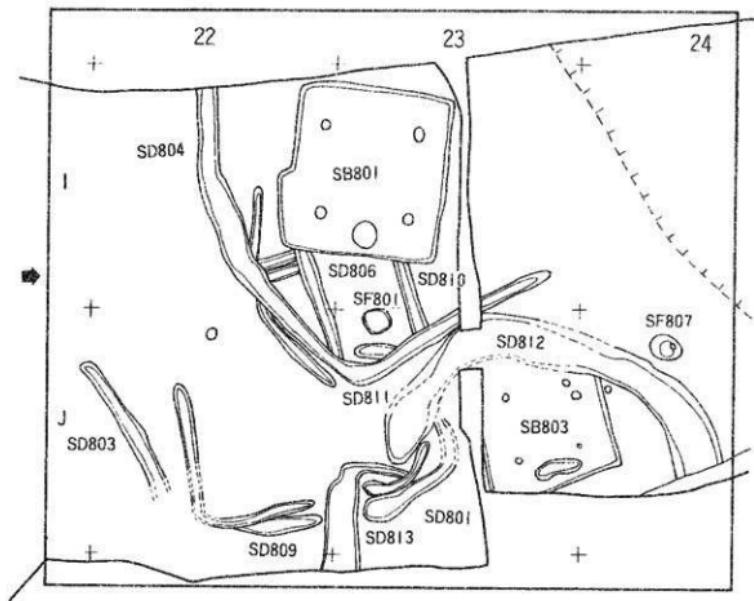
図版1 古墳時代面発掘区位置図





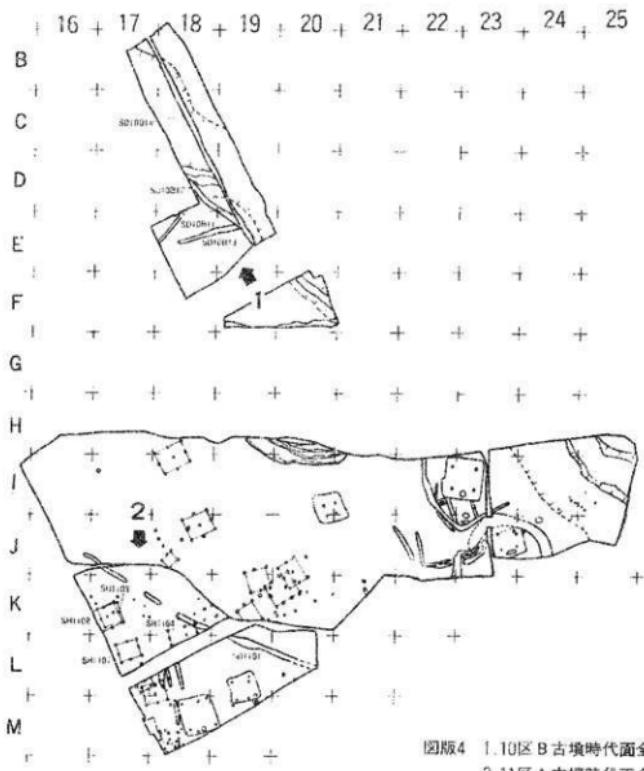
図版2 7区古墳時代面全景  
(航空写真 昭和58年撮影)





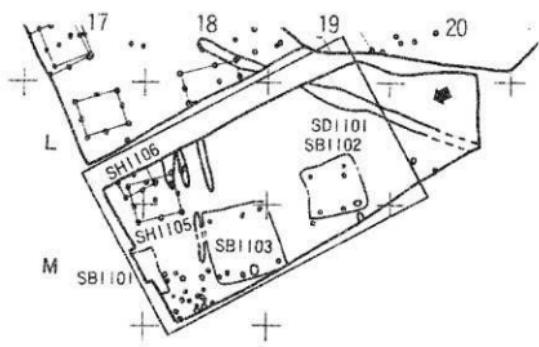
図版3 8区古墳時代面全景  
(航空写真 昭和58年撮影)





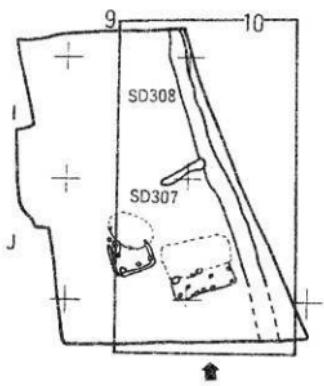
图版4 1.10区B古墳時代面全景  
2.11区A古墳時代面全景





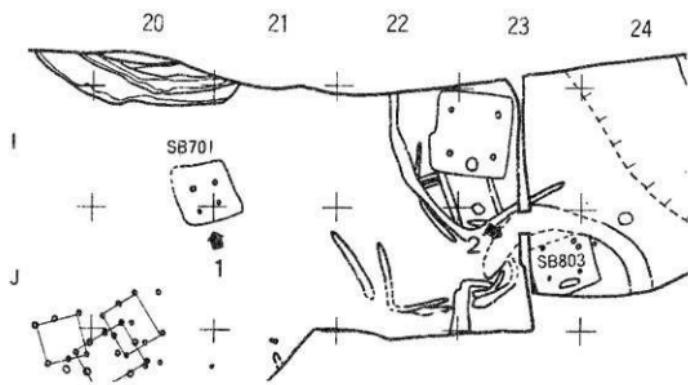
図版5 11区 B・C古墳時代面全景



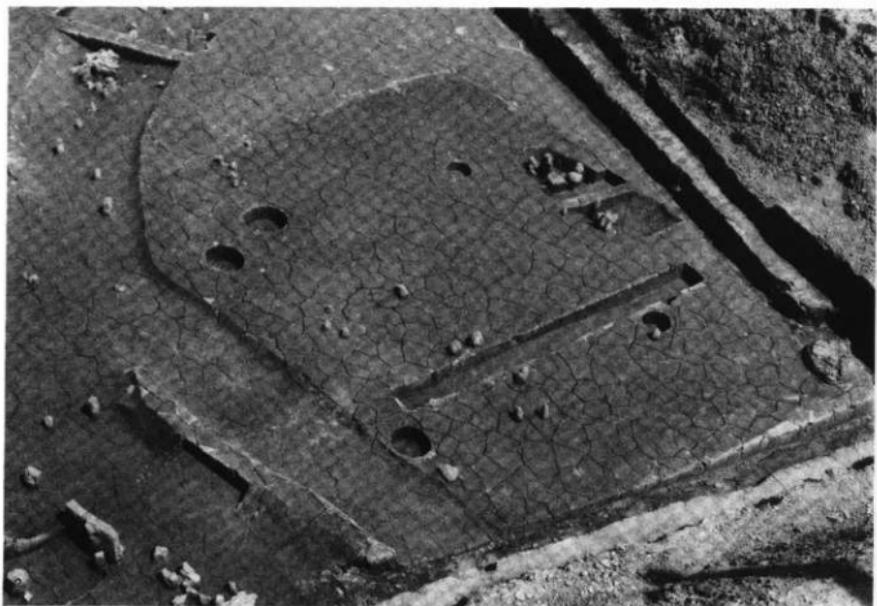


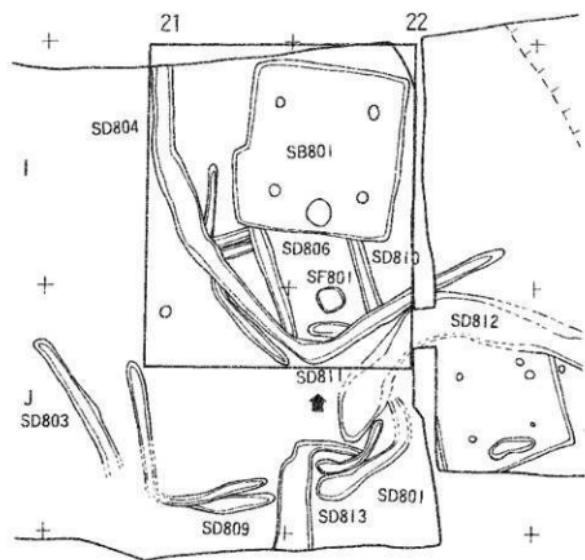
図版6 3区東側部分全景  
(SD308・SD307中心)





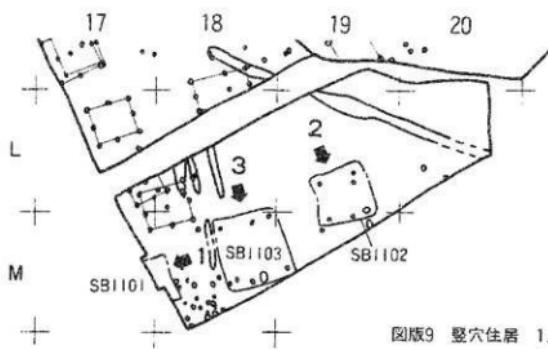
図版7 竪穴住居 1. SB701  
2. SB803



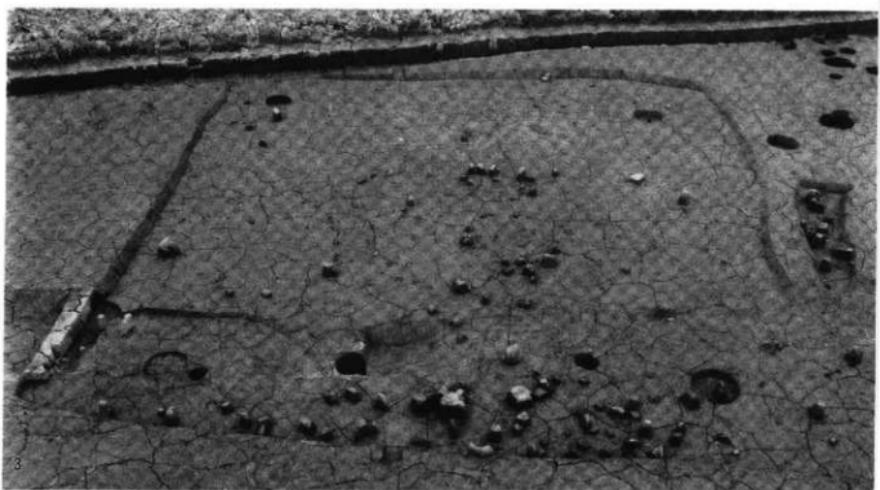
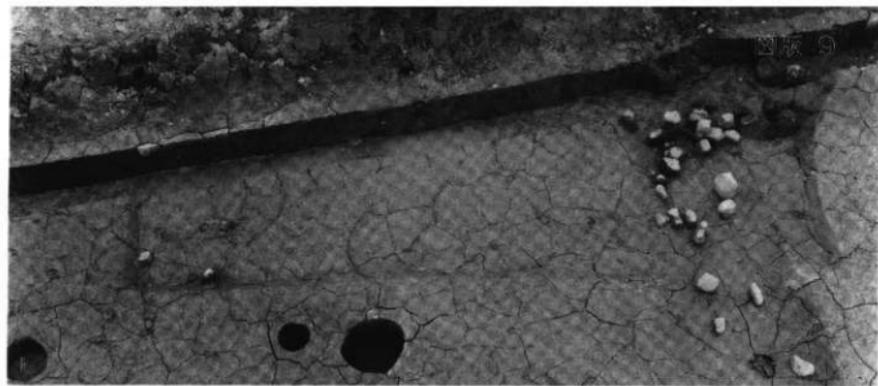


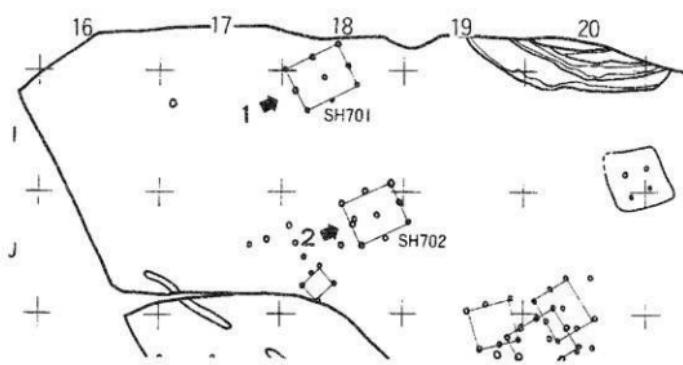
図版8 積穴住居 SB801



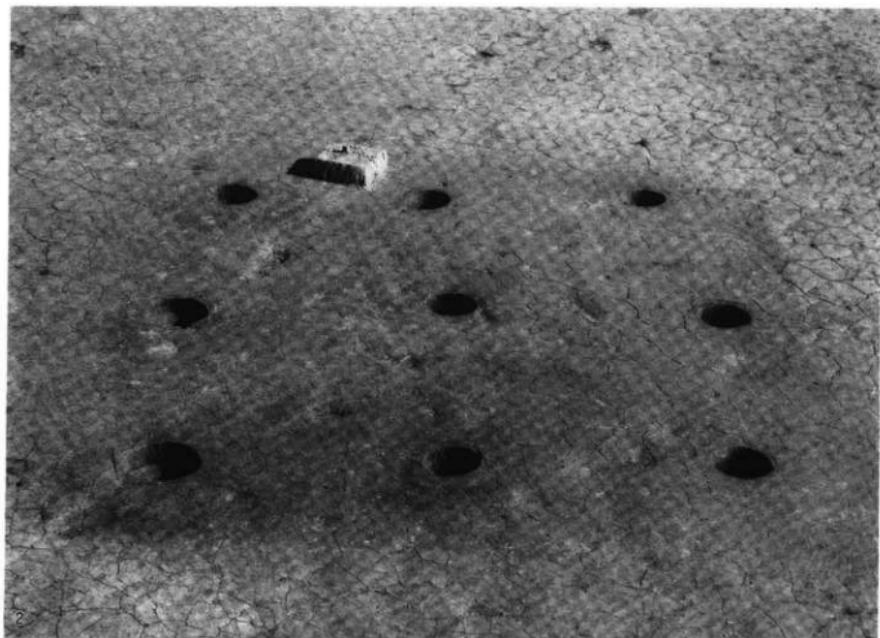
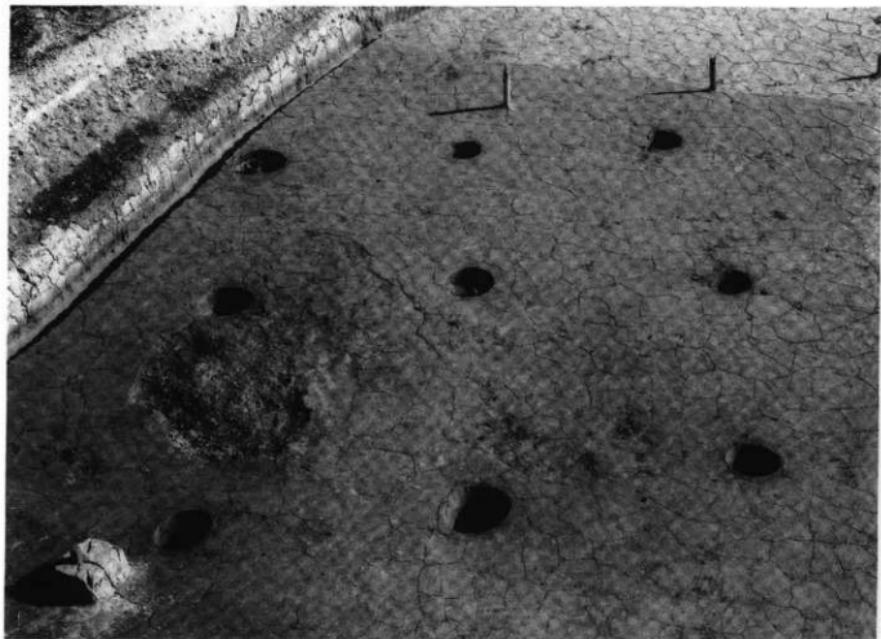


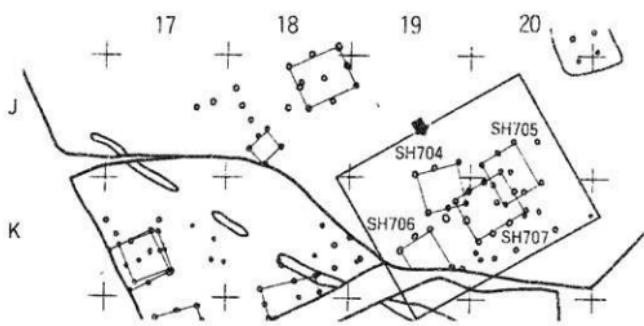
図版9 積穴住居 1. SB1101  
2. SB1102  
3. SB1103



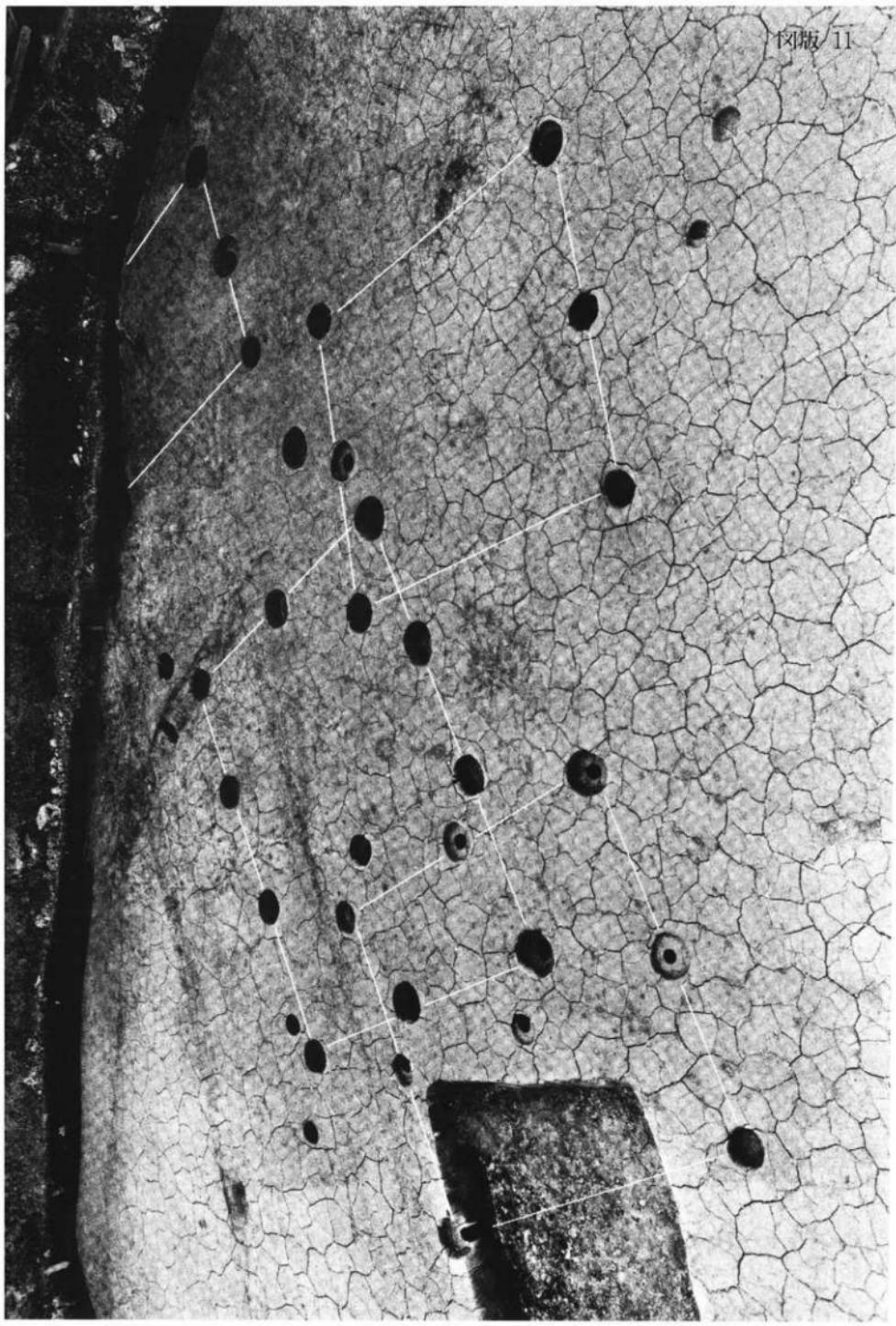


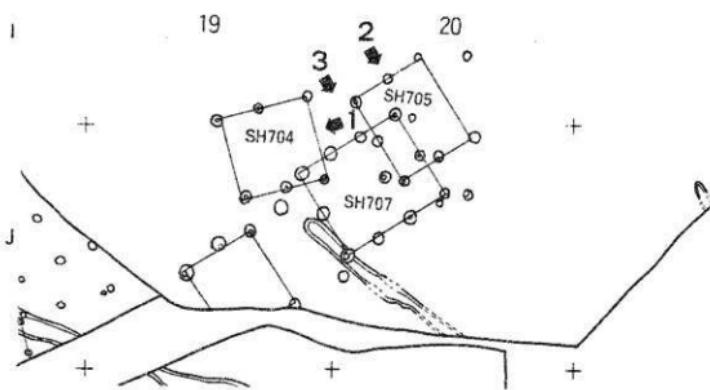
图版10 据立柱建物  
1. SH701  
2. SH702



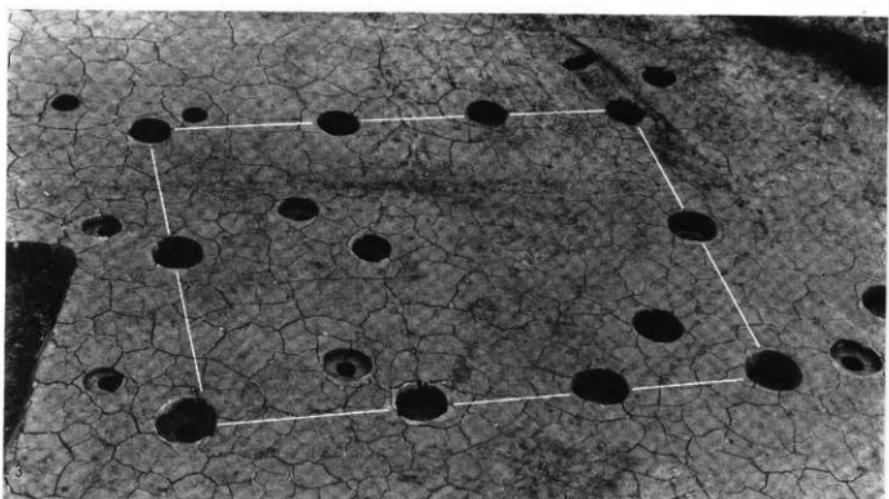
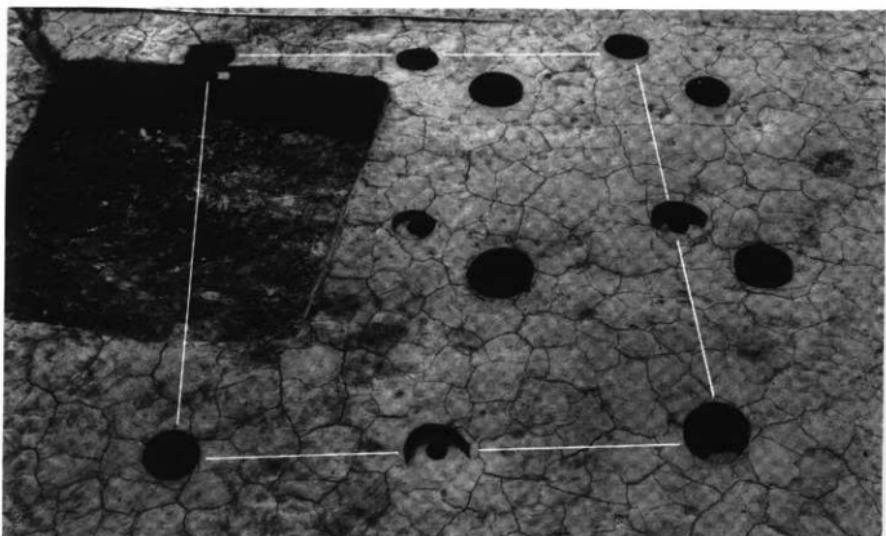
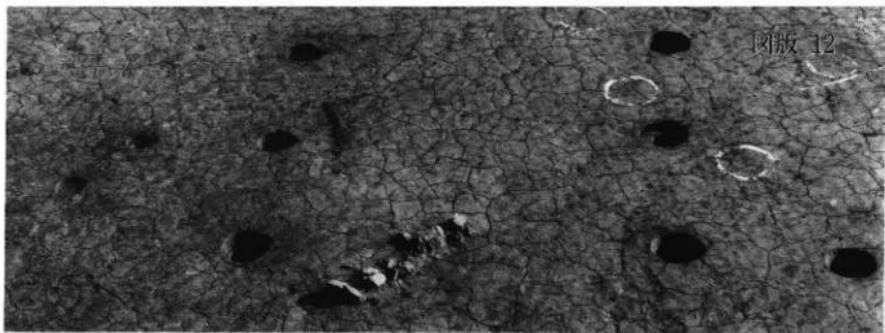


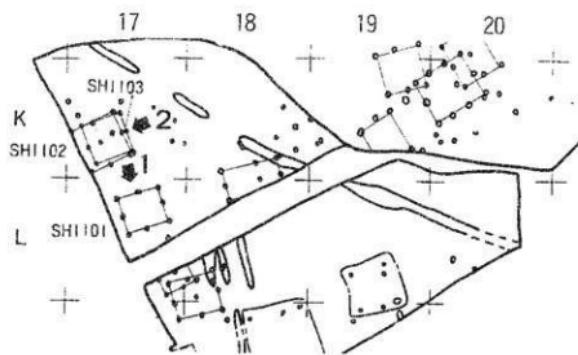
图版11 7区据立柱建物 南侧柱穴群



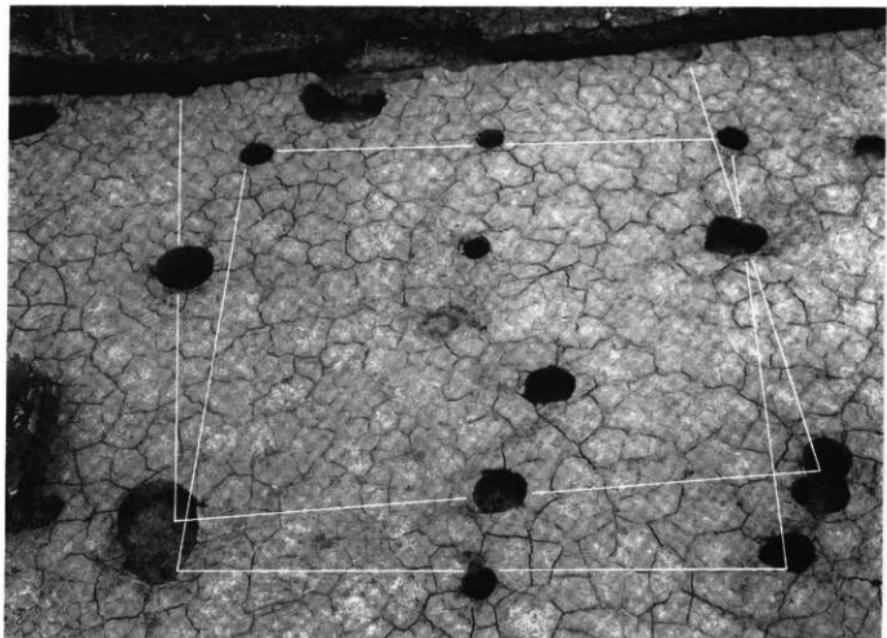
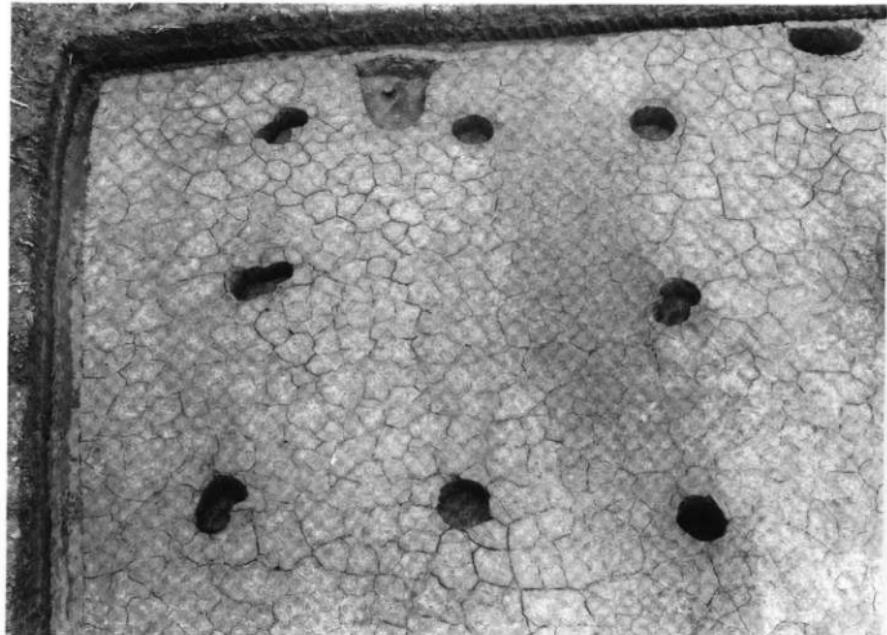


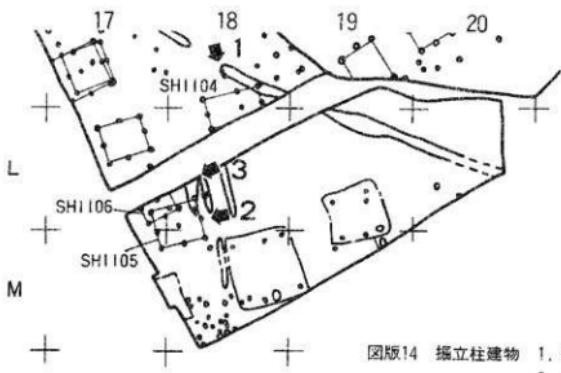
図版12 堀立柱建物 1. SH704  
2. SH705  
3. SH707



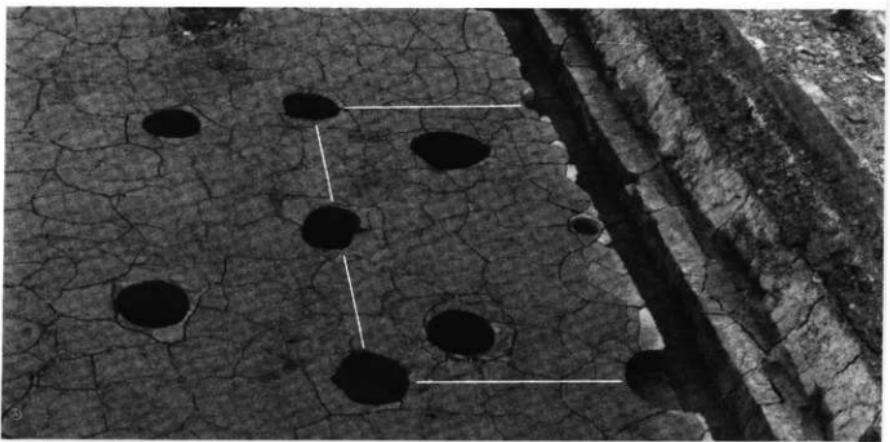
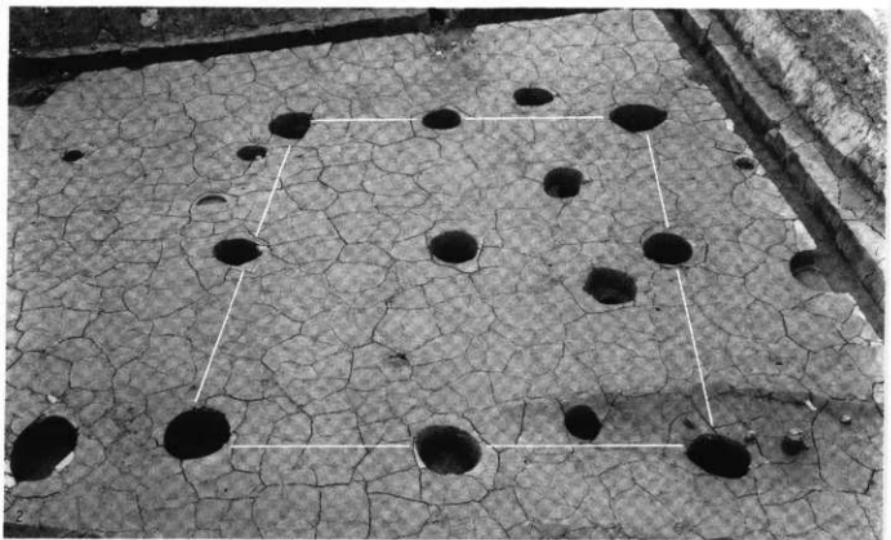
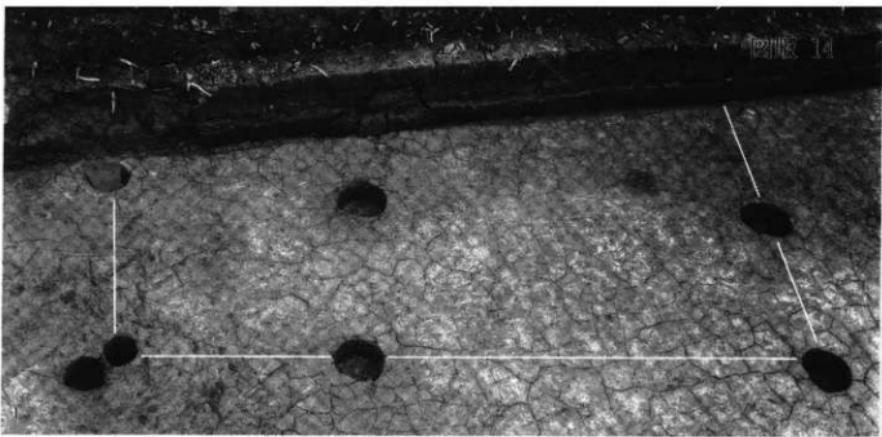


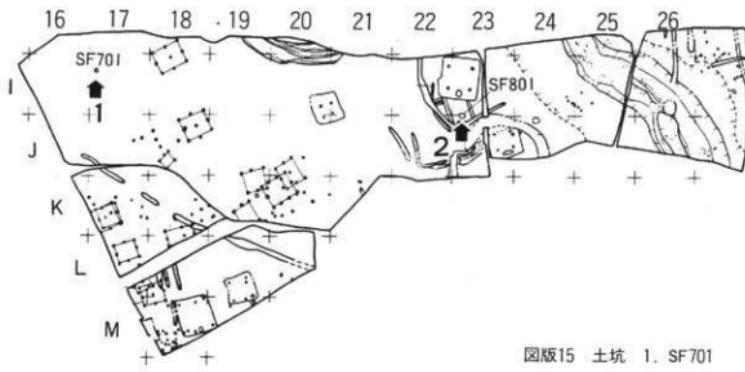
図版13 捨立柱建物  
1. SH1101  
2. SH1102  
SH1103





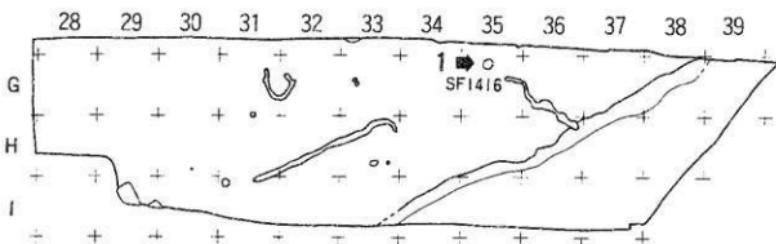
図版14 摺立柱建物  
1. SH1104  
2. SH1105  
3. SH1106





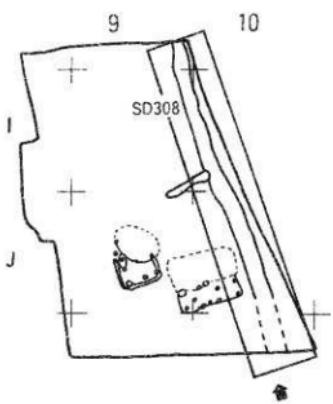
図版15 土坑  
1. SF701  
2. SF801





図版16 土坑 1. SF1416 出土状態  
2. SF1416 出土遺物

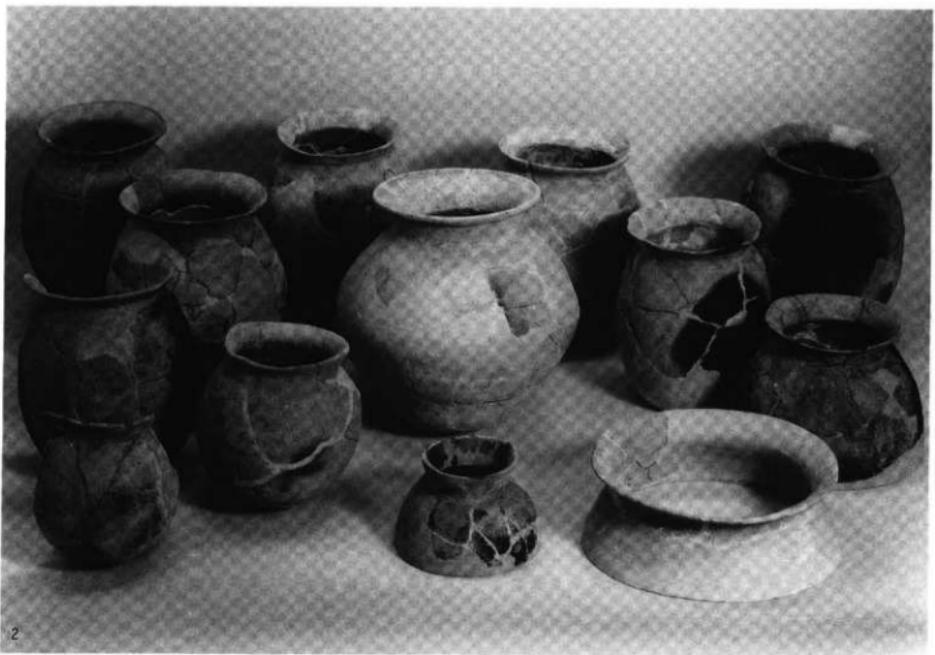
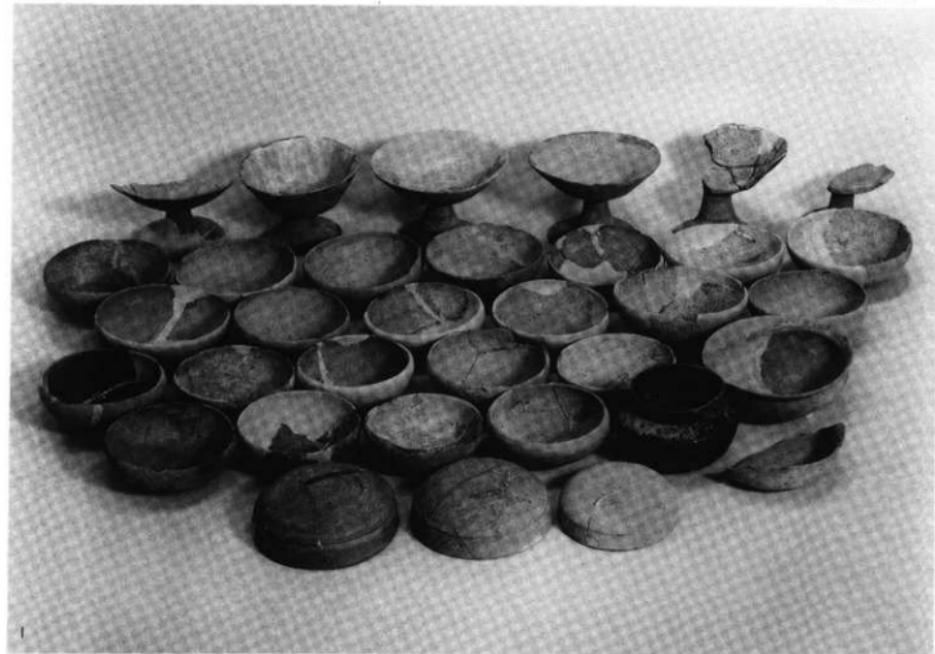


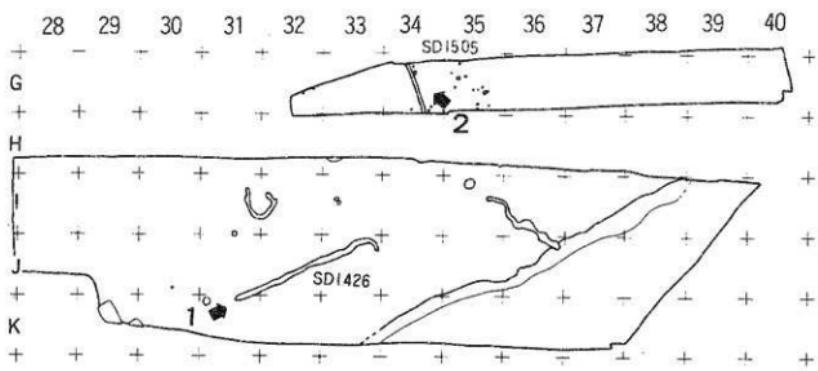


図版17 溝 SD308 (南より)全景

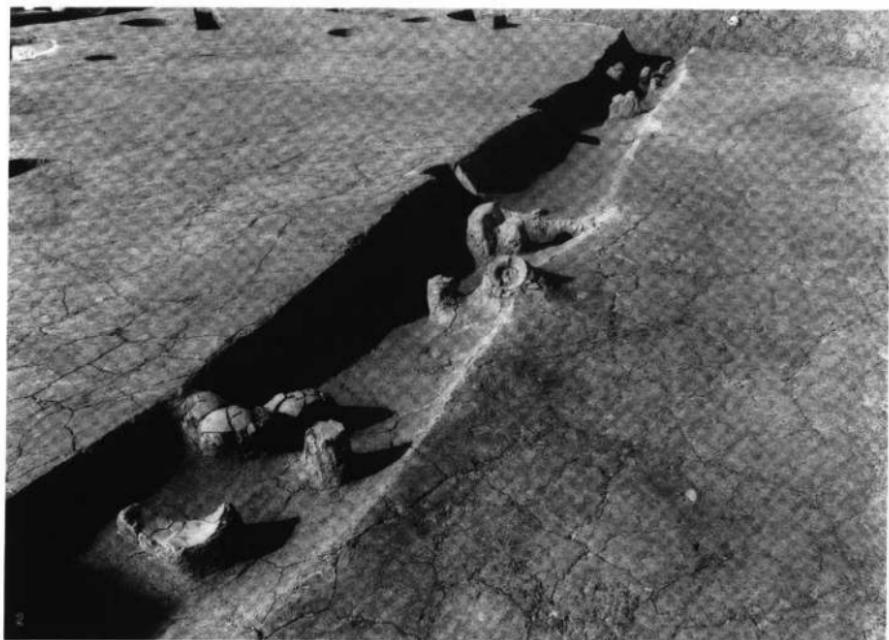
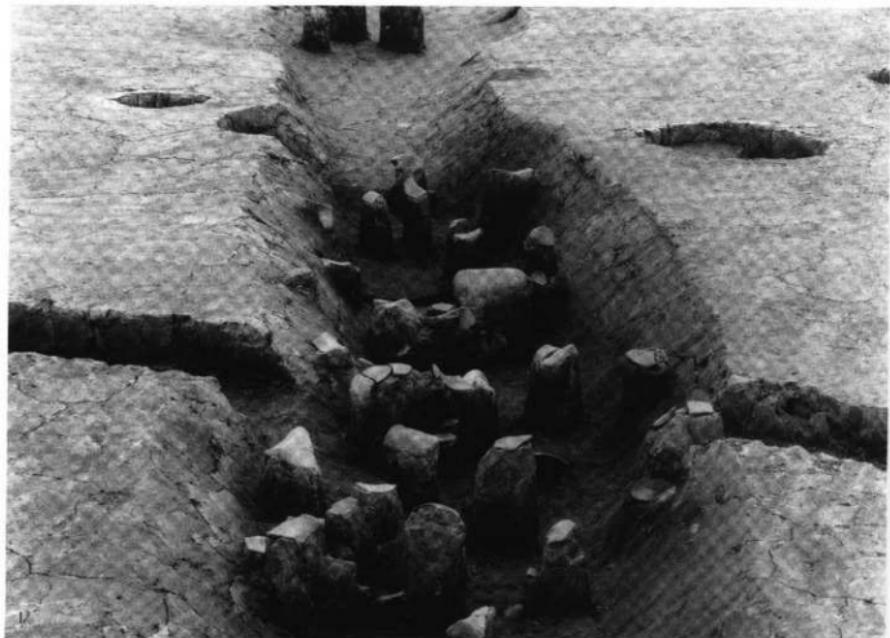


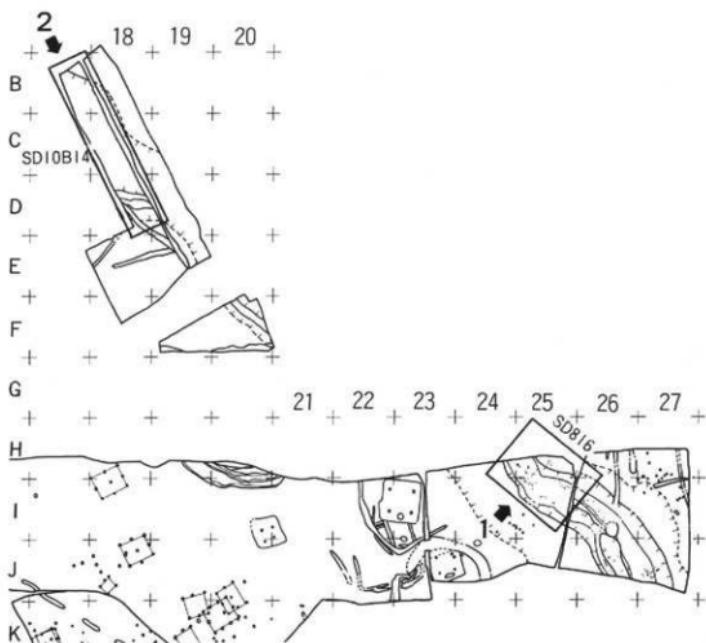
圖版18 溝 SD308 出土遺物  
1. 壺・高壺・短頸壺  
2. 坛・壺・甕





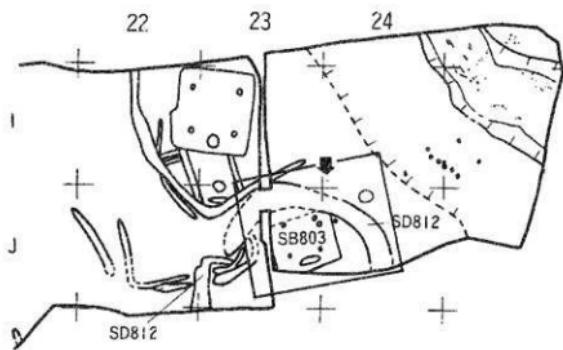
図版19 溝 1. SD1426  
2. SD1505





図版20 旧流路 1. SD816 (8区A)  
2. SD10B14 (北より南をみる)

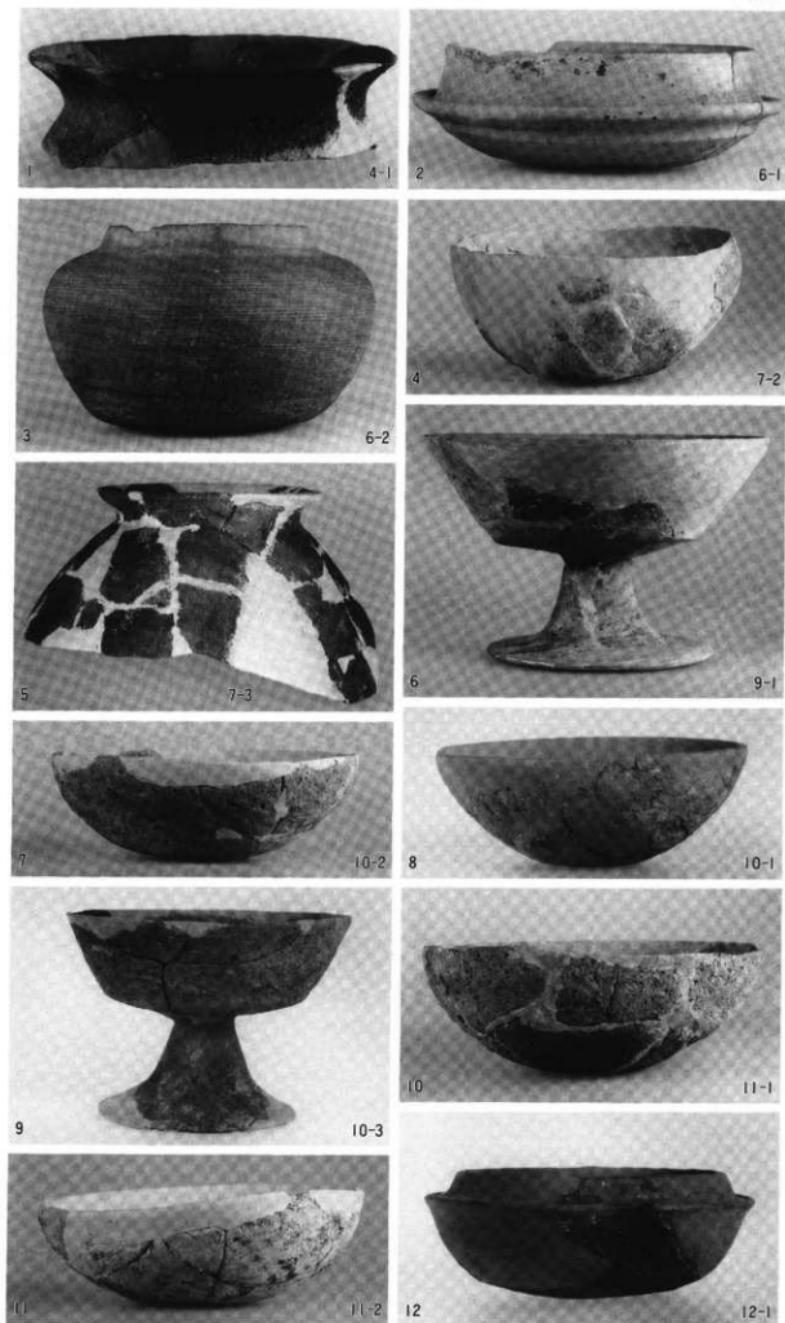




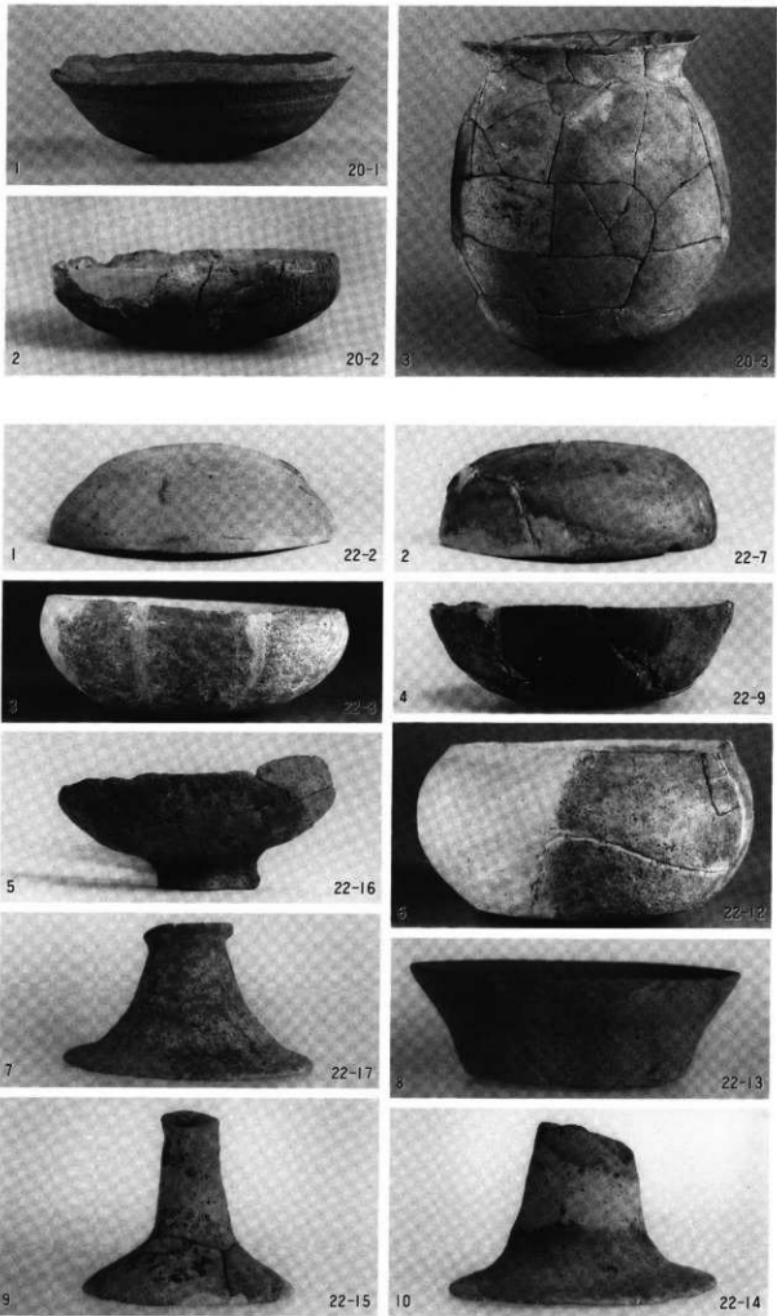
图版21 古墳周溝 SD812 (8区A)



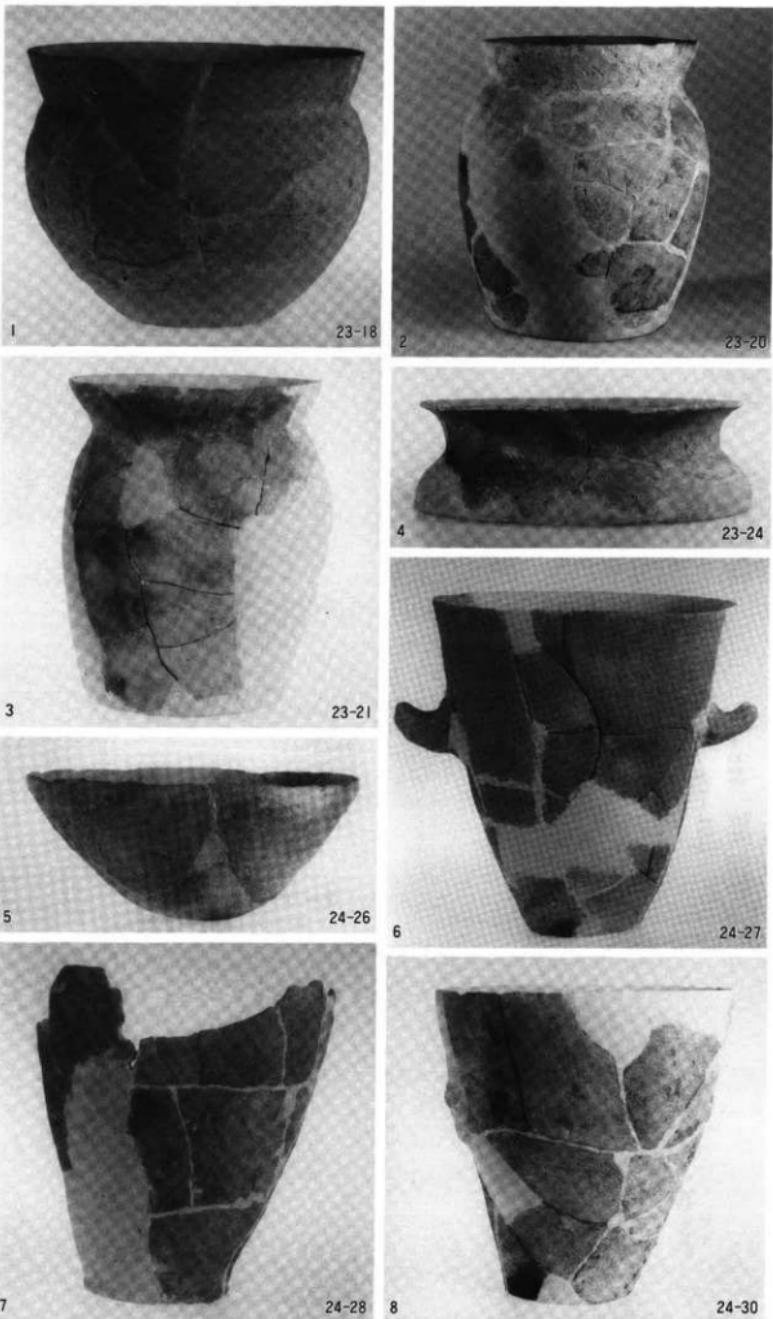
图版22 壁穴住居出土遗物  
SB701(1)  
SB801(2·3)  
SB803(4·5)  
SB1101(6)  
SB1102(7~9)  
SB1103(10·11)  
SB1401(12)



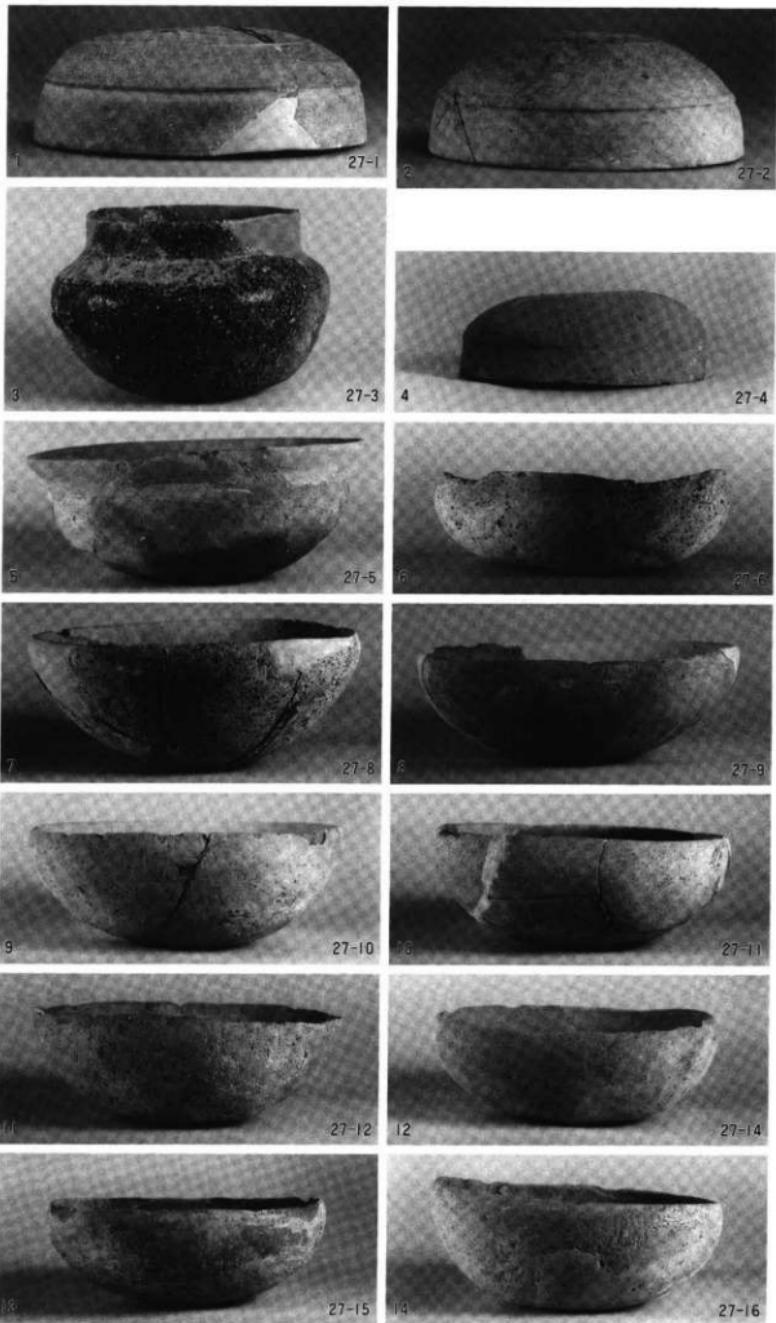
図版23 土坑出土遺物  
SF701(1・2)  
SF801(3)  
SF1416 その1(1-10)



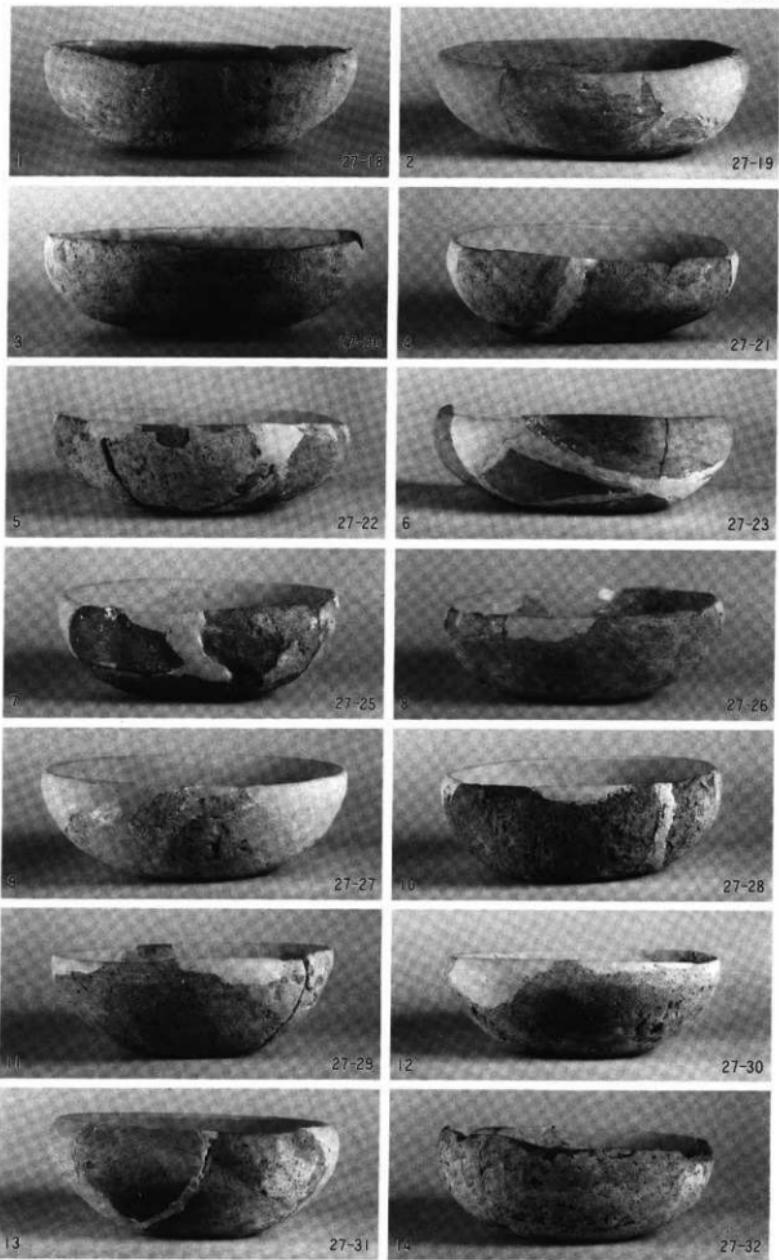
図版24 土坑出土遺物  
SF1416 その2(1~8)



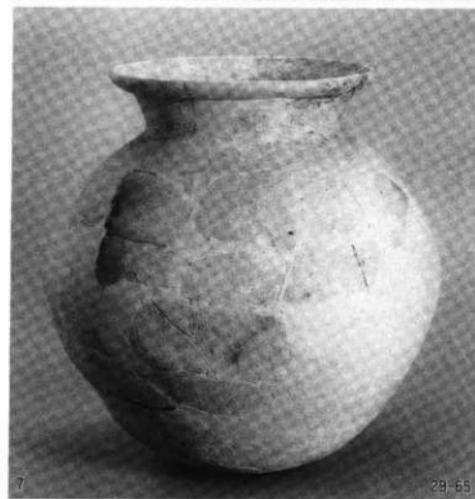
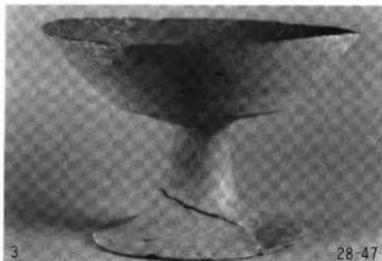




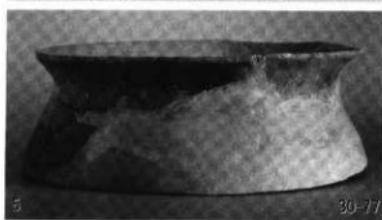
図版26 SD308 出土遺物 その2



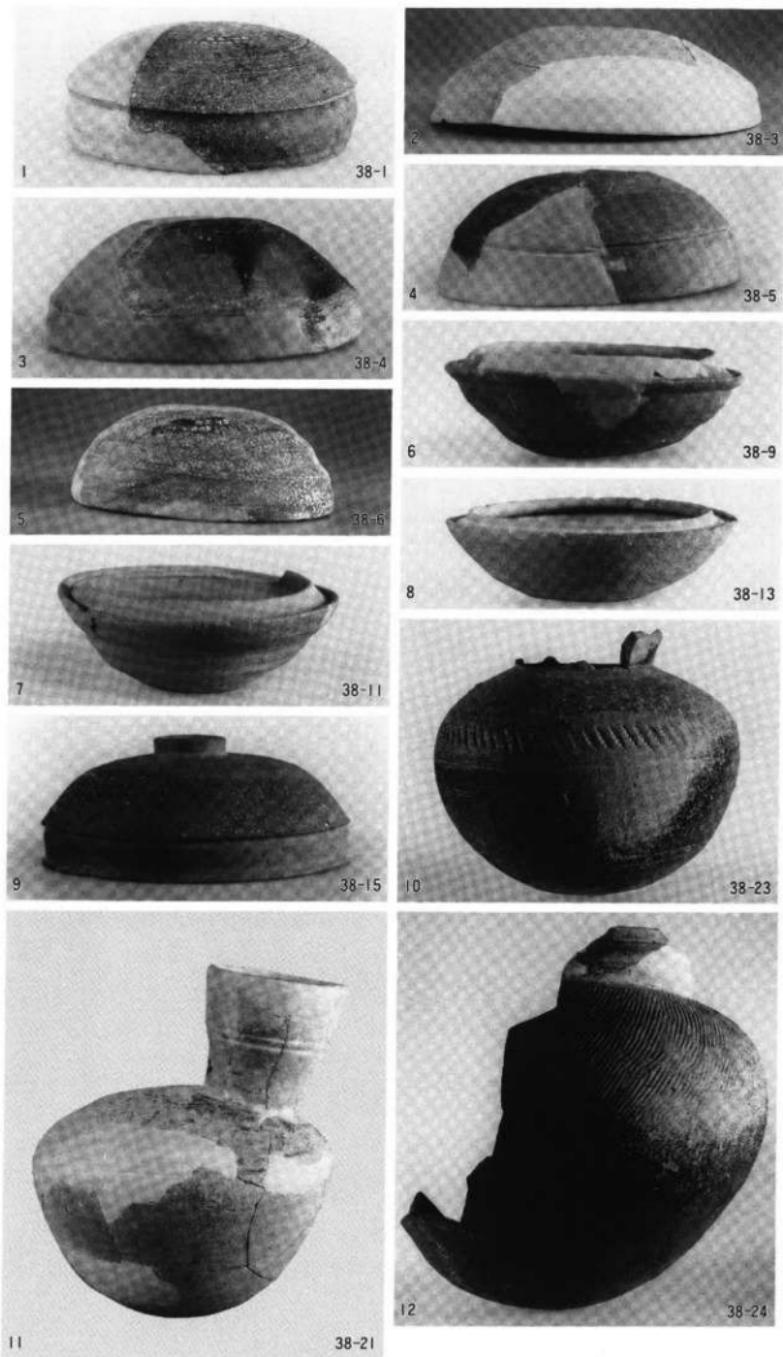
図版27 SD308 出土遺物 その3



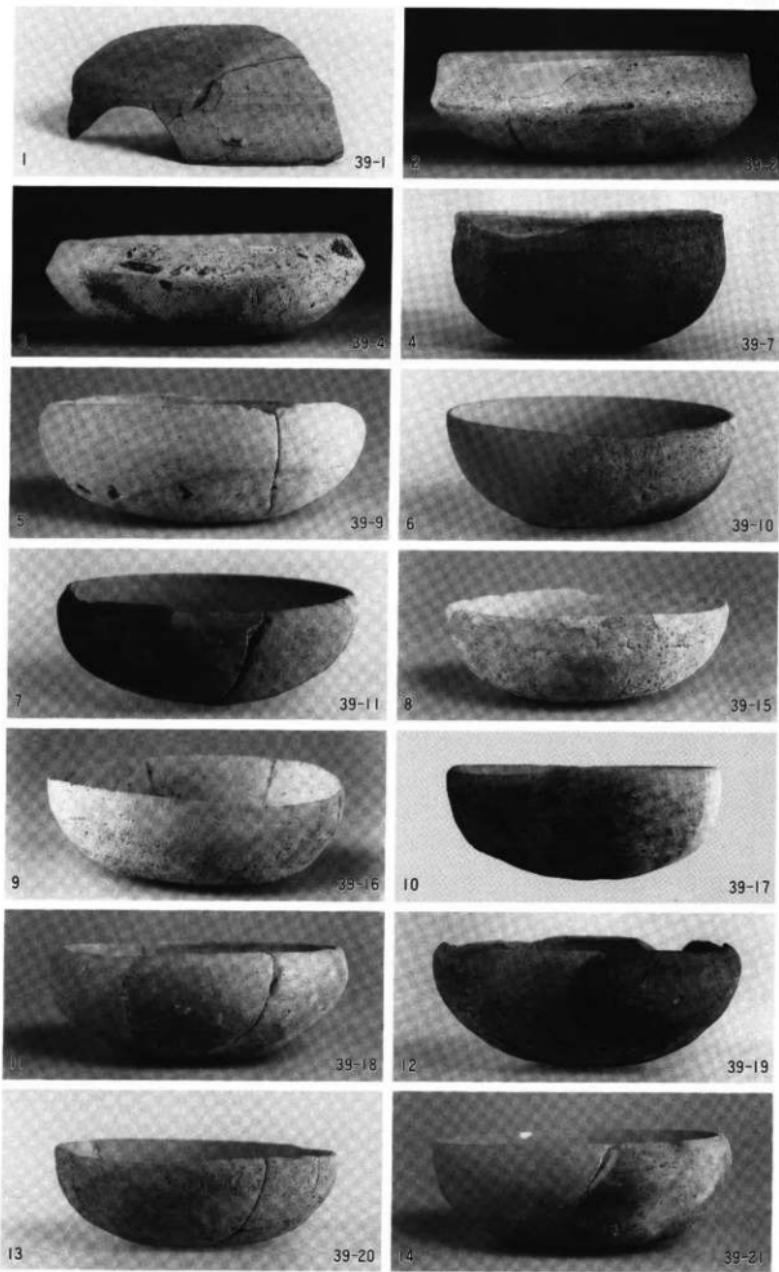




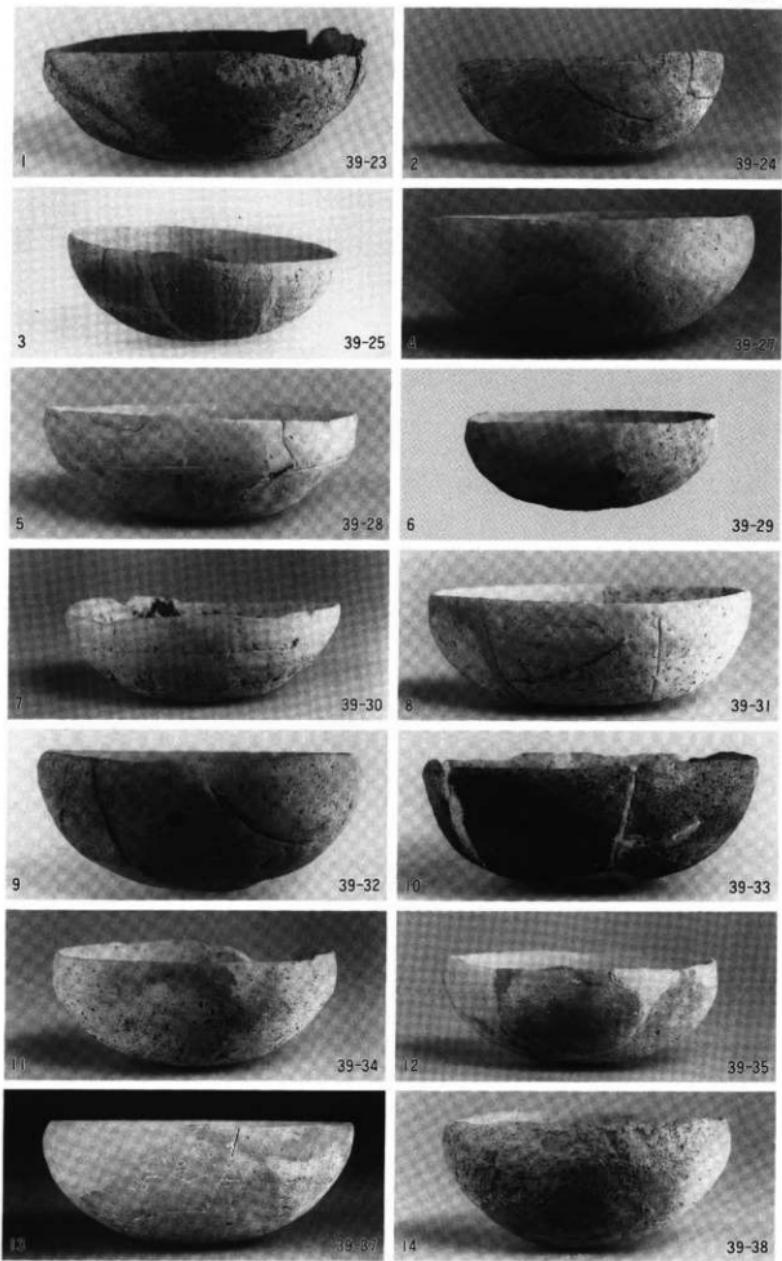




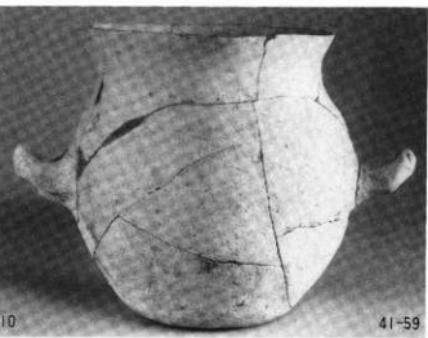
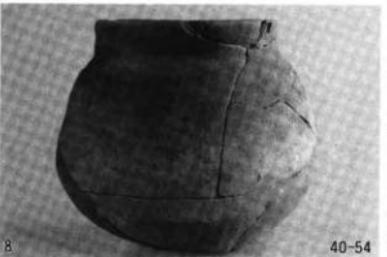
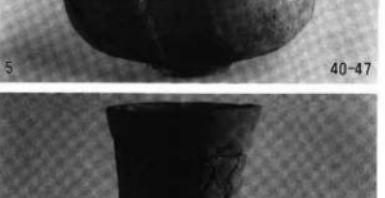




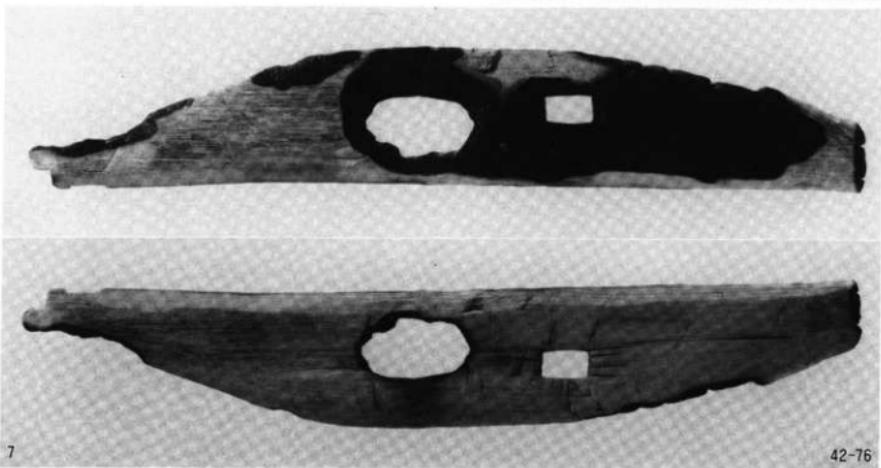
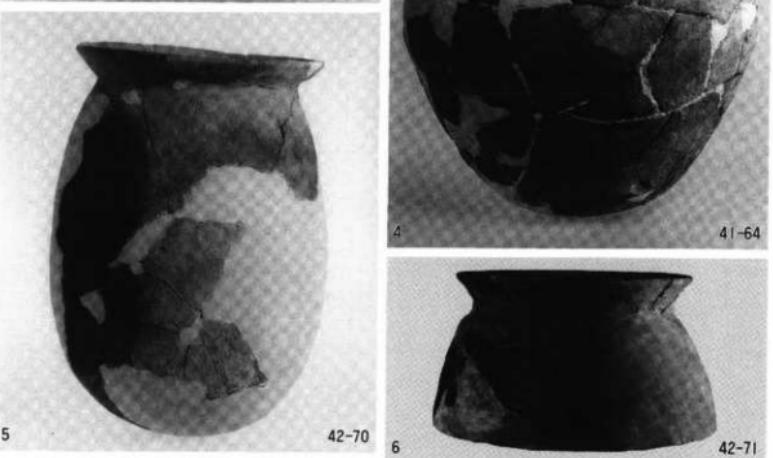
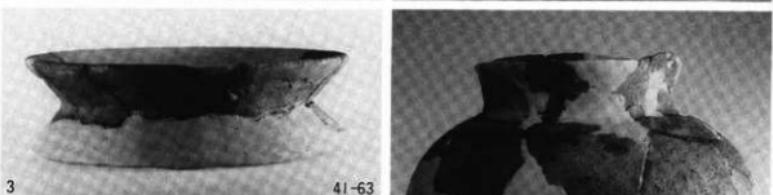
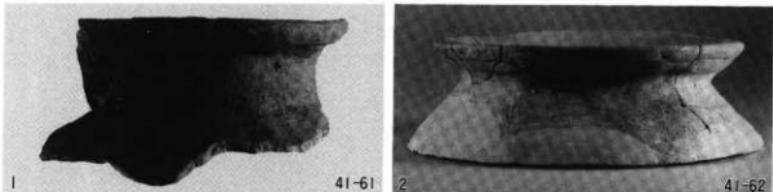




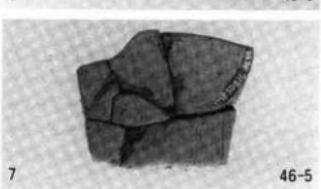
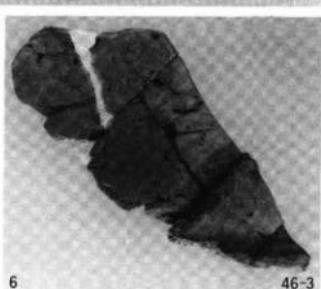
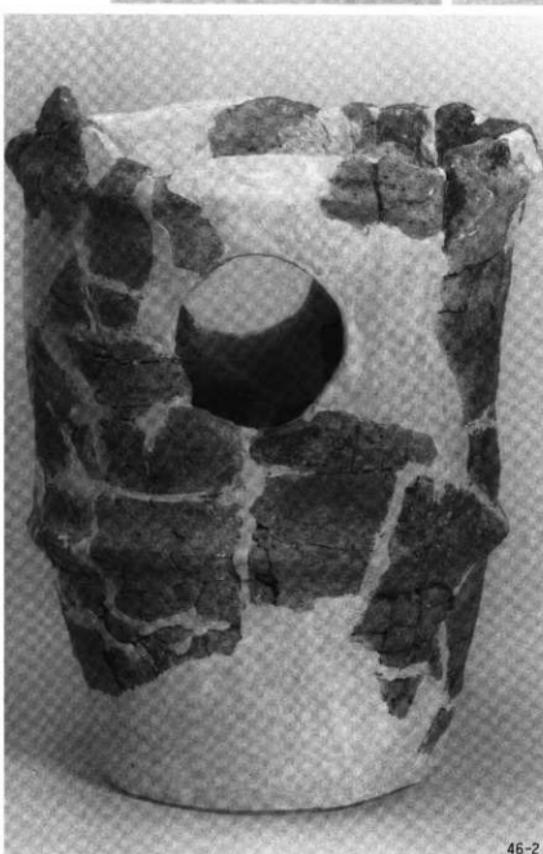
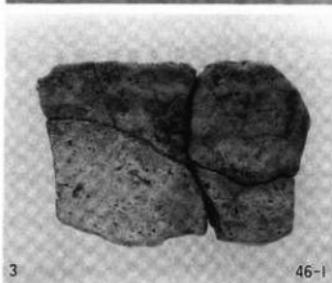
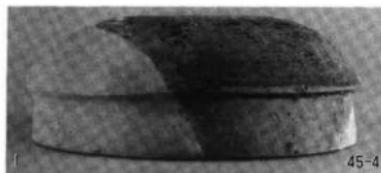




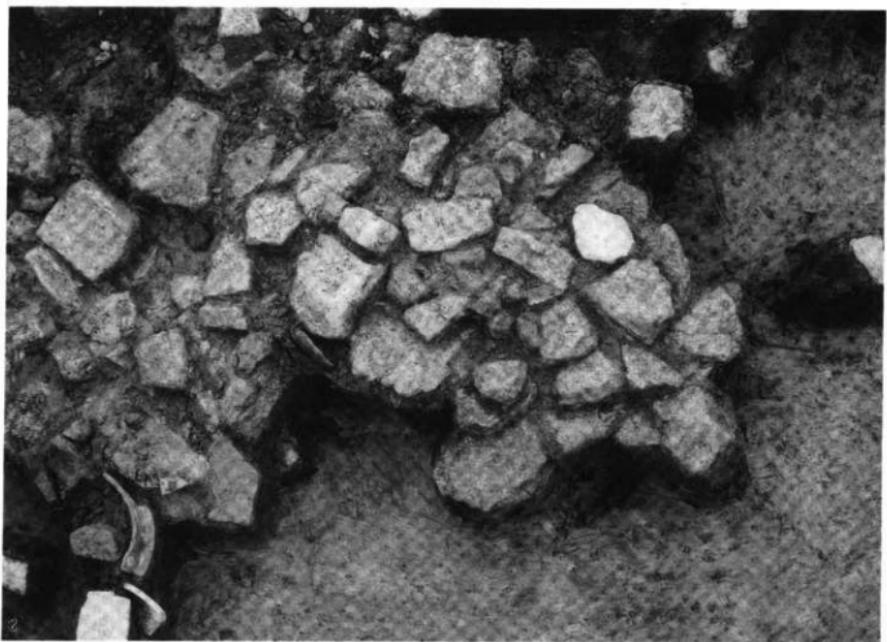
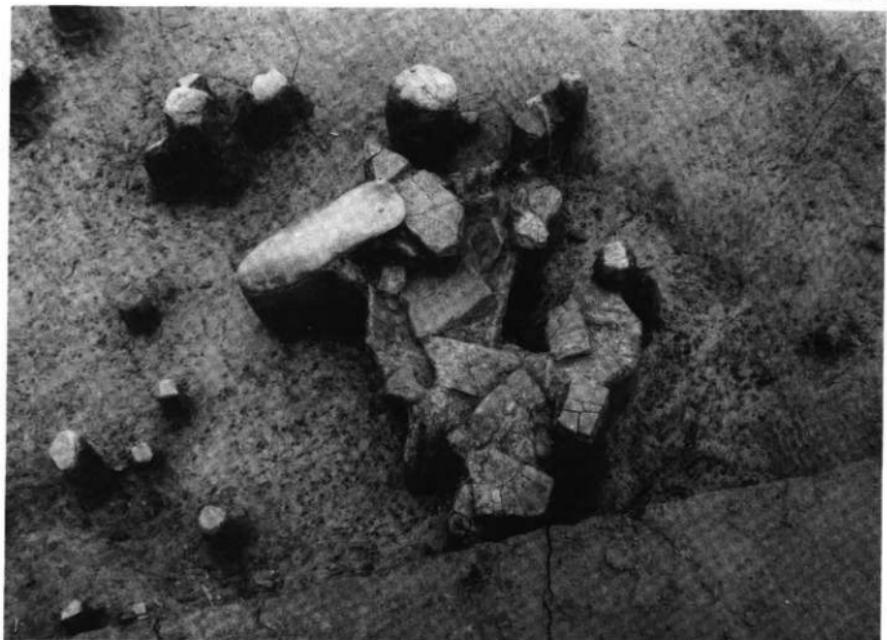
図版33 SD816 出土遺物 その5



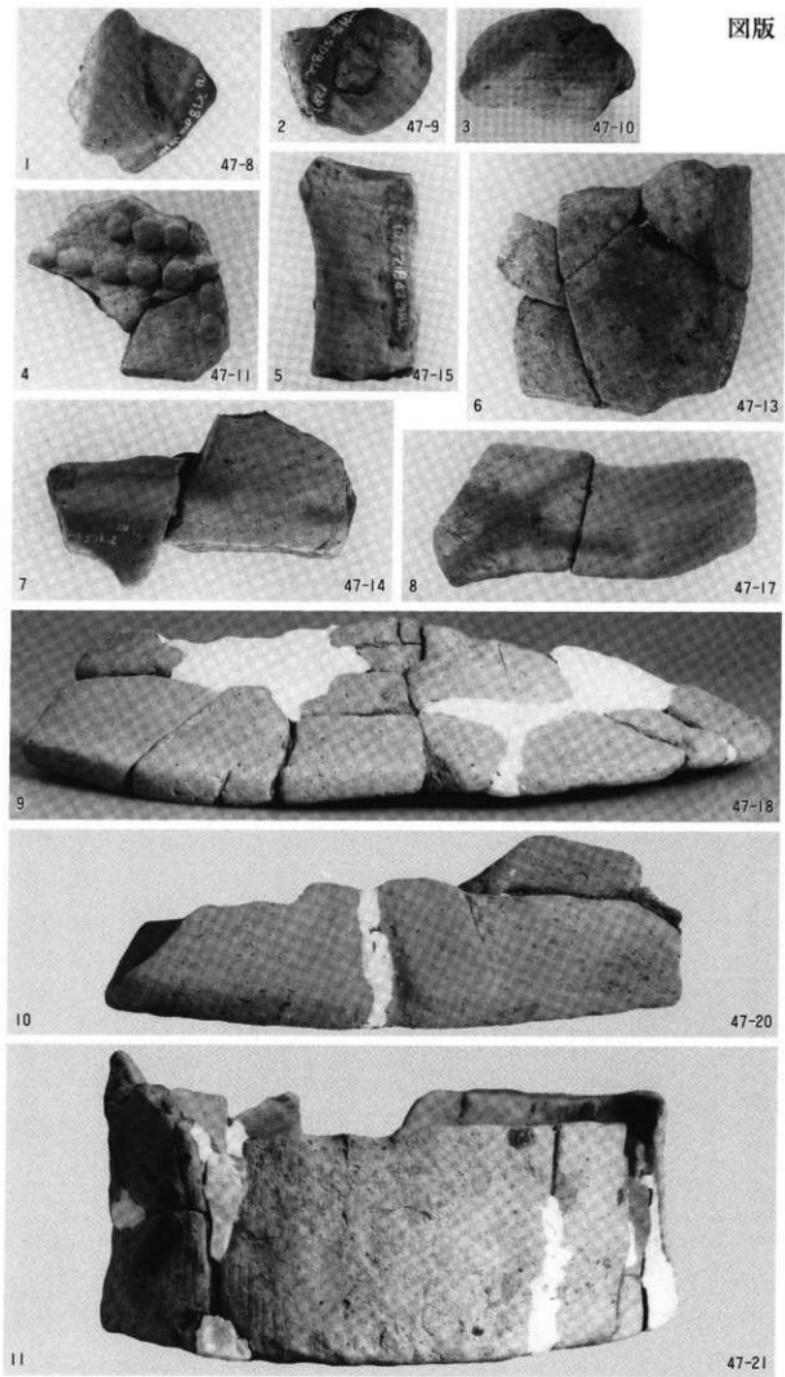
図版34 SD812 出土遺物その1  
須恵器(1~2)  
円筒埴輪(3~9)



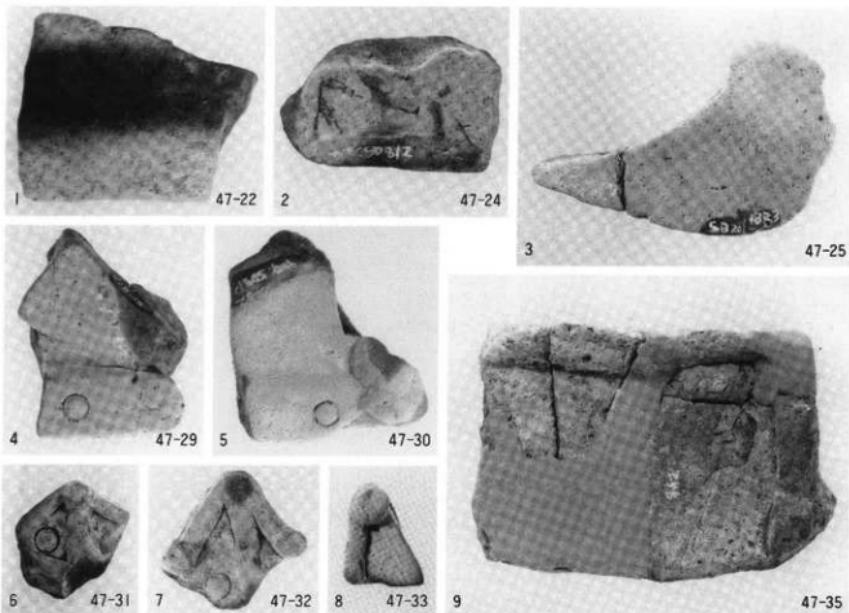
圖版35 SD812 塗輪出土狀況  
円筒埴輪(上)  
家形埴輪(下)



図版36 SD812 出土遺物その2  
形象埴輪(1~11)



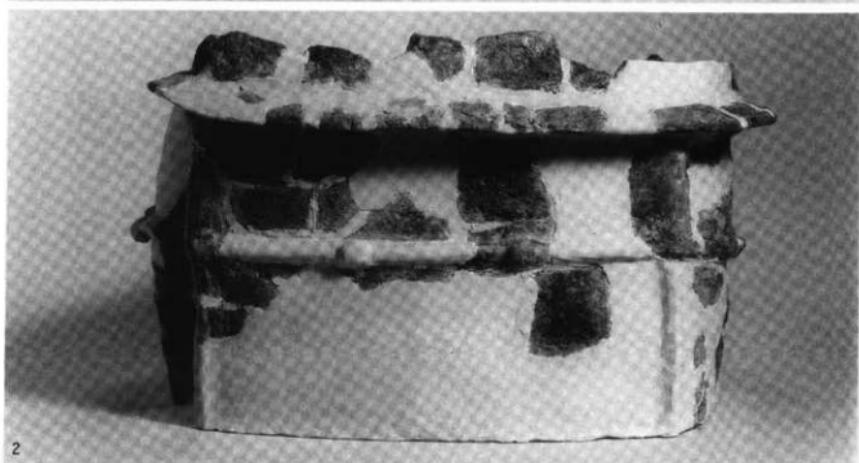
図版37 SD812 出土遺物 その3  
形象埴輪(1~9)  
家形埴輪(10)斜上ヨリ



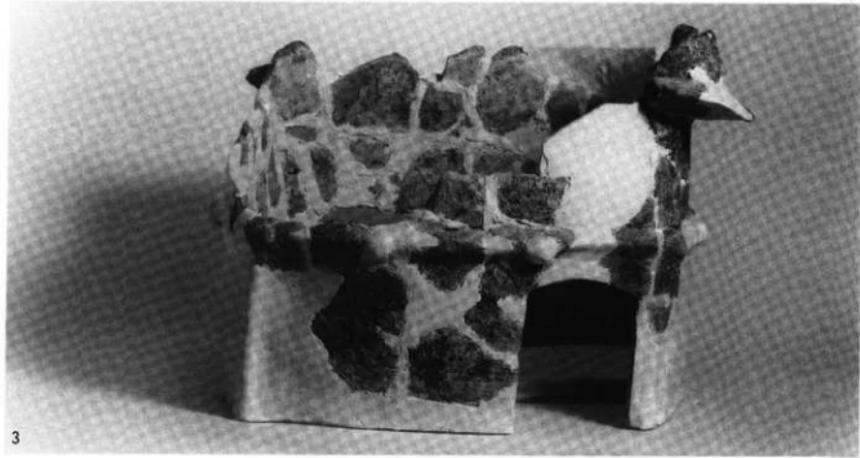
図版38 SD812 出土遺物 その4  
家形埴輪 1. 右側面  
2. 正面  
3. 左側面



1

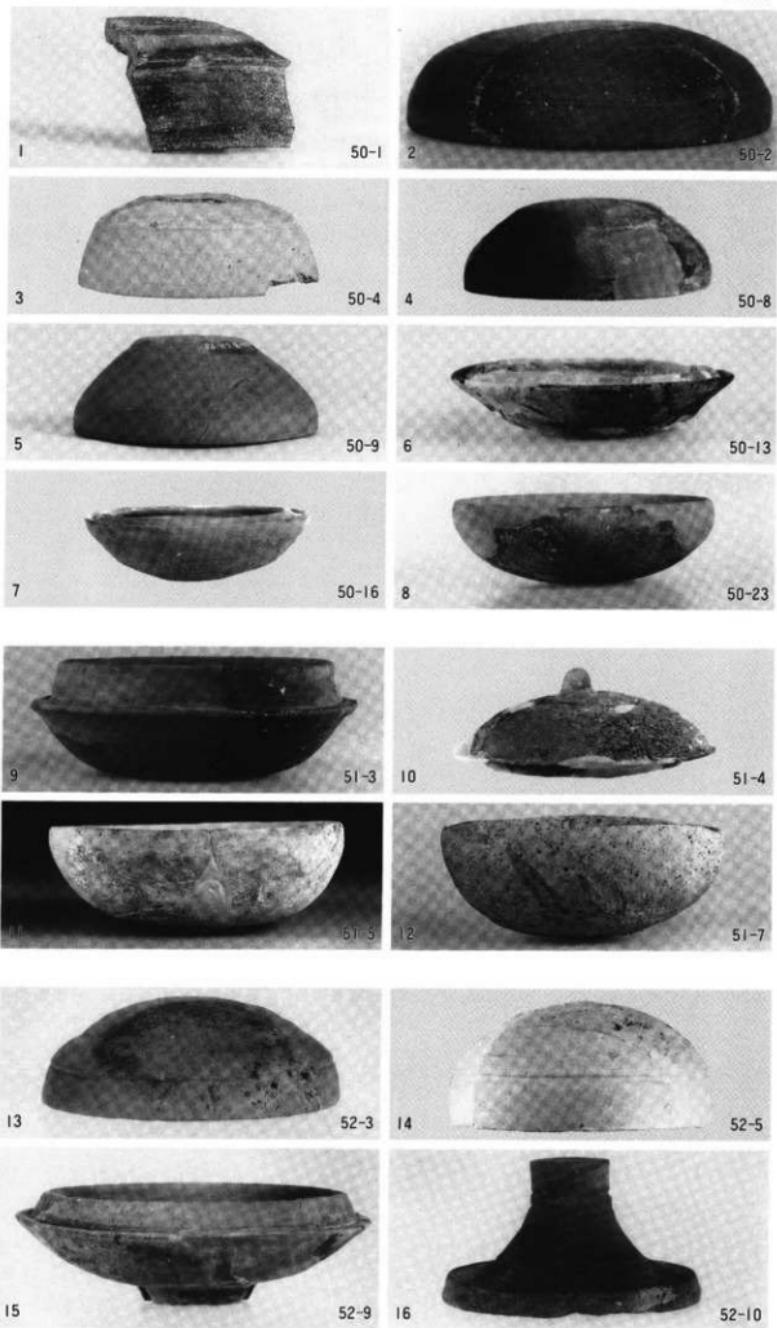


2

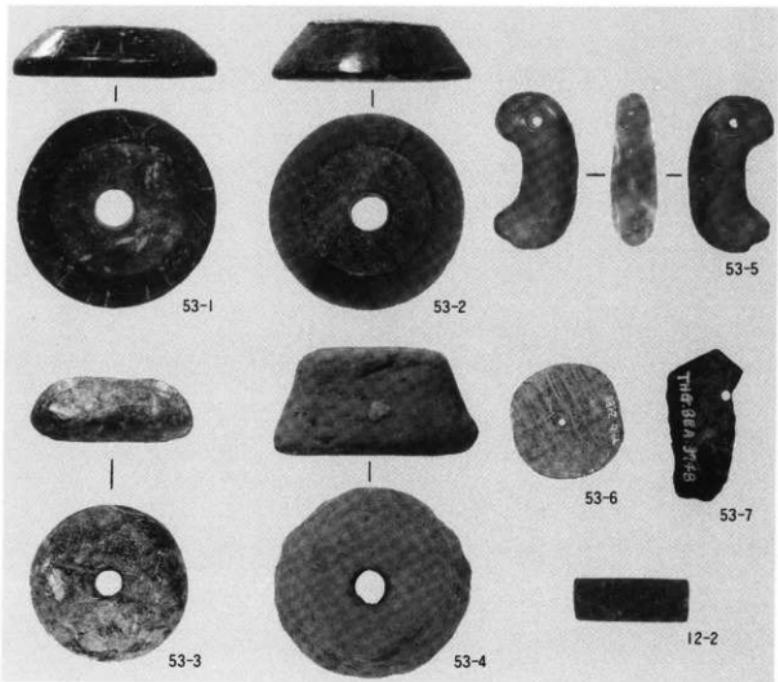
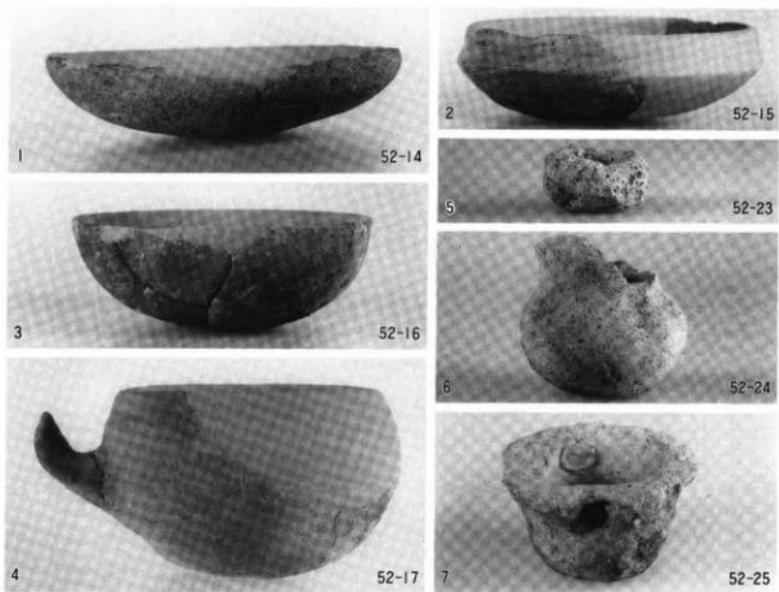


3

図版39 その他の遺物 その1  
西側部分(1~8)  
中央部分(9~12)  
東側部分(13~16)



図版40 その他の遺物 その2(上)  
東側部分(1~7)  
石製品・土製品(下原寸大)



## 原川遺跡

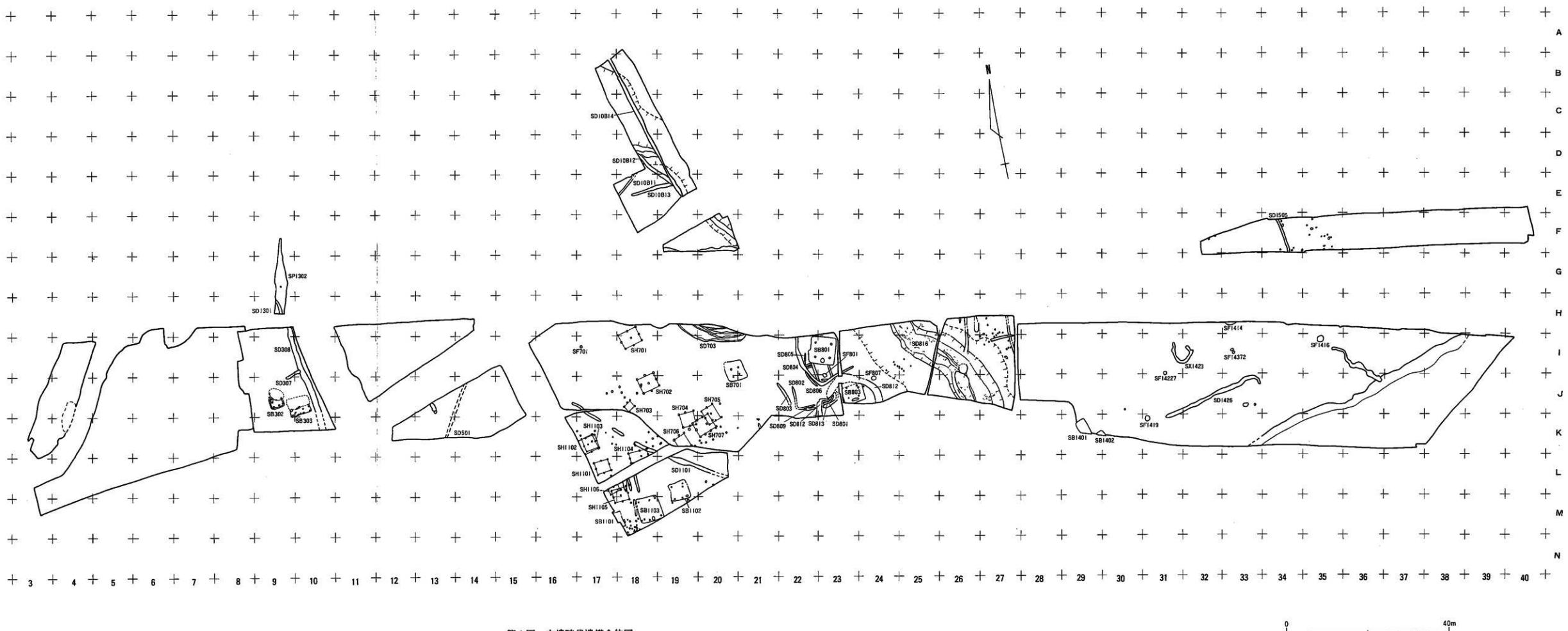
II

昭和63年度芦井バイパス(原川地)(X)  
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成元年3月30日

編集発行 財團法人  
静岡県埋蔵文化財調査研究所

印刷所 株式会社 三創  
静岡市中村町166番地の1  
TEL (0542) 82-4031



第1図 古墳時代遺構全体図